

川柳塔

昭和五十二年五月二十五日
創刊大正十三年通卷六〇〇号
印刷(毎月一日発行)



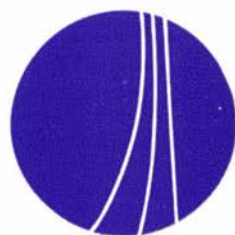
日川協加盟

No. 600

誌寿600号記念

五月号

麻生路郎先生 13回忌厳修と 「旅人」とその後の 作品普及版刊行記念



誌 寿 六 百 号 記 念

大 川
会 柳

日 時 昭和52年 5 月 8 日(日)

午後1時

会 場 森ノ宮労働会館 電話・941-6331代

(環状線森ノ宮駅、又は地下鉄森ノ宮駅下車すぐ)

司 会 西 田 柳宏子
開会の辞 川 村 好 郎

第 1 部

挨 拶 中 島 生々庵
講 演 「あかあかあかや」 東 野 大 八 氏

「弟子いろいろ」 堀 口 塊 人 氏

兼 題 「家 族」 田 中 秀 果 氏 選
「趣 味」 増井不二也氏選

第 2 部

講 演 「思い出二三」 右 城 暮 石 氏
「漂泊と定住」 小野 十三郎 氏

兼 題 「 信 」 三 条 東 洋 樹 氏 選
「ワンマン」 近 江 砂 人 氏 選

「旅 人」 西 尾 棗 選

(各 2 句) 一席題なし

閉会の辞 若 本 多久志

会 費 1,000円 (句集「旅人」普及版呈)

懇 親 宴 2,000円

主 催 川 柳 塔 社

男の顔

大阪での大相撲春場所を観た。勝負に生きる男の顔にはテレビで味わえないものがある。殊に負けて引き揚げる表情はテレビには映らない。くやしくてたまらぬ顔、テレ臭さそうな顔、負けるのが当りまえといったあきらめ顔等々、静かに見入っていると感じはこよなく深い。その力士の人柄とか、生活態度とか生地のまま伺い知るような気がするからである。句会での披露時間のあの瞬間等に、ある程度こうした雰囲気も必要ではないだろうか。

仲介を断り生きざまの顔きびし
絹糸草春のいぶきもつつましく
万策つき身の安全を老に賭け
就職線突破これからの長帳場
新入学俺の子の子だ孫の顔

親子三代阪大医学部

中島生々庵



川柳塔五月号

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(蕉風)

私の句

恋百句贈れるひとがひたに欲し

小島蘭幸

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

男の顔

中島生々庵 (1)

芭蕉と路郎

橘高薫風 (2)

俳風柳多留廿五篇研究

(十四)

(36)

清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮
鈴木黄・室山三柳・入江勇・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

中島生々庵選 (4)

水煙抄

菊沢小松園選 (42)

麻生路郎物語

(29)

東野大八 (33)

秀句鑑賞 (同人吟)
(水煙抄)

若本多久志 (41)

愛染帖

香川醉々 (88)

好恋喜利会覚書

堀口塊人 (30)

「人間陶冶の詩」の意義

戸田古方 (84)

誌寿六百号を迎えて

中島生々庵 (22)

芭蕉と路郎

橘高薫風

路郎は川柳界の芭蕉である。これは、今初めて私が云う言葉ではない。嘗て何度か聞いたことがあり、また何かで読んだこともあるような気がする。芭蕉は、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」と、おくのほそ道の冒頭で述べている。芭蕉は死と向き合った旅で己を磨いた。おくのほそ道の、飯塚や尿前の関、越後路のくだりにある難渋ぶりは、われわれの想像に余るものがあつたろう。元禄七年九月はじめ、郷里で「続猿蓑」の編集を終えた芭蕉は、奈良を経て大坂へ向うが病気がちとなる。その頃の句は実に淋しい。

此の道や行く人なしに秋の暮

此の秋は何で年よる雲に鳥

そして、十月五日、花屋仁左衛門の屋敷で

門弟に看取られながら息をひきとる。辞世は

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

路郎の句集「旅人」は、おくのほそ道の冒

頭の中の二文字を藉りたものに違いない。初

めて職業川柳人を宣言して家族と断崖の上に

立った路郎は、芭蕉の旅と交らぬ峻しい人生

六百号記念誌上同人句集

女シリーズ

「る」止めの句

ある笑

作句姿勢に思う

一分間の柳論

雅号ぶっちゃけ話

初歩教室

大萬川柳「ゆとり」

柳界展望

本社四月句会

各地柳壇（佳句地10選）

「デ モ」

一路集「新 茶」

「鵜」

編集後記

西尾 葉・川村好郎
正本水客・菊沢小松園

菊沢小松園 (24)

直原七面山 (27)

黒川紫香 (29)

鈴木村颯子 (32)

三宅不朽 (33)

堀江正朗 (35)

本田恵二朗 (38)

川村好郎選 (40)

大矢十郎選 (42)

森井菁居選 (44)

野村岬月選 (46)

越智一水選 (48)

(三夫・葉子) (107)

座右の句

寝転ろべば畳一帖ふさぐのみ

私の句

行水は一人ではない南無大師

(路郎)

藤田 頂留子

の行旅を続けた。昭和四十年七月喜寿を迎える路郎は、三月末肝臓障害で入院した。

ドック入りこのボロ船をどうする気がみつくほどのこの世でなかりけり

五月十四日ひとまず退院したが、

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後から

と、すでに死を予期していたのである。

川柳の社会化運動と一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐ

さに、歩き続けよう。と旅人の自序に認めた

路郎は、その年の七月七日の夜、卒然とこの

世を去った。辞世の句は、

臨終が冬ならいろはおくりで逝かんかな

雲の峯という手もありさらばさらばです

の二句で、川柳に手を染めてから六十二年

と二カ月だった。路郎は前年の歳末の言葉で

一九六四年を回顧すると、病軀をひっさげて、

よくも闘って来たと思う。ことはオリンピック

の聖火が全国の村から街までを揺がせた

が、柳壇もそうあってほしいと思った。そして

アベベのようなたくましい柳人が出てくれ

たらと思った。その時はビリでも走りつづ

けたあの男に私になっても悔いはない。と述懐

している。

「川柳雑誌」から「川柳塔」に引継がれて通算六百号、路郎の心残りに未だに報いられぬ身は慙愧に耐えぬ思いで一杯である。



中島生々庵選

大阪市 本多柳志

働いたうまさを掬う鍋料理

成算があつて笑顔で向い合い

借景の佳さも家賃へ織り込まれ

成金で戻った歩にあしらわれ

三味線の方で慌てる芸の幅

浮気など出来る余祐のなくくらし

大阪市 津守柳信

不況風退散させる花見酒

手に職があつて女の口ごたえ

おひな様飾ってママが若返えり

ばあちゃんと呼ばれたくない職に生き

偶像の剥けない距離を持ちつつけ

島根県 錦織文子

韓国の教子より

航空便抱いて独りの幸にいる

追憶の二十代 我若かりき

精いっぱい生きてて虹に色がない

展示会みんな溜息ついただけ

七福神飾り家計は赤のまま

倉敷市 野田素身郎

もう朝かと思う月曜日の寒さ

無理からん愚痴だがすこしくどすぎる

ホステスの薄着もサービス料のうち

二三日たつてその夜のことを責め

一切の音消し作句に耽りたし

倉敷市 小幡里風

父と子が漫画になった嬉しい日

フットライト浴びる前向き後向き

切り札が女ふたりにある妥協

明暗のドラマ地球に裏があり

歯車の破調を正す子のタクト

倉敷市 稲田豊作

孫泣いて諸経にまさる犬の葬

大物の偽装 法螺貝吹いている

片手間に細君孝行如才なく

有限資源 果ては子供が産めずなり

足並みの揃う家族に追い抜かれ

倉敷市 水粉千翁

踏みしめて進む昨日の音でなし

幸せの夢をくすぐる桃日和

人並のくらしへ向いて箸の位置

ふるさとを捨ててはならぬ靴を履き

せせらぎに雲は沈んだまま語り

出雲市 原 独仙

物騒な列島寒波まで異状

情報時代の情報嫌なこと

出張の行状隠すため土産

灰皿が密談限なく聴いていた

置炬燵相和して静 隠居部屋

岡山県 嘉 数 千代香

無防備な生活に伴せがあふれ

いつの日か樹氷の溶ける日を信じ

バックミラーにわたしを写す時哀し

灯を消して壁の白さの私語を聞く

台本もなく未完の川流る

尼崎市 黒川 紫香

置き去りにされた土蔵の屋根に草
きびしさを日本海の巖で見る

山逢いに雪が解けこむ奥吉野

奈良古梅園

採煙の燈芯風を寄せつけず

音戸の瀬戸

大橋の下で渡船の話し声

守口市 野呂 右近

裏切らず凍てた土から出た新芽

小さくとも得た物尊ししかと抱く

二人だけの日は長生きを願ひ合い

長生きをしてねと孫も聞き覚え

ぬくい日も冷たい日もあり二人の手

神戸市 仲 どんたく

寡婦となる日の白き衾合わす

命綱沈む女に見当らず

白梅へ雪の白さが気に入らず

おのころ島のように新島まともらず

孫の絵へ画伯ははたと膝を打ち

東大阪市 桑原 喜風

勇敢な娘になってブーツ履く

親方について団結する拳

また元の他人架らぬ橋となる

母の持つ鈴は一番冴えて鳴る

曇る朝 日の出矢張り掌を合わす

黙ってる母が一番たのしそう

富田林市 和田 維久子

一億の中の一人が見つからぬ
一期一会みな邯鄲の夢なりし
一円貨素直に拾う女です

ひとりごとつもの二月の風邪葉

八尾市 高杉 鬼 遊

自転車に夫婦で食べる米を積む
体温計熱のないのも不思議なり
口紅をつけ冒険をしたくなり
日の出今日いつもの老婆見あたらす
二枚目の舌は器用に裏がえる

守口市 羽 原 静 歩

一周忌すむと寂しさ待っていた
適当に相槌打って逃げている
日本中歩いてみたい旅心
ネクタイの幅ゆっくりと若返る
真打の扇泣いたり笑ったり

鳥取市 河 村 日 満

素顔知りぬいて愛あり老夫婦
うれしきは病妻の叱りが舞いもどり
入院をするかと威してもみたり
病軀なおお蔭さまでと言える幸

父の三十三回忌

笑声が一日三十三回忌

新宮市 大 矢 十 郎

戦争をいやで済むならわしも言う

権利證が増えて欠けゆく人間味
すぎ焼へ味を任さぬ父がおり
何処へ発つ女か財布二度のぞく
私の完敗ですと損をせず

大阪市 西 出 一 栄

春なれや蝶の多情を許す花
伊達眼鏡一寸バランスとつてくれ
夢いっぱい鞆につめて春の旅
せつかちが自分の院号考える
あの世への地図はどこにも売ってない

八尾市 大 路 美 幸

真実をあんまり搜すと嫌われる
トロフィへ背なの拍手が責めてくる
野良犬と知らずに開く自働ドア
だんだんと縦の生活に慣れてくる
ふるさとの鈴は生涯鳴り止まぬ

鳥根県 堀 江 正 朗

合掌は小さな倅せ祈るだけ
芽を出した順に草の名教えられ
彩聞いて箸においしさ増してくる
若く見えますねと年を聞いてから
背を伸して春の息吹きを独り占め

鳥根県 堀 江 芳 子

嬉しくて転げる涙なら見せる
もつと倅せにしてあげたいな 寝顔

人形に着物させたら孫に見え
もう五時か夫つぶやいて日暮れにし
聞き馴れたいびき倅せ転がして

八尾市 香川 酔々

Z旗にすぐ雑兵は慣れてくる
進んでる時計で遅刻する男
士に生き信義を胸の奥に持つ
政治家の嘘が見えてる硝子窓
丹念に尺取虫は地を測かる

大和郡山市 森田 カズエ

正直な人もいますと声の欄
ストレスの解消母は髪染める
職安が興味ありげに訊いている
鍵束と云うほど鍵の無い生活

九州旅行

洗濯岩鬼千匹が何洗らう

大阪市 川口 弘生

職人氣質支える妻の社交性

五十億年の地球に百年足らず住み
読み慣れてまだ行間が読み切れぬ
色メガネで見慣れているのかも知れぬ
診察を待つ間にノドの骨がとれ

宝塚市 傍島 静馬

あこがれの秘境に方言消えていた
環境に慣れてじわじわ朱に染まる

本妻ではないと宿帳思えども
正札を外し忘れたふりで見せ
食べてきたはずの奥さん箸置かず

竹原市 森井 菁居

紅梅の匂うあたりに春の音
勝運に恵まれ爪研ぐのを忘れ
皿洗うとき共稼ぎ自覚する
早春の嘘をお世辞として許す
動物園お子様ランチが美味い昼

泉大津市 村上 春巳

二〇〇海里いわしを食べる稽古する
二級酒にしかと妻の顔を見る
いつも来る雀がつれて来た雀
集金屋春一番の汗をふき
菜の花や大和三山霞みたり

竹原市 小島 蘭幸

再会の女性もひとりでいた救い
普段着で逢うて言葉飾らない
苦勞知らずのすらりとした脚の線
合鍵を渡しあなたに賭けてみる
まじめ人間の無表情が恐い

大阪市 金井 文秋

萌ゆる春人工芝に春はない
残り物で今日も間に合う老夫婦
常識の中でとりこになっている

アドリブが要る人生のハプニング
騙されてもいいと云う程惚れていず

大阪市

河野君子

自分の心に素直で小さな嘘を云う
曆繰る母のころになつてゐる
飼ひ殺しの鬼一匹に欺かれ
莫迦になろうそんな思ひも年の功
如何に夫を働かさんと菜を盛る

大阪市

小出智子

花の種利口に生きるすべを知る
一対一の強さが妻の方にある
ごはんつぶ母の心が解りかけ
夫の靴も妻の財布も疲れ果て
里帰りすればと桃の花が咲く

泉佐野市

阿萬萬的

オモチャ箱に似てプレハブに雪が降る
松は松竹には竹の雪化粧
雪一面画になる位置へ来た鴉
雪深き湯の街寄りそうように屋根
薄氷の下は春呼ぶ水の音

神戸市

中村ゆきを

まず耐えるそんなことから始る日
ある角度冷たいものが見え過ぎる
ぐい呑みをまだ迷つてゐる清水坂
座布団を二つ折して寝る不況

理屈っぽい女ひざを組んだまま

神戸市 小浜牧人

子に渡す地図に矢印は書かぬ
行けど行けどバベルの塔は幻か
一歩ずつ確かに進む靴を買う
青い鳥はまだ見つからぬ定期券
自転車で三流社長忙しい

松江市 小林孤呂二

白鳥の去る日埋立起工式
答弁ものたりのたりと暖かい
娘が離れてからは冗談も減つてゆき
場逃れの言葉ちぐはぐで纏まらず
五十の斗志お連れより先に酔い

八尾市 宮西弥生

北風の死角で蕾の春支度
美しく見える鏡を女持ち
前歴をかくす標準語を探してる
善人の耳に素通りする噂
見送りがすめば女に糸切れる

八尾市 高橋夕花

見事な嘘へ拍手と造花贈ります
人の世の憂さへしずかにワイン飲む
春の雨そつとしておく他人ごと
泣き虫に夜がひと刻早くなる
眠いのペンが烈しく炎えてくる

富田林市 板尾岳人

溪下る斜めにふきのとうがある

此岸から手を振る父も山姿

山を踏むわたしをだます人がない

世界地図金剛山が立っている

金剛山笑えば墨絵が薄くなる

大阪府 大坂形水

偽装倒産二、三の先には話してる

どっちみち税に取られるからの寄附

売名家金生かすすべ知っている

面白くもない顔される四月馬鹿

ワンマンになれぬ血液型である

大阪府 不二田 一三夫

心齋橋 なんの心配もない顔ばかり

買って貰えんオモチャを振りかえり振りかえり

水色の布の下には波の役

通夜へ来て笑わせたのがいっち泣き

「貧乏」を「貧亡」と書く人もいて

大阪府 太田良子

先代の雛は間借りで狭う住み

手料理が恋しくなった旅疲れ

中退と書く履歴書がちと淋し

会計が開きなあった物価高

米子市 小西雄々

蛇がでてコースを変えたハイキング

デモ行進うしろは義理という歩み

負けて勝つことも覚えて管理職

桐下駄の感触うれしい齡となり

今治市 月原宵明

叱らない父へ黙って酒を酌ぐ

中庸を行く平凡を日々愛す

エプロンをはずして主婦から妻になる

とまり木で酔っているのが素顔かも

岡山県 直原七面山

戯れの恋に身を焼く

愛の小窓を濡らす春雨

金の事には触れず逢曳

過去は語らぬ美しき妻

東大阪府 落合思月

いびきにもリズムがあつて可愛い孫

子の罪みなかぶりたい母心

迫力があるから女ついてくる

果しない夢を積んだりくずしたり

伊丹市 樫谷漫柳

お上品だけを残して行く斜陽

想い出の恨みは根雪に埋めておく

親友はさすがに痛いところを避け

六十の男は目出度い泪だけ

藤井寺市 児島与呂志

なんとなく襟巻きはずして春を出す

モカルームワルツ流れ花の頃
旅ひとり静かな部屋で寝付かれず
匂う春雀が朝から騒がしい

宝塚市 小 畠 無 聖

お喋りの新芽ならんで春詩う
浮世苦を忘れて抜けるにじり口
頬ずりをしたい茶碗の肌を抱く
人間のぶざま主客へ身を正す

生駒市 草 深 醉 升

安泰で漬け物石も引き継がれ
やけ酒が飲めない妻が不憫だな
失業の閑居へしきりに槌の音
春嵐ビルの谷間で立ちすくみ

豊中市 戸 田 古 方

三四羽のほどは折れたが千羽鶴
回復期不細工な鶴折ってみる
礼らしい礼もいえずに別れて来
デジタルを見そこなうほど慌ててた

和歌山市 小 川 佐 知 子

ストーブのあるお茶の間に先ず招じ
秒針の音さえ胸に杭打つ日
まだ年をかくしたいかと冷かされ
病窓も明け放たれて春近し

愛媛県 渡 辺 曉 童

浄るりのさわりで不服きかせる気

ねた間に止んだ夜の雪の冷え
値でうらづける まがいにせもの
お値段だけは 本物を超し

今治市 長 野 文 庫

賄路だと思って欲しい御仏前
戦争で儲けたことは秘めておき
下り坂見くびるように毛が脱げる
夫婦仲潤れて世間に羨まれ

大阪市 河 井 庸 佑

若者をじっとさせない若葉萌え
身の程を知ってひかえめにひかえめに
昇進へいやな社会を見てしま
怒る事知らぬ人かとふと思う

高槻市 若 柳 潮 花

外科病棟にて

回診のナース自信のピンセット
窓へ来た雀のまぶたふさぐ雪
白百合の匂い病棟の灯に動く
くばられた花が牛乳瓶で咲き

堺市 高 橋 千 万 子

耳の日に耳をいたわる術もなく
落ちついて受けよと父が背をたたき
念願の料理に座る京の寺
タンポポの綿来年はどこで咲く

和歌山市 津 田 与 史

一万円ふわりと春の風に乗り
世間体構っておれぬ春無職

雛流し

流される雛にも淋しい顔がある
馬鹿になつて見れば世の中又楽し

岡山市 時 末 一 灯

呟けば独りへ闇が寄せてくる

昂ぶりの足自動ドアになだめられ

加入者は妻一人ぼくの後援会

おしほりの湯気にやんわり宥められ

鳥取市 大 塚 豊 生

豪雪を確かめて来る子の電話

もう一度出直す夢に住む余生

病名を不意に貰った日の動悸

雛祭り老母も女に立ち返り

守口市 村 田 瓢 太

嫁ぐ娘へすることもなし男親

孫の成長喜ぶ分だけ年をとり

寝る暇のない程ガイドよく喋べり

耐えて来た道ふりかえる楽しさよ

青森市 工 藤 甲 吉

芒洋として大物と間違われ

泥人形きらめくものを内に秘め

デラックスなやつに賽銭箱を替え

正直がすっぱりはまる陥とし穴

法律の裏の裏行くニヒリスト

キャキヤと歌はどうでもいいファン

君は君僕は僕と割り切つて

入歯までの抜歯へ妻の無口なり

柳井市 弘 津 柳 慶

芽吹くものみな芽吹き誠実さを語る

真実の自由を求め亀となる

過去を語る人の流れに洗われて

一億分の一で柳の芽の如く

柏原市 大 峠 可 動

損やなとある日の無口自覚する

千羽鶴千の祈りを信じよう

真実を聴くアンテナを高くする

ひとり住む女ひとりの香が寒い

松原市 玉 置 重 人

青春の花老いても咲かせたい

とまり木に老鳥二羽春うらら

大正 昭和 柳詰ひもどくひとり言

悠々自適年金を抱くさびしさで

松江市 岡 崎 祥 月

うららかな陽にスケジュール変えさされ

唇の色が言葉になつて春

初対面言葉にベール着せに着せ

堀の水のような老後をとび出たし

倉敷市 田 垣 方 大

イヤリング男手玉にとるポーズ

松江市 恒松 町紅

たとえばの話本気に受取られ

退職金のはなしそろそろ順が来る

どちらかが折れてしまつて夫婦老い

大阪市 山川 阿茶

自尊心まだあつたのか腹が立ち

顔いじりお脳の化粧忘れがち

晩鐘の農夫をうらやましく眺め

スーパ―に要ると一円大切にし

竹原市 山内 静水

赤い血が燃える小指を切つた恋

かかるとき勝手知つたる台所

妻ある日ある夜頭をなせてくれ

ぶんなぐつてやりたい相手へ妻は茶をすすめ

松山市 谷のぶ お

外づらのよさも通用せず落目

ふるさとの山に話せばゆるされる

公表をしない理由は言えません

青い空つくり笑いはさびしいな

松江市 中川 晃男

そうかそうかと聞いてくれてはつとかれ

残雪に春の日射しが遠い露地

見込まれた因果 定年を遊ばせず

慾望のない表情がゆたかなり

万がいの万の見方に上手下手

倉吉市 奥谷 弘朗

満洲に埋めた娘につづく思慕

核心に來て伝統がものを言う

一言の波紋見詰めている孤独

岡山県 出原 敬一

泣き上戸きのうの顔のやりどころ

土地売つた兄は大きな犬を飼ひ

ここに幸あり孤老のコップ酒

なみだして軒のつらは地へ還る

大阪市 天正 千梢

文明に疲れ土の香かぎに行く

危険を感じ追求手びかえる

永平寺の雪観音経のハーモニー

傷つけている罪の深さが分りかけ

呉市 榎田 英詩

渡つたら二度と戻れぬ思案橋

商人はソロバンはじいて妻娶る

妻子背に進軍ラッパ今朝も吹く

疲れてる妻の軀だそつと抜け

高槻市 福田 丁路

得体の知れぬ悠々自適

こん畜生が声にならないもどかしさ

日本の心を活ける紅椿

空は微笑んで団地の鯉のぼり

和歌山市 野村 太茂津

露ほどの虚構も隙もない境地
思い出と遊ぶ無口も罪に似る
老兵のつぶやき一途な驚馬となる
老兵が泣く倅せが甦えり

竹原市 時 広 一 路

花の私語集めて春の詩を綴る
島の灯の一つ一つに湧く旅愁
夕暮れの団地カレーの匂いする
捨てにきた心を海は氣に入らず

島根県 櫛 原 秀 子

嫁く話貰う話をきく春で
かげろうがゆれるかすかな子守唄
花活けて怒りは持たぬ女なり
さあさあ何からしよう太陽笑い出し

貝塚市 野 坂 つき子

ミツバチの出番へ春の風となり
思案する手からリングが逃げてゆき
陽の温み雑草の生命も抱いてやる
凡人を又欺して空涙

枚方市 宮 川 珠 笑

近道を急ぎ知人につかまった
三度目ももうこれきりの金を出し
係争の境界に出る路の臺
新しい肌着今日から職変わる

海鳴りの唄に岬の灯がまわる
押し花に淡い二十才の恋憶う
福耳と信じて貧に耐えている
不合格の子もいる合格伏せておく

鳥取県 川 崎 秋 女

月をまともに男と女傭を選り
旧道の縁側さく茶をよばれ
曳船のいよいよ遅々と春霞
祝い餅そのままにあり独り者

兵庫県 大 江 秋 月

遮断機の先にも春の風が吹く
灰皿のたばこも長い短かいの
腹案の通りに幹事座を進め
野猪防ぐ石垣に見る古い苔

岡山市 川 端 柳 子

鎖からはずせば一個の小さい輪
いやなことやですませぬから困り
ありそうでなさそでひとり言迷い

母の忌日に

鏡ポツンと彼女を写すこともなく

大阪府 中 川 滋 雀

オクターブ下げて電話は機微にふれ
五分五分の損で折れ合う長電話
香煲の重さに迷う義理がある

飛行雲過去が流れてゆく乱れ

大阪市 西川 誓二

よく回る独楽は邪心などもたぬ

尻馬に乗ってゐる自分に気が付かず

孫のおねだりには素直な財布持ち

人様のもの縫うばかりの簪け糸

今治市 越智 一水

膝を組む女それからいやになり

その時季の花で心があたたまる

あさり売り朝寝へ春を告げて来る

ウインドに妻と立つのも春の宵

京都市 松川 杜的

矢印を求めて六十路歩き出す

生命線六十路をじっくり考える

陵線を何色に塗ろうか京の早春

幸せなタンポポ羅漢の膝で咲き

大阪市 吉田 圭井堂

禁酒までして長生きの欲も消え

四海波静かに今日も冷凍魚

鷹の子の筈が子雀にも劣り

真っ直ぐに生きて残高ゼロだとして

松江市 柳 楽鶴丸

第一印象は嘘を申しません

引金を引く時は死ぬ時さ

娘さんの足もとにホウ春が来た

腹がたつと痛みなどつい忘れ

京都市 都倉 求芽

春風に聞かせる人もいない鈴

カレンダの絵から春がくる弥生

春の陽の長さへ腕時計慌てない

花だより何処も行きたい花ばかり

寝屋川市 宮尾 あいき

背丈くらべ七つの孫に勝つただけ

子の扉閉まると老の部屋孤立

娘の小言亡夫恋しや香をたく

昼は雪夜は満月に祝われる

(三月五日誕生日)
大阪市 柳原 静香

恋猫は血統書など知らぬこと

落葉焚く煙 故郷が匂うて来

一病をいたわり合って夫婦坂

心洗うように磨く鍋の底

鳥取市 佐々木 静泉

春の芽が根雪の下で萌えている

雪道は他人のペースで歩かされ

雪しんしん 蟻さん幸わせにいてますか

雪あけて新聞少年待ってあげ

大阪市 黒田 真砂

ヨーロッパの旅

雪白くかぶってモンブラン静まれり

人類の偉大さ思い知る廃虚

ステンドグラスノートルダムのみサの冷え
幽閉の昔を忍ぶロンドン塔

藤井寺市 西 い わ を

河童にも思い違いの川流れ
嫁ぐ日に娘他人の顔をする
もの言わぬ言葉であつたのか涙
意志の強さが片意地に変つて来

東大阪市 竹 中 肖 二

満開の牡丹夢みて苗を買う
彦根城迷つて梅の園に逢う
春闘にかり立てられた歩が重い
丹念に新車のうちは光らせる

島根県 榊 み どり

駄句一つ彼岸に供え空虚なり
人形の顔が夕日にないている
たばこやの娘恋しい販売機
雪どけの川なみなみと春のかお

大阪市 神 谷 凡九郎

どちらさんが男はんやろ二人づれ
馬鹿にこそ出来る仕事でありました
なと思う眼だらう時計みつめてる
結局はやっぱりに聞えて来た批判

島根県 藤 井 明 朗

腹立てて見ても世話役苦にしてず
若返り理由は女将が知っている
ぼんぼりが消えて散歩は酔うてくる
スタミナの献立 後妻の味になれ

大阪市 島 田 雄 峯

先祖代々と云うつるし柿
忘れたい過去が時々懐しい
人を憎まずとおさまつてもおれず
傷口をおさえてこんな人恋し

仙台市 川 村 映 輝

新しい表札えん罪晴れた朝
名物の饅頭生きてる城下町
平行線の議論頑固者同志
辞めるには惜しい職場でまだ独り

米子市 石 垣 花 子

表彰台コーチも同じ泪拭き
破門した弟子マスコミの波に乗り
職を持つ妻の若さに刺激され

大田市 藤 田 軒太楼

ふんざりがつかず憎性に縮じ込まり
見かけより芯がありそな優男
筆持てば流石明治は見直され

氷見市 関 美 子

形式の慣れぬ握手の指が冷え
早乙女へ 藤 むらさきの滝になる
母と娘に海 別べつに語りかけ

西宮市 藤村 ベ 女

孫誕生

バンバンザイパパの期待の男の子
福耳に自信を持って貧に耐え
柱となって生きた女の太い指

鳥取県 清水 一 保

友老けてさびし笑ったまま握手
我とわが明日を励ます詩と知り
神仏も親も駆使して試験パス

大阪市 神田 秀 峰

有難い説教守れぬ日を送り
ゴマスリが表彰される世の仕組
生きて行く道は遠くて愚痴るのみ

大阪市 有 信 新之助

緊まりのない顔が還暦から好かれ
このベルは厭な電話とよく当り
浮世絵のうなじを見たり入学式

鳥取県 鈴木 村 諷子

心中のデンデン虫が角を出し
サーカスの母にもあった人の親

春来ると雪の下から路のとう

下関市 国 弘 半休門

沈黙の堪忍袋を一人切り
神域が埃かぶって道路出来
竹藪の雪跳ねかえる陽射しする

貝塚市 行 天 千 代

髪梳いて今日一日を生きて見る
のんびりと暮せと我に言い聞かせ
陽光を求めて花も伸び上がる

和歌山市 沢 山 福 水

一隅を照らす社長の人間味
三月の風に裏切る葱坊主
脱皮した蛇が世相へうろたえる

倉敷市 能登原 白 水

折れ釘の文字から母の愛匂い
地下足の味なつかしむ父であり
矢面に立つと切れ味見せる人

大阪市 室 谷 徹 舟

信仰を妻と語らう日の平和
こちらでは雪も風流下駄の跡
人生の縮図をここに発表日

倉敷市 藤 井 春 日

春風は嬉れしクルクル風車

しんしんと冷えてる家計を何とする
期待した金の卵に職が無い

東大阪市 斎藤 三十四

割烹着勝手の声を聞きわけける
丈夫な子生めよと地玉子を里の顔
青い眼が上手に日本語でかせぎ

竹原市 鈴木 かつ子

寒暖へ挑戦朝の靴をはく
幼稚園もう大学へ親の夢
ほめられてほめてやること教えられ

橿原市 岩井本蔭 棒

山小屋の毛皮に秘めた武勇伝
参拜の帰りのバスが川に落ち
精一杯短かい春を蝶が舞う

鳥取県 森田 布堂

二百海里敗北という線引かれ
真夜中の水子地蔵に掌を合せ
写真二枚並べて口説く嫁の世話

和泉市 西岡 洛醉

ひっそりと野の花寡婦の心かも
愚痴っぽく成って老坂息が切れ
かたくなに閉じれば世間冷えたまま

島根県 大森 孝華

風雪にともに耐えた掌いとしがり
音もなく散った木の葉のあわれとも
浮草よ波の姿へ身をゆだね

和歌山市 内芝 としよ

諦めたはずが鏡の中で燃え
三界に家なない女が強くなり
触れた掌の硬さに母の日々を知る

島根県 小砂 白汀

餌さになるだけの蛙の澄んだ瞳よ
訣れかも知れぬ別れの白い手よ
無人駅ぼつんとひとり降ろされる

米子市 増田 竹馬

口下手の親切胸にジンと来る
長尻へ牽制球の時計見る
不器用な仕草の中にあるまこと

鳥取県 林 露杖

春の雪雫となりぬ遍路笠
春うらら隔日通院ペタル踏む
耳学問それから先が判らない

東京都 山根 白星

煙草の火ズボンにあわてまいことか
陳情のビラを駅までせめて持ち
譲り合う強さ弱さも酒のこと

和歌山市 若宮武雄

退屈な男が浅瀬ばかり歩く

大阪市 神夏磯道子

九輪の先に閑かな空がある
冬生きる蠅の氣力を叩くまい
ふだん着に沁む体臭は偽れぬ

唐津市 新岡回天子

十年で親子の位置が逆になり
人情で法を曲げたいこともあり
ホルモン屋明日の力売っている

京都市 山本規不風

売れぬ店色の哀れな物が有り
長男は狭い土地だけ守り生き
散歩道日課で歩く楽隠居

平田市 久家代仕男

雪どけを待つて樹木のはずむ息
ポット押す精一杯の母に老け

大阪市 西森花村

批判して来た因襲に馴染む歳

姫路市 梅谿庵不酔

何もない春は淋しや申告書
ふる雪の中の中のお地藏さん
観光バス故郷の夢をふみにじり

大阪市 横地雅風

何もかも言いつくせずに生きている
飲まされて口這べらした古い傷
酒の量ちゃんと印して妻出かけ

大阪市 本間満津子

ビル移動さすよう蟬へ蟻の群れ
余裕持ち過ぎていつしか押し切られ
おしゃべりも喉で止ったプライバシー

堺市 伏見茂美

また安もん買うてしもうて忙しゅうて
お姉ちゃんになる孫乳房にそとくる
新緑に肺までみどりに染まりそう

富田林市 岩田美代

他人めく妻を忙しく見つめけり
この歳で少し欠けたる愛のつぼ
啓蟄に犬からノミを移される

羽曳野市 塩満敏

無人駅降りて弱音を吐きに行く
札束を持つと小さくなる男

七人の敵に別れてうがいする

奇声を発して青春の意志表示
梅林の白さにたそがれハイウエー

岡山県 竹内 翁 童

結果待つ心細さはしゃいでる

大自然にさからう時差になやまされ
馬鹿にした風邪が余病を連れて来た

大阪市 那須 鎮 彦

これからは二人の夢が育つ城

夫婦箸「あんた」「おまえ」で恙がなし
鍵穴は孤独な音を繰り返す

大阪市 藤田 頂留子

大都会を怪獣にするラッシュアワー
風雪の影 石ころに有る丸み

やよい今日小さな庭にも春が来る

鳥取市 両川 洋々

奇跡のように吹雪く深夜の列車着く
肩よせ合うて不倫の対話とは見えず

憎しみも怒りも豪雪白く塗る

鳥取市 小林 由多香

悪友の一人に俺の名があがり
昂ぶりへ眉墨うまくのつてこず
卒業証書にビリとは書いてない

滋賀県 溝口 はやを

混浴のしなびた乳で遠慮なし
第二便ころりと変る詫びの文
そのことに愛情がある堅い口

和歌山市 垂井 千寿子

雨降れば雨の予定が待ってます
やわらかい日射し椿を孫と待つ
亡き夫の話は避ける寡婦二人

玉野市 小谷 仙山

スキー場一ツずつ消え花便り
其の気持わかる目高の二三匹
ハイと言う言葉に表も裏もない

西宮市 若林 草右

当らぬときまれば頼りになる予報
森羅万象そっぽを向いて句にならず
生と死のしじま病室は春の外

兵庫県 遠山 可住

陽が沈む一日ごとをしめくくり
しゃべらないマが絶妙の芸にする
早咲きのすみれみつけて風渡る

大阪市 江城 修史

羽搏いてみたい日もある青い鳥
腐れ縁だんだん鎖が重くなる
生きて行く為の媚とは悲しすぎ

東大阪市 竹中綾女

半疊の上手に劇盛り上る

ついで欲しいのでついであげる酒

役割りをご破算にする風邪流行る

東広島市 高橋鬼焼

百円のぬくみも春だ販売機

ちえのない男で妻の辞書を借る

アスファルトこつんこつんと松葉杖

宇部市 平田実男

長男中学卒業一句

合格発表控えて落着かない証書

樹々の芽を三寒四温が慌わてさせ

「よしや」「よしや」と俺にもあつた軽はずみ

八尾市 内海幸生

七人の敵もつ倅せだつてある

造花供えて仏に会う気なり

花鋏 美人が持つと怖くなる

桜井市 岩本雀踊子

定年のかげりの朝の髭剃り機

地下足袋の暮しを恥じぬ父の旗

未練残す切手の裏に住む馬鹿で

大東市 土岐トク子

オメデトウこの日ふまえて羽搏けよ
オメデトウ見たいところが噴火する

初子待つ地蔵頭撫でつつ雪払う

美祿市 安平次弘道

すき見せて男心を打診する

思い出にひたると今がぐちになる

さりげなく後事託した日の決意

呉市 林野甍光

接点は遠く灰皿まだ変えず

予告篇見事に春の恋拾う

素面では言えぬ都会の灯が覗き

兵庫県 河原みのる

北の海くに取り遊びのように引き

移る世や武士の情をはき違え

親切に勇気要るとはなさけなし

川村好郎

ひとりでは画にもならない京の春

ストもあり助け合いもあり 春

喋るまい老いのひがみに取られそう

背信を重ね男になぜ賭ける

決算のやっさもっさへ花だより

菊沢小松園

雪やんで身の毛のよだつ冷となる

東外大卒総代息子へ祝電

(亡父)
(母)

ひとりはぐれてあやしきまでの月の暈
夜ざくらに女は悔のないという
生殖に遠い夫婦の枕許
たかが女に夜も日もあらぬものにされ

西尾 栞

入院のそれから点滴という処刑
病室の夜独房という目覚め
ウツウツウツウツウツ病室の昼
あつけなく入院初夜を眠りけり
又来ます握手の妻は他人めき

若 本 多久志

自分には許せぬことだが眼をつむる
羨まれるほどの余生と思わねど
言い訳はよせ 神仏はお見透し
おじいちゃんだからじいじとも呼ばれ
怒らない植物人間 それでよし

伊 藤 茶 仏

減税の虚像に景気の底が抜け
目を閉じて色即是空達磨の絵
ソツのない福田に人気落ちたまま
倒産のかばね踏んだり蹴られたり
道ならぬ道をヤングは振り向かず

尼 緑之助

足許ヘライト保革の綱渡り
ゴネドクの螺旋列島に風を噴く
葉桜に笑えぬマンガ週刊誌
売れそうな活字を組んで乱気流
いつしか若葉もつれたままのエゴ

浜 田 久米雄

木の芽立頃と病気をのさばらせ
どの辺にある内臓かまだ知らず
新緑が招くゴム長履くとする
節酒とは佗しきものか寝間が待ち
よく飲んだ過去は言わないまま節酒

本 田 恵二朗

エレジーとなって民話が生き続け
悲喜ともに分け合う友を持つ強味
月寒く影絵の島の寝息聴く
パスポートの旅の情緒をあたためる
ピーポーピーポー悲しい音の尾を曳いて

正 本 水 客

冬の枯野に銀の扇が置いてある
西の京 雪にうもれて音がなし
墨になる炎ならんで闇つくる
墨つくる灰の乾きが日々かわる
雪の壁ガンギは朝の薄明り



誌寿六百号を迎えて

中島生々庵

大正13年2月創刊された「川柳雑誌」から通算して、「川柳塔」が今年5月に誌寿六〇〇号を迎えた。大正13年といえば、干支の甲子、西暦一九二四年、ことしは昭和52年、丁巳、西暦一九七七年。人間の歳で数えろと53歳。まさに働きざかりである。そして「川柳塔」としては昭和40年に生れてから12歳、成人式を近くに控え、花なら蕾の淡紅色。一陽来復の象が匂うて来る歳である。

長い歴史のフィルムを一コマ宛逆回転しながら覗いてみるといういろいろの事が再現して来る。

前の年の大正12年の9月1日には関東大震災で、10万の人命が一瞬にして失われ、人々の不安はその極に達し、長い月日の間治安の回復には筆舌に絶する苦難の経験を強いられただけであった。こうした東京横浜を中心にして起った空前の人心荒廃の中に「川柳雑誌」

が発刊され、その巻頭には「誤れる川柳観を排す」と題して堂々の筆陣を張って居られるし、又「私達が川柳雑誌を発刊することになりました主たる原因は世間の人達に真実の川柳を知っていただきたいからです。私達は私達の知って居るだけのものをぶちまけて諸君が川柳研鑽の水先案内をつとめたいと思って居ります」と、川柳を熱愛し且つ、親心に充ちた麻生路郎先生の雄壮な姿が、私達の脳裡にも現在はいきり再現されるのである。

その後、大戦突入、敗戦、戦後と続く当時の血みどろな世情、出版事業運営の大難波の中ににつづけられる「川柳雑誌」のなみなみならぬ苦闘の消長記録は、東野大八氏の「麻生路郎物語」に極まるのであって、長く後世に残り輝く明星でありましょう。そうした意味で、福田山雨楼氏の「麻生路郎先生伝記資料」と共に、まことに貴重な、後進者にとってのバイブルであると確信するものである。

さて昭和40年7月路郎先生の長逝と共に「川柳雑誌」は終刊となった次第であるが、川柳不朽洞会員一同は相会し協議を重ねた結果、路郎先生が生前、機会ある毎に口にして居られた「我が生の消える時、即ち川柳雑誌社も終る」のお言葉を軸として、翌10月号から「川柳塔」を発刊することになった。来る5月六〇〇号を迎える事は、「川柳塔」誕生にかかわりを持った私共にとって感慨の深き到底禿筆のよくするところではない。時あだかも、路郎先生の13回忌厳修の機縁に会い、かねてから、私共の脳裡に去来していた「旅人」とその後の作品普及版刊行を企画し、併せて記念川柳大会を開催することになった。冀くば、大方の諸賢に私共の微意あるところをお汲みとりいただければ幸甚何ものにもたえ難く存ず次第である。一言ご挨拶申上げたく 敬白。



六〇〇号を迎えて

西尾 栞

恩師路郎先生の偉大なる遺産を継いで、川柳塔は本年五月号を以て、六〇〇号という誌寿を迎えたと共に、奇しくも、路郎先生の十三回忌という御年忌を厳修することになりました。

さて六〇〇号という喜びは単なる手放しで喜びでなく、寧ろその責任の重大さに愕然とする次第であります。

思えば、昭和四十年七月七日、路郎先生の御他界と同時に「川柳雑誌」を廃刊すると仰せられた御遺志が奈辺にあつたかということを考える時、今日この有難い誌寿を迎えるにあたって、そくそくと身に迫るものを憶えるものであります。

即ちこの稿を書くにあたって往年の川柳雑誌を繰いて見ますと、昭和七年の一〇〇号記念の朝日会館のあの世紀の大会の素晴らしさであります。あの当時で入場料一円也という金額と千名を越す盛況とには、他の短詩型文学の人達が唖然とされたものであります。丁度私が川柳をやって一年目で、こわこわ覗きに行きますと、水客、紫香、潮花の諸氏につかまって入場して見ると、その熱気になじじとした事を憶えております。余興には川柳座の芝居があり、又山根

寿子の新舞踊があつたりしてもの凄くデラックスな川柳大会でありました。

その後昭和三十五年九月号が丁度四〇〇号で、B5版七六頁という大冊でありました。誌寿四〇〇号を祝うという特別寄稿を、故川上三太郎、故岸本水府、故榎元紋太の諸先生外故六名の諸氏と、現存しておられる方では、石原青竜刀氏と石曾根民郎氏の二人のお祝いの原稿を載いております。その他各支部の近況発表振りを報告されているし、光輝ある、四〇〇号を迎えてという座談会も掲載されて、そのサブタイトルには、「さらに五〇〇号から六〇〇号へ意欲をもやす、路郎主幹の烈々の意気はそのままわが「川柳雑誌」のいちである。「川柳雑誌」は、柳界の太陽である」と叫ばれています。そしてその時の大会には、兼題選者として、故水府、故紋太、故幸男の諸先生と堀口堯人氏と中島生々庵氏のお名前が列記されています。誠に輝やかしい隆々たる四〇〇号記念大会でありました。

又この記念編集には現川柳塔社の不二田一三夫氏も並々ならぬ苦勞された事がまだ記憶に新たなものがあります。

川柳雑誌は柳界唯一の有保・証の新聞紙法適用の定期刊行物保証をとられた(当時の金で保証金壹千円)異色の雑誌で、先生の見解には心服すると同時に、専門家なき世界は発展せずと号して昭和十一年川柳職業人を宣言された事も敬服の至りであります。

又十周年記念号には先生は「私は回顧ということを好まない、回顧は老人のすることである、私はまだまだ老人の世界に足を突込んではいない、私は相変わらず、はたち前後の意気を持して世の青年に一步も譲らないつもりである」と言われています。



情熱と和の誌寿六百号

川村好郎

今、川柳塔は六〇〇号という誌令に到達致しまして、一〇〇号四〇〇号と回顧しましたけれどもそれは先生の偉業をお偲びしたわけですから六〇一号二号と前進してゆく戒めとする回顧であります。

私達は、川柳塔が今日斯く健在で発展してきましたのも、「親の光は七光り」という諺をまざまざと思い浮べて感謝感激致しております。六〇〇号を期に、先生の大遺訓である「川柳は人間陶冶の詩である」と「命ある句を創れ」を指針として更に、七〇〇号、八〇〇号へと確実な歩みをつづけて行く決心であります。

凡そどんな企業、会の運営は勿論、夫婦生活に於ても人間関係に於ても、長い年月の間には順風に乗る何の支障もなく目的を達成されるものではない。必ず進むべきか、退くべきかの岐路に何度も立たされるものであり、そこを乗り切り前進してこそ、社会に、国に役立つ事業が成就し、真の倅せな夫婦生活、人間関係が築き上げられる事は衆知のことである。

誌寿六百号を迎えたわが「川柳塔」も決してその例外ではない。通巻六百号を発行されるまで幾度進むべきか、退くべきかを経験し

たことであろう。その中で最も大きな岐路は昭和十八年十二月第二三九号「雑誌奉還」である。そして昭和四十年七月七日路郎先生のご逝去である。

大正十三年二月「川柳雑誌」第一巻第一号を世に送られ、路郎先生の燃ゆるが如き情熱により柳界は勿論広く社会に貢献せられ、年と共に発展したことは言を待たない。それが戦争という外からの障害により廃刊の已むなきに至ったのである。この事は既に東野大八

先生が「路郎物語」によって詳述されている。路郎先生は終刊の辞として次のように述べていられる。

「戦局は一寸刻みに緊迫してゆく。雑誌なんかにぶら下っている時でない。文化は第二陣だ。雑誌なんか潔く投げ出して直ちに戦闘配置につくべきである。ここに本誌は自発的に巻を閉じることにした」

しかし路郎先生の川柳社会化運動の情熱は消滅しなかった。戦時中にもガリ版のパンフレット式の句報、不朽洞会員の消息を送ってこられた。今私の手元にあるそれ等を読む時、実に感慨無量である。そして昭和二十一年八月、第二四〇号から再刊され誌寿実に四五八号に及んだのである。あざやかな危機突破である。

次は路郎先生のご逝去である。

昭和四十年十月「川柳塔」第一号に若本多久志氏が次のように述べておられる。

昭和三十九年末、路郎先生が六、七人の門下を集め、「川柳雑誌は路郎と共に亡ぶべきものであり、それは私の健康がこの仕事を許さなくなった時、又死を迎えた時である」と。

路郎先生の本葬はお宅から近い受念寺で執行された。昭和四十年七月十八日の暑い日であった。葬後お寺の一室でこれから「川柳雑誌」をどうすべきか、存続してゆくには如何にしてゆくべきかを有志のものが集り協議した。暑い一室に私如きは冬のモーニングで汗を拭き拭き話合った事が昨日のように思い出されるのである。其後何度も協議され同人制度に改め、誌名を「川柳塔」として新しく踏み出すことになった。この第二の一大危機を乗り越え誌寿六百号へ

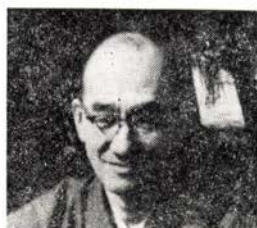
邁進したのである。この間先輩諸先生の鞭撻、各柳社の激励がその力になったことは云うまでもない。

一通巻六百号というかがやかしい誌寿を得たその基礎になるもの、中味は何だろうか。何としても路郎先生の情熱とその願い、祈りを頂いてのことであり、その願いを頂き生々庵氏を主幹として同人は勿論、広く「川柳塔」を愛好する人々の燃ゆる総力と和であると痛感するのである。

過日ある中小企業の営業部長にこんなことを聞いた。「何としてうちの会社の盛衰を握っているのは営業部であり、殊に今日の不況時には販売に必死である。事務室でペンを走らせている者、倉庫係、守衛などはいわば会社の扶養家族であり、セールズが一生懸命に働き成績を上げればこそ、それ等の人々はボーナスも貰え、昇給もし、結構に暮せるので扶養家族は出来るだけ減らすべきである。自分はいつもお前等は扶養家族だよく知っておけと云い聞かせている」というのです。営業部長としてこのくらいの責任を持ち張り切るのとはわからぬことはないが、そんな事を聞かされた営業以外の部署の人々は果して喜んで積極的に関心であろうか。こんな考えで会社の真の発展が生れるだろうか。管理職は勿論従業員のすべてが、「園車の一つと思う朝を出る一好郎」でなければ企業の隆盛は望めない。夫婦生活、人間関係に於ても同じことが云えると思う。

生々庵主幹は「川柳塔」第一号のトップに「川柳塔」はまだ哺育室で生活している未熟児であると例え、「生命を救うことが急速な

体重増加を考えるよりも重要である。いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしようとか。そうしたあせりや功名心を出してはいけない」と誠めている。全くその通りに守りつづけられての川柳塔社であり、「川柳塔」である。



路郎先生と私

正本水客

ここに誌寿六百号を祝うと共にいよいよ路郎先生の情熱を受け継ぎ、我々一丸となって更に七百号へ邁進することを誓いたいものである。

を打つ。

2年8カ月の長い暗黒のブランクを置いて21年8月、待望の240号が再刊される。定価は3円と戦前の10倍になり、わずか8頁のザラ紙ではあるが、戦争の暗さから脱して笑いを求めようとする喜びに溢れている。

以降17年間、物価の急騰振りを目の当り見るようであつて寒い。22年6月・5円、22年9月・10円、23年5月・15円、23年10月・20円、24年4月・30円、27年1月・40円、31年2月・50円、33年5月・60円、35年1月・70円、36年6月・90円、38年8月・120円と実にめまぐるしい。

反対に頁数は物価の動きに逆おうとするかのように8頁から12、16、20、28、34、46頁と増えているのも路郎先生の負ん気が現われ

六〇〇号それはまる五〇年、雑誌とこれを支えてきた人々との金婚式である。遙かにも来つるかなとつくづく思う。

今私の手許には昭和8年の120号からの川柳雑誌がある。何かいい材料はないかと眼を通していううちに雑誌の定価が世の中の動きを如実に示しているのに気がついて面白いと思った。少し複雑であるが記してみる事にする。

昭和8年の120号から18年10月の238号まで約10年間はずつと30銭が据置きで社会情勢の安定さを示している。その間、発刊十五周年を記念する意味でか13年1月の168号から15年12月までのまる3年間は菊倍版の豪華本が異彩をはなっている。

戦争色の増大は昭和18年11月の239号を雑誌奉還号に追込む倍大号（定価60銭）を出して、せめて心の慰めとした遺瀨なさが心

ているようで嬉しい。斯くて昭和40年9月の路郎追悼号で460号の川柳雑誌は散華して川柳塔が地上に出現する。

他の執筆の方々と重複しないような話題を選んで路郎先生を偲んでみることにしよう。

昭和14年3月、西日本鉄道人川柳大会が尾道で開かれたことがある。その前日に先生と岡田某人君と私と3人で麻生家のお墓のある寺に詣で、生い茂る草を抜いて綺麗に掃除した後、海の見える小高い境内の裏庭に座って話はいつまでも尽きなかった。それが街のどの辺であったのか思い出せないが、まだ少し膚寒い春の空が限りなく美しかったのだけを感じている。

昭和24年陽春4月、さくら満開の城崎温泉で、大鉄川柳会主催の川柳大会を持ったことがあった。麻生路郎、岸本水府、梶元紋太の方達を選者に揃えた素晴らしきで、今は亡き北川春果、山田季實の人達もいた。

当時、路郎、水府両先生は意見の相違からか険悪な対立状態にあったのを、一堂に会する快挙をやったのけて川柳界をアツと言わせた。それだけに世話役一切をやって呉れた今は東京にある長宗白鬼君の気の使いようも並々ならぬものがあつた。路郎、水府両先生の間に紋太先生の席を設けて緩衝地帯を作るとか、講演は路郎先生を最後にすれば、兼題披露の最後は水府先生という風に。

この日、路郎先生は体の具合が悪いのを無理して出席して下さったので、講演の後には別室で休んで戴いた。昼もお粥を召し上がる状態だった。兼題は選だけされて披露は水客君キミやつてくれと代理披露を仰せつかった。水府先生選の「柳」で「旅らしい音で柳に傘がふれ」の私の句が天位になった。

帰りは万代の家までお送りしたら、まあちょっと上れと霞乃奥様のお給仕で夕食を御馳走になって帰ったのも今は思い出である。

英断君など大鉄川柳の連中三、四人が、私の不在のときに路郎先生と同席したことがあった。水客君は大鉄局支部として川柳雑誌社にもう少し力を入れてくれたらと、多少不満めいた話が先生からあったとき、大鉄川柳は番傘同人もファウスト同人も寄って来ているので無理に川柳雑誌カラーを押し出したら職場川柳がつぶれて了う、水客さんだからうまく纏まっているんですと皆んなに反撥されたよと、後で先生が笑いながら私に話をされた。一度言い出したら減多に説を曲げられない先生にしてはちょっと微笑ましい。

昭和33年11月に紫香、潮花、水客3人の句集「三人」が出た。世話役の人々が積極的に動いて予約をとって呉れたので発行と同時に売切れという柳界の異情事態が発生して、私達には売らないのかと云う嬉しい苦情が相繼いだ。

先生から3人の句集を出したらと言われたのが一年ほど前、先輩が沢山おられるのにと決まっていると、金銭的な負担を掛けるようなことは無いから任せて置きなさいとまで言って下さった。

或る日、打合せのためお家へ伺うと、筆を持たれた先生のまわりは座敷中書き損じの紙で埋まっている、見るとどれもみな「三人」の文字である。句集の表紙になる文字である。あまりのことに私の眼から思わず涙が滲んできた。こんなにまで心をこめて下さる。どうしても気に入った字が出来ないので、いっそ活字にしようかと思つていたところだと漸く得心のいった一枚を取り上げてニコリ笑われた。

句集発行は急に思い付いて勧めて下さったのではなく、31年12月

号に「潮花を語る」座談会記事を雑誌に発表、32年4月号に紫香を、同6月号に水客を語るが発表されているのからみても、これを序文替りにして句集をとという構想は相当前から持っておられた事が分る。病後の静養中を、こちらがハラハラするほど凡てに力を入れ



六百号記念におもう

菊 沢 小松園

て下さった先生。神韻びようぼうとした「三人」という字を見詰めていると先生の顔が眼に浮かんでくる。私のたからである。先生と川柳雑誌とは不即不離、思い出もまた切り離しては考えられない。

川柳塔誌が六百号を出す。勿論その前に川柳雑誌以来の伝承であり、その過半は故麻生路郎先生の悪戦苦闘の上に建てられたものであり、諸先輩、協力の賜である。

先生没後の川柳塔社創立も決して生優しいもので無かった。物を生み出す陣痛と不安、経営運営の苦心、振り返って見て生々庵氏初め、先輩の陣頭の指揮は無論のこと、それを圍繞する同人諸兄姉、理解と献身の努力の外の何物でもない。

川柳雑誌以来の流れをくむ地方在住の方々の協力も又論を俟たない。順風満帆とは決して行かなかったが、迂り出しはまあまあ、そよ吹く風にそろそろと兎も角進められた。併し乍ら川柳塔とて決して順調ばかりの日が続いたとは決して謂え得まいと思う。その間、川柳塔の特質としてその衝に当る幹部に何の意見の相違もなく活動

や指導上の要項も全く大した異見もなかった。

表面上誠にこうした事は倅せなことに違いは無かった。此の十余年の川柳塔になって以来の歳月を経て重要事項を決定している毎月の常任理事会に於ける空気も振り返って見て余りにも予定の事実を承って置く形になって終って万事平穩無事、談笑の裡に静かに暮。その間、談論風発の空気もなく、従って無論、論戦や劇論などの情況などさらさら無かった。皆が皆、余りにも上品に協調に過ぎて覇気も野心の影もない明々白々の雰囲気で金持ち喧嘩せずで終始して来たように私には思えてならない。

議論を尽しての後のコンセンサスで無ければ次に続くであろう次代の担い手の若い人達の眼に何と映するかとそれを恐れるのである。

無風の状態で空気が濁り易く、淀んだ水は腐り易い。川は時に白波を立てることに依って清冽になるのが道理と思うのはどんなものだろうか。

この六百号に際して敢て苦言を呈する真意も要は、もうそろそろ次代を案じて決して遅くはない。人々の多い現情に対しての老婆心からで他意はない。若い人達などの中に居ると時々川柳塔の指導理念などと真面目に聞かれることもある。理念などという代物は確



好恋喜利会覚書

堀口堯人

固たる不変のものでは無く一つの理想の観念で時代と共に進化発展するもので固定したものでは決してない。強いて言えば川柳塔を手執って番傘と違いふあうすとも違う。何となく異質を感じる処が川柳塔の自体の所以だと言っている。

時の流れがその内に総て決定して呉れるものである。百年河清とはまた気の長い面白い言葉ながら、何と含蓄のある語であると感心している。私も寄る年波ということであろうか。

これきり会、おぼえがき、と読んでほしい。私の命名である。内容は本邦初公開の路郎外伝である。この中で川柳人として現存して居る者は二、三人であろうか。

大正十四年十一月二十六日の夕、天下茶屋の楽園で、妙な顔ぶれの句会が開かれた。楽園と云うのは俳人芦田秋双氏の立派な庭のある私邸であったが、文芸的な会合にかぎって、有料で開放していたらしい。それにしても、今夜は妙な顔ぶれである。

本田溪花坊、塚崎松郎、林田馬行、井上刀三、これは当時「大

阪」の同人諸氏、麻生路郎、高橋かほる、庄万よし、安井ひろし、これは「川柳雑誌」から、そして、大石文久、松本波郎、中村祇梵、古川三次、は「番傘」から、それに筆者堀口堯人の十三人、その時の堯人は、よほど「番傘」風に傾斜していたようであったが、同人ではなかった。

異趣同舟の句会である。当時、大阪川柳界は川柳人そのものが少なかったから、他社の句会へ顔を出すのは平気で交流はさかんであったけれども、それだけに、少し句が作れるほどになると、彼は何

処の吟社の同人になるであらうかと興味をもたれた時代であった。世話人、万よしとしては、岸本水府も招きよかつたのであらうが、彼はこの種の会合に出席する筈もなく、仮に出席したとしても、その出題を見ただけで、席を蹴り去って行つたであらう。席上、大石文久が、文久の雅号の使用を好まず、あくまで「月」の仮名で作句したのは、いささか水府の氣持をくんだのであらうか。五選二題、松郎選、溪花坊選、路郎選、各一題、計五題の作品は今日迄、如何なる雑誌にも、発表されたことはあるまい。当時、発表しても無事と思われたのは「間男」の路郎選の軸吟

間男の屋は将棋をうってゐる

路郎

の一句だけではなかつたか。若し、その筋に睨まれたらうそんなことを氣にかけねばならぬ時代であつた。弥次馬唄仏にとつては、そんなスリルが嬉しかつた。そして、あれほどきわどい場面をあれほどたくみに詠みこなした「川柳末摘花」の先輩達に對し、大正の我々にもさほど見劣りのしない諷詠が出来たことに満足した。吟社の派閥や、発表の可能性を無視して、ひたむきに好色川柳にふけつた。純粹なる作句精神、を感じたのはむしろ痛快であつた。

飄逸な浅井五葉に兄事し、重厚な西田當百に師事した時代があつた。これは路郎川柳の爲に非常によいことであつた。間男（まおとこ）に将棋を配して劇的構成の一句を創作するような、一見路郎らしからぬ、洒落氣のある表現は、當百調に学んだたまものである。近代の学校教育を受けた彼が、西欧の詩精神を理解し、これを消化して、名吟を遺したのは、よく知られているところであるが、これと全く反対の江戸川柳趣味も亦、彼の作風に秘められていたのである。

路郎の川柳は幅広く多彩であり、その門下にも異色ある好作家を多く輩出した。いつでも和装で女形のようにあつた高橋かほるの車屋と明治の話して別れ

巴焼五十銭がにうるたえる

かほる

ような大阪情緒作品にしても、路郎門下なればこそ詠まれたのであらう。かと思えば、

「私は英豆の

ひばり鳴いたとてまぎれましかね赤椿

という句を思い出す度に、あの新開地の支那料理屋にいたYという給仕女のことを思い出すのである。そのYは支那人の父と日本人の母をもつていた眼の涼しい女であつたが六年間思いつづけていたKのものとはならなかつた。しかし、鳴尾の蛙の鳴き方と讃岐の蛙の鳴き方とは違いますね、というデリケートな感覚の持主のKの恋人としては実にふさわしい女であつたか、なかつたか、近眼の私には、一度逢つただけではつきりしたことは云えない（麻生路郎著、川柳漫談、昭和四年、より）と書いている。彼はこのような眼でそれぞれの弟子の作品を見ていたのである。私は、いつ頃か、もう五十年前も前のこと、島の内のごちやらの路次の、安井ひろし、の家を訪れたことがある。短冊掛に

九月七日の日めくりのままなる

ひろし

の一句があつた。若き夫人に先立たれて、あまり間のない頃であつたらしい。私はこの一句によつて、俳句の「海紅」派から、路郎門下へ転向した、ひろしを識つた。

安部磯雄が社会民衆党を結成したのは大正十五年（一九二六）十二月であるが、新戎橋南詰の道頓堀の関東煮屋のおっさん庄健一、

(万よし) が大阪市会議員候補者として立候補したのは、その翌年頃であらうか。大阪の無産党としても、川柳人としても、はじめてのことであつた。応援に行つた。千日前の芦辺劇場の裏、アパートのような興行街の蔭にかくれた古いビルであつた。推選状の表書をした。弁当をくれたがとても粗末で喰べる気がしなかつた。しかし、新興政党的の応援弁士等は、おいしそくに喰べて元氣瀟灑と街頭へ出て行つた。庄健一の人氣は上乘であつた。

思想的には右翼なんだが、と、義弟の安井ひろしが苦笑した。万よしは予備陸軍中尉であつたのである。

かりそめに抜くものでなし日本刀

万よし

の作者が、無産党の市会議員として当選した。二階級の彼が市会議員になつたので、二プラス四で六階議員などとひやかされたが

高飛車に吐りとことん世話する氣

万よし

の彼は、南区の世話役としてつづく二期三期の選挙にも当選、市政の古老となつて行つた。しかし、満州事変後の日本は、國際的にも

女シリーズ

菊沢小松園

チップ代ゆっくり握手してもらい

堕ちてゆくにも女理由をつけたがり

夢のない女で真逆様に堕ち

次第に孤立して、軍部の天下となつて行き、政党無視の時代を迎えた。その後府会議員として立候補した彼ははじめて落選、川柳人としても遠い存在になつて行つた。

ある秋の朝、戦時中か戦後かよく覚えていないが、堂ビルの横から転ろがるように出て来た男があつた。背広姿に下駄履であつた。声をかけたが、朝からの醉眼に私をたしかめようとせずふいと横を向いて梅田の方へ駆けていつた。無性髭の顔が印象的であつた。庄健一いくつの頃であつたのか。

くたひれた三味はお国を何百里

万よし

ふと彼の句を思い出した。

それきりで遭つた事はない。

いつぞや庄万よし、と、その後、故郷の兵庫県加東郡社町の町長をしていたと云う、安井ひろしの計を前後して聞いたことがある。

共に路郎門下の逸材であつた。

ぎりぎりのところで女向きを変え

灯台の光りを避けて抱きよせ

人妻の着換え一分の隙もなし

天国が近づく頃の息づかい

信じ切る指がきわどいとこへ来る

透き通る女の膚に齡はない

雨しとど膚も湿度を帯びてくる



麻生路郎物語

(29)

— 葭乃書簡ダイジェスト —

東野 大八

「私が川柳というものにそもそも関心を持ちはじめたのは、昭和のうんと始めの頃で、ある寒い冬の夜、今、伏見町にある、「与太呂」が新町でやっていた頃、麻生路郎とふぐをつついた時にはじまる。

その時、路郎先生大いに酔払い、興到り短冊、色紙を買いにやって随分と書きなぐったものだ。それでも足らぬかついに「与太呂」主人のカップウ衣の背中をこちらに向けて「酒とりとり大空の心かも」とやつつけてしまった。

今年の冬は「与太呂」に出かける機会が比較的多かったが、いつかも主人が当時をじゅっかいして、カップウ衣はわたらのフロックコートだす、あたり前やつたらカッとしまんねんけど何やら、やつぱりあの人のえらさがピンときて、じつとされるままになってしまいましたたんやといっていた」（「川柳雑誌」昭和

26年5月 №312・岩崎愛二）

路郎と酒は切り離せない。しかし、本稿連載以前に、路郎忌になみ「路郎と酒」と題しくわしく書いたのが割愛した。ここにとりあげた話は、その酒の話にとりあげていなかったもので、代表的本稿での酒の上の路郎とみて採用した。

この種の路郎のゴシップ的挿話は数限りなくあるわけだが、枚挙に暇のないことになるので端折る。

この稿がいよいよ終章に入ったこの段階で葭乃書簡の名をもって、ふんだんに活用させて貰った感謝の意味合いもあって葭乃夫人の書信で、有終の美を飾らせてもらうことにする。

「高島易断の暦を覗くと、八白の女と四緑の男では相性がよくないそうだ。悪妻だとも書いてある。

葭乃は長流の水で、私は霹靂の火だそうだと。長流の水はスローモーションで、悠々と流れて末は大海にそそぐ。霹靂の火は雷鳴の時のあの峻烈な光りを放つ火である。本来火は水に消されるが、霹靂の火は水に消されない。私はその昔、霹靂火という別号を用いていることを思うと、そういうことに興味をもっていたらしいが、それがために結婚を左右されるほど易に頼っていたわけではない。

結婚後の葭乃の句に

— 夕立の小気味よし君が叱咤も

という句があつて、私の性格のへきれきの火を一時的にはげしい夕立に比しているものはおもしろい。ここが長流の水の悠々たるよさである。たとえ悪妻であつたとしても、私たちの分身を九人までも儲け、五十年もの永い歳月を、二人三脚でゴール近くにまでやってきたのであるから、今更異議を申し立てる

筋合いのものではあるまい。」（川柳雑誌 № 4
44. 妻を語る。麻生路郎）

この易は路郎にとっては甚だ妙といふべきである。水にも消えないかづちの火のごとき四緑の男に、この長江の水の如き八白の女は、悪女どころか理想的良妻であつたはずである。世に相縁奇縁という言葉があるが、この夫婦にとっては、これがピッタリする。

箸にも棒にもかからぬ川柳と云う得態の知れぬ化物に魅入られて、その生涯を賭け、貧窮と病苦と子供地獄に責めさいなまれたこの夫婦の生活を支へ切つたものは、この型破りの伴侶の力にあつたことを、この変り者の亭主は果して知るや、知らずや。

界の豪商、河盛仁平の嫡男と生まれながら、母と妻の折合いの悪さをみかねて家を捨てた葭乃の父、彦三郎は間もなくその愛妻を失つた。葭乃六歳の時で、それ以後、彼は三十になるやならずで、生涯やもめ暮しに入つた。

「父は慶応二年の生れで、人には寛大、おのれには厳しい人でした。生活の立居振舞も誠に厳しい人で、二時に帰るといへばきつちりその時間に戻り、脱いだ下駄も右左きつちり揃え、机の上、抽出の文房具類はいつも整然として整頓されていました。（中略）路郎ときたら、一度家を出たら何時御帰還になるやら、鉄砲玉というニックネームがありました。私も眠たければサッサと寝てしまいました。路郎が夜更けに帰ってきてても、私が知らねば父が戸をあけにいぐが、何一つ文句をいわぬ父ですので「いっぺんに酔がさめる」と

路郎がいつていました。こんな性格のちがう人間が同じ屋根の下にいて、よくトラブルが起ころぬことだと思ひ議でした。（中略）私は感情を素直に表現できない女なんです。うれしいのやら悲しいのやさっぱりわからぬ人間に出来ています。だから喧嘩の相手にならないのです。いっぺんでもよい火花の散るようなけんかがしたかっただろうと遅ればせながら路郎の気持ちを読んでいます」

「私のペンパル」という愛称を頂戴した筆者あての葭乃書簡は、文箱二杯に溢れるほどだが、本稿の随処に活用させて貰つたもの。まだまだ複雑たる玉章は山のごとし。支障なきところをピックアップしてお別れの謝辞にかえる。

「いつか川柳塔へ、告白の巻と題して禁酒を宣言したように思うのですが、相変らず左利きの喜ぶ品が届きますので、どうしたのかと考えてみましたら、正月の朱塗りの盃にも未練がある。九谷の猪口にも愛着があると文章を結んでいるので、折角の禁酒の宣言もすっかり帳消しになって終つていゝのです。これからは実行のできぬことは大層にいわぬことにして、からだの事も考え折にふれて少々たしなむでいます。然し、アートの云うように二、三杯ではおさまりません。まあ二台が丁度よいところでございましょう。

路郎は五才で五勺ばかり飲んだそうですが、私は八才位の時にお酒の移り香のある盃で水を飲むのが好きでした」

「昔千日前に見世物小屋が軒を並べていた頃、娘浄瑠璃の小屋がありました。上下をつけた若い娘さんが、人りかわり立ちかわり房の垂れ下つた黒塗りの見台へ身構えるので

す。その小屋へ毎日のようにくる常連がありまして。そのおっさん達を「どうする連」と呼んでいました。題したのはみんな、なじみの深いものばかりでした。「朝顔日記大井川の段」に「石になつたる松浦瀉、ひれ振る山のかなしも……」という文句があります。

これは松浦佐用姫という美女が契りをつ結んだ男の舟出に別れを惜しみ、領巾（ひれ）振りながら悲しみのあまり石になつたという伝説によります。そんなことを知っていると思われぬかみしもの娘さんが、見台へ両手をそえて伸び上りながら「ひれ振る」と声を張り上げる一瞬前に「待つてました」と大向うどうする連のおっさんの声がかかるのです。（中略）しかし、子育てのころの私には、そんな想い出も夢幻に等しく、それどころかいっぱいゆつくり御飯をたべたい、ぐつぐつと眠りたいそればかりの二等兵の生活でした。それともいつか遠い昔になりました。

タイムイズマネー鰯やいてる間の読書

というきわどい芸当もしなくなりました。

宝石も愚痴も地上に舞う塵埃

「ふあうすとーに掲載された堀口堯人様の「南北をめぐる」は、忘れていた人が出てく

るので興味深く読みました。南北先生の玉屋町のお宅へは私もちよいちよいお邪魔しました。その時に頂いた色紙は「夕霧伊左衛門の紙子姿」「暫」「八重垣姫」でありました。先生の画筆のさきが色紙の上をすべるかともれば、三枚位の色紙は電光石火で写した。

当時の柳人五、六人程で千日前の写真屋でシャシを撮ったことがあります。それがある日番傘に出たことがあります。不二田一三夫さんが私にそれを見せてくれました。私は桃割れに結うていました。その中に縁天さんのもいられました。南北先生の最初の奥さまはもの静かなやさしい方でした。その奥様のところへきていられた可愛らしい娘さんが、水府さんの最初の奥さまなのです。おふたりは仲のよいご夫婦でしたが、奥様は若くして御長男を残してあの世へ旅たれました。塙人様は、あの古い時代の材料をよくも保存していられたことだと感心しています」

「このごろ眼にみえて記憶力が減退してきているようです。芝居の話をしても、ヒイキにしている役者の名がどうしても口に出てこなかったりすると、私の脳細胞のどこかが毀れてるのかしらと心配したり、失語症の初期かと案じたりします。

そうなると思地でも思ひ出さねばすまぬ氣になり、他の仕事はうわのそら、そればかりに氣をとられて一日たち二日たちしている和三日目にヒョコリ思ひ出すことがあるのです。それは丁度、線の切れた電球を振ったらパツと灯のつくのに似ています。

こんな忘れっぽくても一人居るのにはさし支えないのです。お能の面のように無表情でも傍らに人がいなければ氣を使わなくてもすみす。私は声を出して笑ったことがあります。せんから、どの位おかしいのか、またどの位うれしいのか人にわかって貰えないのです。人が傍にいないればそんな苦勞もなく裸の私でいられるのです。云いたくないけれどわなないですみす。こんな氣持である私の前へもし初対面の人が座つたらどうなるでしょう。きつと相手の氣持ちをこわしてしまします。それを知っている私は、なるべく人に逢い度くないのです。このごろは誰に誘われても句会へは一切出席しません。しゃべらねばならんからです。この非社交性は、父の氣質に似ています。

— この癖を捨てたら形見なにもなし

「貴方の柳珍堂さんの最後を読んで、なんと思ひ切りのよい遺言だと感心しました。ファンの人達には、どこを捜しても柳珍堂さんの句が一句も見当らないとなると、一寸寂しい氣がしますが、句集と云うものは、毎号各柳誌へ広告しても五百冊がみんな金になるのは何年もかかります。それに加えて追悼会だの追悼号だのと物要りが続いては困るのは家族だけでございます。血縁だけのさやかな葬儀であっても喪主のうしろから飼犬がぼそぼそついていくのも仏の供養でしょう。

南海電車の重役さんに、池沢楽居という川柳人がありました。この人も変りもので、路

郎と親しい仲でしたのに、亡くなられたのは誰も知らなかったのです。柳珍堂さんと同じお考えであつたのでしょうか。この方の短冊が一葉拙宅にあります。「川柳の眼にどの罪も美しき」というのです」

いよいよ紙数が尽きた。結びに麻生霞乃句集「福寿草」（一九五五）の玉吟多数の中から、筆者が特に感銘した句抄で飾らせて頂くことにする。

— 十七字我等の国語なるぞかし

霞乃

- 福寿草松にしたがいそろかしこ
- 飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ
- 浴槽へずらり立ったは皆わが子
- 睡蓮の如く淋しく思索せむ
- さらばさらばと散るはすゞかけ
- 娘まだ帯へ縫い込む智恵も出す
- 十合大丸帯一本へくたびれる
- デパートを出たら灯もつき雨も降り
- 女さまたま猫の頭をみな持てり
- 明暗をうらのう如き竜の火
- 交渉に邪魔な正直者を連れ
- 墓に水かけに海越え山を越え

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

「路郎物語が完了したら、本誌上にポツカリ穴があくのではないか——小松園氏談」と好評の「路郎物語」もあと「路郎作句語録」上下二篇で完結となります。ご期待ください。

— 編集部

俳風柳多留廿五篇研究

—(十四丁)—



八 木 敬 一

250 九郎助へ白いゆもじで願ンほとき

鈴木—九郎助福荷へお礼参りする遊女は、勿論身請けか年季明けか何れにしても素人になつたからである。地獄から開放された遊女のようにこの句である。

室山—「願ンほとき」だから、年明きでなく身請けであろう。湯文字の緋、白については『守貞漫稿』に「白湯文字と名ることは売女は必らず緋ちりめん二布を用ふ。正民とても緋を用ふれども婦は専ら白を用ふ故に、売女の緋に対して白ゆもじと名るなり」とある。紀内—賛。女郎の願は「早く出たい」というのであるから、身受け説が妥当。

岡田—同。明治ごろでも、「赤い湯もじは商売人のようだ」といい、良家の子女は忌む

風習がありました。

251 すたる物なし仲条へこぜがとれ

鈴木—「贅女」は三味線を弾き唄を歌いなどして金を乞う盲の女。全く使い道のない盲の乞食でも相手にする男がいるものだ。要するに役に立たない人などいないのだ。その証拠には盲の女乞食でさえ、中条流の門をくぐるではないか。

ふり袖で仲条へ来るすたり者 傍二・20
室山—賛。「女に捨てものなし」、「男の捨てものはあるが女の捨てものはない」、「女と坊主には余まりものがない」などの諺からの句。

よくくゝのたはけ女のこもかふり

拾二・27

鈴木 黄・清
室山 三 柳・八 木
入江 勇・紀 内 恒 久・岡 田 甫
博 美・青 木 迷 朗
敬 一・西 原 亮
敬 一・岡 田 甫

なお、「こぜ」は物もらいではあるが、芸を売るのであるから、こもかぶりの乞食ではない。

入江—賛。「中条へ珍らし者の贅女がとれ」(二・2)の焼き直し。

西原—賛。こぜにはきびしいおきてがあつて男と出来るとその仲間から追放された。作句者は笑っているが、こぜの当人は必死なのである。

岡田—賛。

252 割海老にたこ婚礼にいゝ肴

鈴木—私には難解の句。一種の破礼句であらうが、駄劣解を記しておく。

「海老」は男根、「たこ」は女陰。「割」は新鉢を割るとの意で「初夜」。したがって

結婚式の披露宴の料理にかこつけて、初夜の情景を描写した句と思う。

室山―「割海老」が不明。「たこ」は上陰で有名。礎解のようなことであろう。

八木―「割海老」は、車海老を頭ぐるみに背割にして開いたものであろう。

紀内―「たこ」は問題ないが、「割海老」は背割りということから、男根特に鈴口を象徴したものと考えていました。

青木―「割海老」男根見立説には不賛。女陰の見立でしょう。茹でられ背割りされた朱色を帯びた肉が、そのものずばりで、「新鉢を割ル」ことまで連想させる。たこはたこつびを連想。だから「婚礼にはうってつけのいい肴」なのである。

西原―前説に賛。割れがヨニを連想させるのであろう。

岡田―割エビは新鉢を割るを連想させるだけです。リング、ヨニの見立説には同意しかねます。

―十五丁―

253 重モたゝぬ枕言葉ハお手か付

室山―「枕言葉（枕詞）」は「特定の語句に

冠してこれを修飾し、また句調を整える語。主として古来の歌文に見え、通常は五音、まれに六・四・三音のものある」（『新潮国語辞典』）であるが、「まくらごと」と同じく、

寝物語の義も、「枕詞ぞ恨みなる」（謡曲「菊慈童」）のように存在する。句はこの方の意

もそれとなく含ませながら作られたのであろう。殿様が腰元などに手をつけた場合、庶民のごとき表現をしない、というのがこの句の眼目である。「下々です」といふのをお手がつき」といった句があったと思う。「お手が付」く場面はさまざまであらうが、本稿では二句のみかかせておく。

しめかへす手を殿様にいたゝかせ
拾二・29

御湯殿でそちもはいれと御じゃらつき
拾二・21

清―賛。ただし、「重モたゝぬ」は「表立たぬ」のアテ字か。

八木―賛。「重モたたぬ」が少々すっきりしない。「奥様以外の場合」というようなことであらうか。

おへのこの入るを御手が付くといひ

紀内―同じく「重モたたぬ」が不明。

箇二・9

青木―賛。「重モたたぬ」、清氏の「表立たぬ」のアテ字説に賛。

にが笑いしい／＼平に御手がつき

安二・智1

事ありと見へて御湯殿しつか也

六・12

岡田―諸説に尽く。

254 干スハ夏ぬれるハ秋の御製也

室山―『小倉百人一首』のうち、「干ス」は「春すぎて夏きにけらし白妙の、ころもほすてふ天の香具山」（持統天皇）、「ぬれる」は「秋の田のかりほのいほのとまをあらみ、わがころもでは露にぬれつつ」（天智天皇）ともに天皇の詠。実際の生活の季節感からの、軽い語句。

紀内―同。

ぬれし衣を次の間で干シ給ふ

一四〇・7

青木―賛。

秋濡れた衣を夏の山で干し

二八・31

一對のよふにまします秋の春

三九・25

岡田―同。

愛染帖

橘高薫風選

あやとりが解けて殺意がばけてくる
乳液が泌みる偽り信じよう

竹原市

三宅 不朽

青春の鮎にも似たりスラックス
眼うらをくすぐるごとく春の泡

守口市

羽原 静歩

バツつけたら伝統は消えていた
亡母と語らん連翹の黄なる彩

東京都

山根 白星

くちなしの香よあなたさえよかったら
ライターをばうとたた擦る出来ごろ

和歌山市

松原 寿子

驕りたる青葉を視野に風を切り
美しく命が枯れる慕情澄む

新宮市

大矢 十郎

めし一粒父は拾わず拾わせる
権利証が増えて欠けゆく人間味

松原市

谷垣 史好

フリージアが匂う思想のない部屋に
春の罪おかちめんこに惚れられる

岸和田市

池田 露子

クレオパトラに誰でもなれる化粧品
石をもて追われし村に歌碑が立ち

八尾市

大路 美幸

炎天や生れた話死の話
長い間命を賭けたことがない

大阪市

西出 一栄

難聴のいつの程にか孤を愛す
自尊心まだ捨てやらぬ欲という

枚方市

宮川 珠笑

公害の色で流れる水温む

枚方市

宮川 珠笑

それぞれに傾き路の芽の愁い

唐津市

岩崎 実

受験子の一喝恋猫たじろがず
物の相見えてきたとき老いはじめ

富田林市

岩田 美代

現実派スプーンでコーヒー飲んで
緊張をほぐす先生の髭である

岡山県

出原 敬一

雪の上に唾はき暮れる凡な日よ

島根県

飯塚 虎秋

叱られて楽しく聞ける京訛り

唐津市

岩下 照沖

美しき神話の池に蝌蚪生る

岡山県

白岩 文衛

テトラポットお前も末端管理職
レンズクリーナー本の間からとんで出る

豊中市

戸田 古方

投票紙真つ白僕の本音です

八尾市

河村 日満

亡母の文字かすかな声が聞えます

松江市

梅本登美也

愛欲の果てに底なし沼があり

和歌山市

津田 与史

赤旗の中で水色の旗を振る

高知県

瀬戸 海州

楠の木があった記憶を掘る婦省
黄昏に父の肩など見たくない

神戸市

宇佐美和子

カナリヤと少女の声の季節聞く

和歌山市

若宮 武雄

島根県
内股をふと見てからの絶望や

神戸市
バラの刺光を増して人憎む

大阪府
櫛の歯に似たエスカレーターで運ばれる

泉佐野市
森の飲むキツツキの眼が金の色

和泉市
人生の積木に善をひとつ載せ

竹原市
疑いへチラチラ散るは雪のこな

羽曳野市
膝小僧抱けば禪師の夢を見る

唐津市
石女の心が揺れる南風

羽咋市
ハブニングある春の夜の核家族

岡山県
退職勧告受けた同士の縄のれん

今治市
暗い白魔にただ天仰ぎ天仰ぎ

滋賀県
黒絹のレース歳時記なきおんな

和歌山市
自省して足袋の白さも気に入らず

神戸市
掌の温みで子の慕撫でてやる

和歌山市
波の極限人間で何だろう

小砂 白汀

来住タカ子

欄 蘭

阿萬 萬的

西岡 洛酔

大島 紫光

岩橋 双虎

田口 虹汀

三宅 ろ亭

長尾 保

越智 一水

柚木 踏草

西山 幸

小浜 牧人

野村太茂津

吉田 笑女

小きざみのドラマへじれる老母の日

羽曳野市
人使う才覚がある白い指

鳥取県
青春のかけらが芽吹く春日和

倉敷市
せせらぎに陽は万感を染めて落ち

倉敷市
マスコミに楯つく女の二日酔

出雲市
外食に飽いて老婆慌てさせ

松江市
組織図の重荷に耐えしサングラス

藤井寺市
居すわりの構えをとった春の雪

小松市
星空が浄土愛児の骨拾う

大阪市
寒月は二人が歩く道しるべ

島根県
春柄へ着替え草履の軽いみち

貝塚市
男等の胸でモンロー生きつづけ

和歌山市
うつり気な私へ春が訪れる

名古屋
小休止ドックで眠る熱帯魚

尾鷲市
信仰の笑顔の裏を見てしまい

大和郡山市
ギャンブルに行く日の靴も揃えられ

麻野 幽玄

清水 一保

水粉 千翁

小幡 里風

板垣 夢酔

黒目 大鳥

西 いわを

馬場 魚山

島田 雄峯

榊原 秀子

野坂つき子

小川佐知子

大林曲ん手

渡辺伊津志

森田カズエ

八尾市
酔いざめの水は階性の音がする

豊原川市
女ながら女と云う字が恥かしい

倉吉市
顔ぶれにおじけ負犬遠吠える

松江市
湖喋る青空喋る春うらら

倉吉市
一番になりたい欲がまだ残り

大阪市
伝統の家系悲しい血も流れ

京都市
美しいものだけ映す夜の河

大阪市
亡友の忌よ今日もあの日の雪しぐれ

島根県
春買いに行けばもう夏売っている

島根県
やっとう孫へ三輪車も待機

山口県
不景気というに車はあふれてる

岸和田市
事故現場に残るパンダの縫いぐるみ

富田林市
標準でいい人生のむずかしさ

東大阪市
温泉に溶かして流すわだかまり

堺市
喜怒哀楽上手に化粧して女

宮西 弥生

宮尾あいき

今村 夕路

岡崎 祥月

奥谷 弘朗

神夏機道子

都倉 求女

江城 修史

堀江 正朗

堀江 芳子

高崎 雀声

池田香珠夫

和田維久子

竹中 肖二

高橋千万子

勝山 紫宏

下手な歌それで親しき増して来る

平田市

久家代仕男

廃校へ牛のひと声はね返り

倉敷市

藤原 健二

いっそも思いまあまあととも思

倉敷市

齊藤 通風

印だけを押せば済むよと魔の言葉

大阪府

竹中 綾女

始まった相撲に寄り道せぬ夫

鳥根県

錦織 文子

うっかりと仕めぬ青酸チヨコレート

兵庫県

行天 千代

花便り病弱の身を苛立たす

出雲市

藤井 晴月

精薄の女の料理のうまいこと

大阪府

文川 一念

かさかさと乾いた音が胸で鳴る

京都市

松川 杜的

駅毎を新婚なみに見送られ

唐津市

新潟回天子

もう一つ何かが欲しい庭の景

八戸市

小泉 紫峰

雪囲い解いた息吹に陽の恵み

東大阪市

加藤千代子

東大生知識万能でもあるまい

富川林市

中村 優

雨垂れの音幻想のピアノ弾く

今治市

園部 正則

医療費の不正カルテがしゃべり出し

八戸市

島田 昭治

当然のことを真面目と云う世相

商魂は官女の形のチヨコレート

唐津市

田中 紫浪

雰囲気がそつと座敷を抜け出させ

唐津市

山下 勝一

卒業の巷に夢が溢れ出る

鳥根県

岩田 三和

日本の草の味など知らぬ牛

東予市

小山 悠泉

一徹を通し出世に見放され

唐津市

桑原 掬治

廃屋のウインドに坐すまねき猫

尼崎市

黒川 紫香

雪を踏む音雲水のひとり行く

〔評〕藤山愛一郎氏が政界に足を踏み入れた時、「絹のハンカチを汚す」と取り沙汰されたものだ。汚辱そのものの政治へのやり切れなさが巻頭の句のリズムの中にある。宵明さんの句、葱や大根を提げた句は数多くあるけれど、この句何故か心に沁みる。ペテランの手堅さと云うものだろう。可住さんの句は鋭い感覚の句で、庭へ来た蝶に春愁を感じたのである。ひらりとした感触が両者の共通して

いる。寿美子さんの第一句は中七の表現のうまさで生きた。第二句は下句が当を得ていて破調の効果を示す。美樹さんの句、盆栽などいじる齡ではない作者が、鉢植えの数を増やす。「増えて」ではなく「増して」に意志が表われて淋しさが強調出来た。自閉のうたである。酔夢さんの傷心の詩だが、ひらき直

った自負の逞しさが窺える。これは個性だ。葉子さんの句、あやとりがうまく解けた。トランプの難しい神経衰弱が成功したのと同じで、ほっとした心情が湧いて殺意が薄らいでしまったのである。面白い句だ。不朽さんの

は二句とも感覚に訴えたもので私の感覚に一致した。殊に第二句の春の泡など鋭い把握と思う。静歩さんの句のバツジは權威の象徴と見る。己がその得難い立場に身を置くことになる立派に思えた伝統も色褪せて感じられあこがれたものはこんなものだったのかと果敢なさが先立ってしまふと云うのである。表現に欠点はあるが、一つの理を穿っている。白星さんの句は、くちなしの腹郁として香を恋人への思いに昇華させたもので、「あなたさよふかったら」は、身も心もないさまをこのように表現されたのである。寿子さんの句は張りがあつて良かった。第二句の「美しく枯れる」は文字通り美しい言葉で、それに次いで慕情澄むと畳みかけた手法が力強い。こういう句は誰彼にとなく口ずさまれる要素を持っている。敬一さんの作品も誠にユニークで、報われない身をかくつ男の姿が鮮やかに見える。洛酔さんの人生観とも思える作品も見事で、崩れやすい積木を安定させるための錘に善を置くという発想は、教訓臭い句を

ぎりぎりの所で救っている。

▼毎月15日締切（一人三句以内）送り先
〒560 大阪府豊中市中桜塚三丁目13-15
橘高薫風宛。

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

若本 多久志

真直ぐに生きて美田は残さない

竹中 肖二

ある著名な評論家が、「今、日本には三つの民族（大和民族、戦中派民族、現代日本民族）が混在している」と言ったが、この句はその大和民族の作品で、古くとも僕には仁義禮智信と喝破した路郎先生の一面を継ぐものとして鑑賞させて頂いた。

初恋は当て逃げでしした深いキズ

高橋 千万子

人生にとって初恋は避けて通れない道ではあるが、そのほとんどは淡雪の様に消えてゆくものである。従って詠みふるされた句想だが、この句は「あて逃げ」という新しい現象と結びつけて心の傷を詠んだ処に妙味がある。

四面楚歌 救いは飲める口をもつ

森井 菁居

四面楚歌の中にしみじみと孤独感を味わう

心境は、その歪みを知る処であらう。磨かれた靴に折りがこめてある

大路 美幸

この句に続けて「ああ、それなのにそれなのに」と古い流行歌の一節をつけると、軽いユーモアが味われるが、この作品は、夫として平素は口に出しにくい妻への感謝の真心が潜んでいる。川柳とはかくもデリケートなものなのだろう。

腹の立つときは如來の眼を思い

工藤 甲吉

人生、古淡の境に入ると、すらすらとこんな名句が生れる。芭蕉や一茶にとって、俳句が一つの信仰でもあったように、この作家の稔りある晩年に羨望を覚える。

定退の身は捨て犬が愛しくて

稲田 豊作

人間とは、ある時かくも素直な心境になり得る処に尊さがある。

黒髪のときをこの櫛知っている

野田 素身郎

残り少い頭髮を櫛づけて、人生の悲哀をかくつ句想は既に詠みふるされているが、擬人法での修辭を面白く頂きました。

あきらめてから一点がよく見える

藤井 明朗

「一隅を照す」という仏語があるが、諦観の極にこそ、照らす一隅を感得出来るものなのであらう。

月冴えてたくらみ事を忘れさせ

宮尾 あいき

皓皓と冴えわたる月への感傷は、もう前時代のものかと寂しい思いがしていたが、まだこうした句が生れてくる短詩文字への愛着を一層深めてくれるようです。

若者の意見が少し胃にもたれ

小浜 牧人

去る三月末、ある大学の卒業謝恩パーティーで、美しく着飾った女子学生は、それぞれ好き同士のグループで食べながらのベチャクチャ、男子学生も又、自分たちだけの飲み食い談笑。肝心の教授たちは何とも居心地悪い風情でただろる。そこで一教授が「近頃の謝恩パーティーではおかげさまで卒業出来ました」という挨拶の言葉を聞くこともなくなった。ゼミで一年間も教え、何日も合宿を共にした学生でさえそうだから、ついに大学教授も、自動単位販売機になり下ったのか？」と嘆じておられたとか（毎日新聞コラム、視点より）

この句も、こうした現代若者に対する批判として詠まれたのであらう。下五がよく利いている。

美しく老いたき齡の地唄舞

仲 どんたく

多年の尊い経験の積み重ねや勉学の結果が綜合されて、全人格が完成され、いわゆる「老年晩熟」の境地に達して人生の終焉を迎えたいというのが、我々の念願である。

この句主も同じ思いで、その趣味に打ち込んでおられるのだから、羨望の限りであらう。

水煙抄

菊沢小松園選

三重県 川上富子

尼崎市 中谷利美

ニューモード私に気付いてくれますか
紫を纏うと風が軽くなる
筋書の通り観客泣かされる
五線譜の中で私の春踊る
おしぼりの黒さに父の職がある

豊中市 安藤寿美子

死にかけていても女は着物染め
入試はやひとごととなり沈丁花
留守の間に低いだ焼刃が消えて居り
又一つ弔電打って冴返る
そろそろと出たのにゴキブリ叩かれた

大阪市 文川野生

さよならが嫌いで港へは行かぬ
例えばの話にコーヒー掻きまぜる
美しい言葉が好きで花が好き
野良犬よ俺の分まで吠えてくれ
万一の一つに有った落し穴

共稼ぎいつまで続く産制ぞ
別れても食える女の飲みっぷり
ホステスの誘いの隙に乗るも旅

柏原市 小谷葉子

仕掛けにかかるのも一計かも知れず
ジーンズで駆ける素朴な恋もあり
胸の内すこし明かして友となる
片減りの草履で廻り道がすき

松江市 黒目大鳥

春の雨三味線横丁朝ねぼう
子なし妻夫に甘える術もつき
母校への径々匂うバラ百花
憂あり箸の重たき花ぐもり

寝屋川市 江口度

予言みなあたる信者になってみる
からからに乾くとマッチつきたがる
化粧するたびに美人が消えてゆく

バンドの穴を一つふやしている中年

竹原市 古田 鈍舟

打明けて生きる力をたしかめる
たえることが幸せならたえるのに
つもりになつても腹はおさまらず
丹念に縫う針先に母のいる

岡山県 長尾 保

親類の今日から増えるめでたい日
生活の屑が浮んでいる海辺
夢を買う順番だから並ぼうか
ほどほどにとぼけ抜け目のない女

羽曳野市 麻野 幽玄

宮詣り富多かれと雪給う

河しもの石は揉まれて来た丸さ
散る時の花の哀れを見てしまい

羽曳野市 岩橋 双虎

言い負けた方が臉を閉じていた
メロドラマ腹を立てたり笑ったり
非常口確かめ十六階の夢

大阪市 文川 一念

やさしさが刺あるバラに触れて行く
倅せな蟹だぞ一句詠んでやる
阿呆で良い倅せな日が続くな

倉敷市 松井 俊風

腹いせに買った着物を羨やまれ

口惜しさをまぎらす土筆摘みに入る
作業衣の影が夜明けを告げている

西宮市 杉浦 婦美子

頂上をいつかきわめる歩の決意
過去という小箱へきょうを入れておく
持病との馴れ合いごっこで冬を越す

倉敷市 斎藤 通風

流行を追う女には宿はない
愚痴一つ加えて櫛の酒こぼれ
おでんやであげた啖呵が後を引き

大阪市 堀口 欣一

ふるさとに富士と名のつく山三つ
日本史に颯爽として三度笠
待たされてこんなに長い半時間

青森県 波 ただお

床の間に生ければ気高い梅の花
帰郷した息子の整髪にホッとする
税金が還るを知った六十歳

八尾市 納 史葉

風くぐり女に帰る家があり
ぼろぼろの心を洗う旅に出る
阿波人形踊ったまを包まれる

高松市 溝 美紀子

なぜこも雪の白さよ胸をさす
仲直りする気のお茶をそっと出し

安心をさせねばならぬ子の務め

寝屋川市 柴田 恵美子

たたみいわし女系家族へ伺候する

足元も髪の手入れもしたゆとり

働いている水引きは快よく

八尾市 田中 紀美代

ゆとり出来鏡と対話の時つづく

浮世から離れる鏡別にする

欲望のかけら埋める化粧台

大和高田市 岸本 豊平次

家風から遠ざかつてるだしの素

掃き溜の鶴に路地裏おちつかず

枝先の騒めき知らぬ太い幹

東大阪市 崎山 美子

青信号のない人生に息がきれ

過ぎし日の愛よびさますすみれ草

悔しさはにじむ涙がとかすだけ

岸和田市 池田 露子

神様はコインの音を聞き分ける

虫の背にのって花びら歩き出す

白桃のしたたりママの手から受け

青森県 荒田 つる

信じられ頼られ弱気見せられず

出かかったひと言吞んで切る電話

齢の功癪な言葉も聞きながし

吹田市 藤原 世史春

「わかつてる」五字より「ハイ」の二字が好き

肩かけそつと直してやる老婦人

河豚という名前が恐い干物なり

禁酒禁煙するバカしないバカもいて

骨箱のそれより白い雪が降る

島根県 松本文子

遺言を書く気の墨を丸くする

新聞の隅で帰らぬ娘を案じ

鳥取県 福田 保子

恥をかく気で英語うまくなり

二三日不精したねと物干台

ロンドン 佐々木 朝代

天守閣と生きる浪華の街が好き

親しさをこめた握手を誤解され

尼崎市 中塚 喜甲

文部省唱歌が好きなの声自慢

夢の中刃を持っていた妬心

愛媛県 宮尾 みのり

後釜の顔ぶれ揃う送別会

反則をテレビ黙って写すだけ

新潟県 高野 不二

心奪う佳人の嘘が憎まれず

片思いスローテンポでフィナーレ

今治市 萬本 昌道

豪雪の野鳥に投げるパン其の他
定年を羨む人と嘆く人

島根県 谷岡芳枝

喫茶店恋の終りをいくつ知る
周辺の評価はまばら俺が惚れ

鳥取県 加藤茶人

靴音の響きもやわらぐ早春の道
まだ抜けぬひつこい風邪が出る電話

岡山市 井上柳五郎

歯車が錆びついてきた倦怠期
結納を早める腹の線目立ち

熊本市 有働芳仙

ちらちらと野心がのぞく言葉尻
告白をする唇が乾き切り

東予市 小山悠泉

不便だけが守ってくれたこの自然
故郷を愛し不便と同居する

亀岡市 森和堂

干上った池だれ一人ふり向かず
温もりを都会へはこぶ巡航船

竹原市 大島花炎

満ちて引いて海はドラマを繰り返す
たてまえと本音の距離に気づかない

和歌山市 西山幸

西宮市 朝山千世子

春風に女心を煽られる
春潮の満ちて見上げる昼の月

滋賀県 柚木踏草

貰い泣き女は明日を考えず
来客が帰り座敷の雑魚の覇気

唐津市 三浦ひろ坊

決算期よっしゃよっしゃと云うとれず
タレントも落ち目の党へ振り向かず

唐津市 田中紫浪

趣味読書それほど本は読んどうらず
スキヤンダル有名校と聞き流し

岡山県 柳原孝柳

世の中の甘さを蟻は知っている
ピカソの前で女に声をかけ

樫原市 西本保夫

定年へとうとう地位はついて来ず
定年へ名刺するのはもうやめる

島根県 岩田三和

待っている人になぞかけ春の風
冬生まれ寒さに強い子になった

羽咋市 三宅ろ亭

毒舌が去って一座はつとずる
冷徹の論理満座白けさせ

松江市 岡崎雪美

わたしにもあったお手玉した頃が

多情多感まだ残り香のある女

東広島市 石井 さわ子

カーテンの切れ目の春の陽がのぞく

さようなら女下唇を噛む
制服をぬいで婦警は母となる

松江市 梅本 登美也

一つぬぎ二つぬぎして冬を捨て

山口県 高崎 雀声

日雇バス一人一人をつまみ入れ

一生のミスがお互様と云う
尖ってる声には圓い返事する

岡山県 池田 半仙

石けんは身体の間隔までも知り

寝屋川市 福富 隆子

父母の恩を計るに山と海

豪雪の記事肩越に読むラッシュ
寒肥を忘れたバラの木も芽ぶき

宝塚市 吉田 笑女

二百海里言うて鰯も膳に乗せ

新宮市 西尾 功

抱き合うて肌たしかめる寒い夜半

融通無礙もう限界へきた輪ゴム
春宵一刻積残して行く列車

富田林市 中村 優

いさかいのあとにピーポー車が走る

鳥取市 岸本 無人

呼び捨てにされてニュースの立役者

小便小僧つららさげて居る寒さ
豆撒きへ心の鬼まで追出せず

大阪市 欄 蘭

寶石にふり廻される手が憎い

鳥根県 飯塚 虎秋

サンガラスかけてほんとは見えかかり

座り込み戦術おもちゃ屋でおぼえ
二〇〇カイリ私にエンのない魚

北九州市 三上 春雄

五十年思い出重くのしかかり

大和郡山市 今谷 紫園

幽霊に足かきたせば夢が消え
空堀に昭和の草が生い茂り

姫路市 大原 葉香

三人で話し合おうと言う縄れ

岸和田市 池田 香珠夫

妻の座の仕合せ過去をふりむかず
紅花の私語にそつと耳を借し

富田林市 奥井 春子

手が踊るだけでは足らず輪にはいる
頭から足の先まで入学し

鳥根県 安達 潮音

ストーブの塵 流れ行く風も春
あと三とせ金婚式へ鞭をうつ

やけくそが認められるも運のうち
すぐ人を殺す作家の無神経

遠い山まだ雪土の匂い掘る
どこにでも不満辛抱かみしめる

春一番先ずゴキブリが目を覚まし
月夜だから動き廻って蟹がヤセ

紆余曲折よくここまでを振り返り
なるようになれと余生を期待せず

遺影抱く児は悲しさまだ知らず
人生を卒業する日の墓場買う

オルゴール女の心見せて鳴り

酒だけが男の涙の理由を知り

張りつめた心海峡通り抜け
骨抜いて呉れる妓も鮎どころ

今治市 渡辺 南 奉

和歌山市 岩 倉 天 彦

大阪市 平 井 露 芳

東大阪市 加 藤 千代子

鳥取市 有 田 鹿の子

唐津市 田 口 虹 汀

倉敷市 藤 原 健 二

尾鷲市 渡 辺 伊津志

大阪市 野 田 君 枝

結婚に持ってきた雛古びたり

けなされながら額におさめた寒椿

カレンダー広告文字は切って吊る

風神の怒りか黄塵空を覆う

迷惑がかからぬ恋なら拾いたい

ケチをして資源節約と云うもよし

昼メロで女心は揺れ動く

擦り切れた地図に澄んでる人生譜

ドラマなら別れて逢わすこの波止場

先生の疲れめがねがずれている

電照菊文を揃えて出番待つ

お水取り厚地の服をかたずける

堺市 堀 畑 日々子

泉佐野市 大 工 静 子

橋本市 森 脇 善 彦

下松市 徳 光 秋 人

出雲市 板 垣 夢 酔

出雲市 藤 井 晴 月

松原市 北 野 久 子

和歌山市 松 原 寿 子

長崎県 岩 崎 和 子

岸和田市 高 橋 雅 子

羽島市 伊 藤 静 枝

東大阪市 西 條 文 子

鳥取県 金 川 満 春

ノータイ論時に庶民に都合よし

太っ腹よっしゃよっしゃが罪つくり

春一番人に追い風向い風

テストいやテスト反対テストだめ

カッとなるあの一言が悔やまれる

現代っ子螢の光もよく歌い

四人目も男児四郎と付けておき

退院の老母頼まぬに針を持つ

唐津市 山下 勝一

唐津市 岩下 照沖

唐津市 桑原 掬治

唐津市 佐々木 久隆

唐津市 岩崎 實

唐津市 松垣 岩光

八戸市 島田 昭治

大阪市 新川 貞祐

旅券にはまだ残ってる御紋章

春雪に遠い受験の子を案じ

栄転の友も飲屋に借りがあり

ルウジュする鏡の奥に違う顔

お下りの赤いネクタイ若返えり

熱湯に貝はあえなく口を割り

モカの香りほのかに恋は熟れていく

汐時を心得ている年の功

鳥取市 勝山 紫宏

七尾市 松高 秀峰

尼崎市 駒村 岳麓

豊中市 田中 善四郎

泉佐野市 原 みい子

八尾市 小川 洋子

今治市 園部 正則

ここも読んでください

▼「水煙抄」へ投句されている中に、雅号を句の末尾に書く人があります。すべて本誌のように、雅号は句の頭に入れてあるので、投句される時は、かならず発表誌のようにお書きねがいます。

▼投句用紙は本社の糊箋を使っていたいたていますが、他の用紙をお使いになる場合は本誌と同じサイズにしてください。選句を

印刷所にわたすとき、大きい紙はそとへハミ出してしまし、小さい紙は綴じた場合、ひよとして前の紙の中に隠れてしまいかも知れません。分身である「句」をもっと大切にしたいものです。

▼達筆のみみずが這っているような文字は、活字を拾う人には苦手です。字はヘタでも大きくハッキリ書いた原稿に誤植はほとんどありません。たとえば「泉」という文字をヘンにつづけて書くと「白水」になるし、その逆

の場合もあります。「金」という文字を「人生」と誤植しました。原稿をよく見ると、金の上の方が「人」に読め、下の方が「生」に読めたのです。とにかくゲラ刷りが回わってきたらスグ校正をして、印刷所へ送るため、ゆっくり句を味わっていられないのです。

▼原稿にうすいエンピツ書きも困ります。

▼前号誤植訂正 P 13上段16行目「マゲネット金塊などには目もくれず」

▼選句や校正にご協力ください。

川 柳 塔 600 号 記 念

— 誌 上 同 人 句 集 —



(到 着 順)

大阪府 橘 高 薫 風

仏手柑ひとつ新年の文机に
阿難尊者に遠し恩師の忌
童眼生別死別異らず
ペン握る指のかたちも枯れはじめ
似てゐると河童は蟻郷に見入る
小佐野児玉の暗い寒山拾得図
露草よ額田王が袖を振る
どくだみは箴言よりも人を刺す
中年やコーヒー色に錆びはじめ
死後の肋は赤い鳥棲む鳥籠に

大阪府 大 峠 可 動

まわり道して来た人間の輝きよ
人間の姿勢くずれて老母のうた
なだらかな斜面に夕日乗せる街
鮮やかな嘘が飛び出た歯が白い
孤独とは壁のすすけにさも似たり
さざなみと夕日の愛撫嫁ヶ島
街の灯の破片が窓の眼にささる
壁越しにクシヤミを砕く音がした
春よ来い寒波に触れて咳が出る
四季の国 匂い忘れた花もあり

岡山県 本 田 恵 二 朗

捨て去って心も軽し身も軽し
友情の表も裏も同じ彩
核と核はどよく継ぐ電話線
愛強し汚点消しおうて消しおうて
血みどろでつかんだ自信の胸を張る
骨休めする気ひととき馬鹿になる
キューピットの弓が借りたい片思い
朝顔と夕顔みたないな共稼ぎ
自動巻が止ったような妻の留守
野仏が歴史家の足呼び止める

鳥取県 清 水 一 保

人間にも酒にも等級つくるとき
愛妻をライバルにして読書もし
忙中に閑有り閑をつくる幸
道草を喰いつつ人生趣味も連れ
最高と最低が有り中を生き
食欲となつて労働報いられ
台所の方にも気圧の谷が寄り
川柳の虫だと紹介つけ加え
子の名みな呼んで慌てる子沢山
寒椿雪をいただき余計燃え

大阪市 中 島 生 々 庵

贅沢は拝む心を忘れさせ
貸す方も血の出るような金を借り
ふんばつてつり銭渡すバスガール
親ヒスに子ヒスをほめる小児科医
粗品とは書いたが内心得意なり
この寄附にさもしい裏の裏がみえ
左り前しさい語れば愚痴になり
我ながら見事な嘘を思いつき
欠伸するしぐさも寂し総入歯
枯れてから又糞虫の役に立ち

大阪市 中 島 小 石

蝶よ花よと人生の幕があき
けし粒に似た人生を泣き笑い
夕桜一人静かに歩きたし
惱みもつ胸に青空青すぎる
倅せは愚痴も話せる嫁が居り
片手落ち神は女にだけ産ませ
すれ違うだけで嬉しい気の弱さ
足許にある倅せに気がつかず
我れ女愚痴の多きをさとつてつ
ヒスイのごと澄める心を探しあぐむ

大阪市 江城修史

慾望と言う名のレールを子が走る
子が敷いたレール錆びぬ日を願
子に賭ける夫婦に終着駅がない
子に賭ける執念脳裡を亡父の顔
雑踏に暮しの違う話し聞く
名門のかくも重たい荷を背負い
執念に生きた命に詩が生れ
軽い日も重い日もある義理を下
友情へ振る媚ならば捨て給え
生きる日の限り恩師の温くみ抱く

奈良県 岩井本蔭棒

戦友の碑に付つ つわものの影も老い
捨て猫の楽しい夢に鈴の音
渴いてる男と女すれ違い
避難からときどき家を見に帰り
三度目は怒鳴られてる遠い耳
名曲もおよばぬ母の子守唄
朝風呂でゆんべの首尾を聞くも旅
青雲の大志郷関出てダフ屋
女みな美人に見える日の自嘲
邪心みな捨てよと叱る空の青

大阪府 行天千代

一人寝の佗しき夜を百合匂う
噛み合わぬ歯車冷たい夜が更ける
金出して使いも当るあみだくじ
こげた鍋やっつ磨いて心満つ
茶柱が立ったに友の悲報来る
貯めて死ねば子は競輪へ捨てに行き
白髪染め六十路過ぎて女なる
牡丹さえ糞しべ脱いで春仕度
晩年は吉と八卦はうそを言い
枕して明日有る事を信じよう

大阪市 室谷徹舟

託児所を出てホステスの顔になり
制服の手前こらえる人となり
自惚れのきつかけとなる天一句
二日酔い娘の一言が突き刺さる
青い海青い空見て砂平和
キャンセルを待って乗ったらハイジャック
マスコミを敵に廻してから落日
溺愛が裏なり胡瓜の子に育て
スト解除客も現場もはっとする
制限を越せと許りに舗装する

富山県 関美子

夕映えの浮巣ここにも核家族
子をかばうあまりの妻は他人の瞳
叛かれて眠ったふりをしてあげる
夫唱婦随泥の舟でも乗ってみる
ルーレットここで止ってここで生き
秋少女胸には育つひとのあり
恋終る風に涙をあずけた時に
爛漫のあそこは水子始末室
北枕はたち黒髪なすな恋
ベット抱いて人工着色女の朝

大阪府 若柳潮花

冷えてゆく愛を昏知っている
朽ちた樹の匂い祠の雨あがり
どこへでも行けと蜻蛉の糸を切り
待つひとがあるから燭冷もろて去に
遊歩道単衣の衿へしのぶ月
緋に燃えて何故秋に咲く曼珠沙華
忘れさせまいとするのか夢に立ち
春の雨牡丹の色を砂が吸う
逃げてゆく若さへすがる髪を染め
縫いあげて着せて宵には帰すひと

兵庫県 黒川紫香

たらこまたひとりぼっちの火ではねる
杉木立の中をきらめく太陽
古寺で冬を堪えぬく虫も居る
人間の世界へスルリ蜘蛛が降り
干からびたみみずは蟻も餌にせず
飛び込んで蛙こつちへ向き直り
知っている顔にむつくり大は起き
干し傘の間をにわとり逃げ廻り
洞窟の神秘音ない音がする
野仏も老い給いしか草騒ぐ

大阪府 児島与呂志

過去を追う日々の節分の雪白し
斗病は四角い空に詩を喰い
さかり猫鳴き声くさくさする女
振り返る歩巾大きい日小さい日
善人は自責の念に闇を読む
愚痴並べたてても自分には勝てず
秘密もう年輪になる老いの嘘
これから道の坂下り坂ころぶまい
一節の道他人様の愛の嵩
まあまあで済ます世間は過去のもの

大阪府 斎藤三十四

祈ることが一つふえた孫の入試
正論を吐く時男鬼でよい
秀吉に似てる手相黒眼鏡
裏話し今も想い出笑いどす
肥満体デザイン通りにはゆかず
縦縞が少し細身に見せてくれ
真相は風の便りがほんとなら
俺に似た孫は正義の喧嘩好き
伝統の今日若草山に火が走る
母の愛非行Aにならずすみ

大阪府 大路美幸

いちじくの花よりしずかな兵士の死
天皇の顔に哀しみだけがある
勝ちつづけた男の果も灰である
マスケット抱いて少女は風と逢う
いつまでも受身のままの耳二つ
菊作の父の背なから冬になる
初恋をポカンと割ればガラス玉
妻の酌ぐ盃 海になつてくる
傾いた柱に系図がのしかかる
丸ビルの高さに嘘が積んである

山口県 弘津柳慶

本心を隠して皮肉続くなり
きゆりもう季節の野菜にして呉れず
ほんとうの娘程には嫁を見ず
痛ましい程に陛下は口ごもり
私作る人でいいわと妻すなお
金かけた割には帯止め見てくれず
帰省子へ麻雀でいかれたら
シャッターを切るまで山門へよけて立ち
孫に電話したくて妻へ謎をかけ
泣いて来た妹へ兄の義侠心

大阪府 辻圭水

福相が頭下げたで丸うすみ
単刀直入顔は真赤になったまま
突当り鬼瓦だけ目に残り
積残しすまない顔をしてくれず
予算通り使うにこうも判がいり
本音をば女はとうに知っていた
アルコール入ると本音でしまい
点検の苦労は下積みだけが知り
メーターが気になりだしたとめる位置
川柳も添えて祝の詞さえ

大阪市 天 正 千 枿

宴たけなわけ引きつきまとい
戸口に立つて入門したと思ひ込み
無器用な老人恋に沈みかけ
ささやきを鉄砲百合は他言せず
納得さすには文章貧しすぎ
食いちらかした思想不消化に難居
もと恩師厚意の上へあぐらかき
振り返る余裕これが花道か
水さびの浮きし壕なり余生かも
現代を呼吸し一人相撲取っている

鳥取県 八 木 千 代

打ち明けてくれた十字架ともに負い
ひきながらひきながら潮 満たんとす
その日雨あとは心に書く日記
久々の素足へ女たかぶって
問ひ詰めて女愚かな溝を掘り
ふすま半分閉めてひとりの城つくる
銀婚へ曲りくねった道で着き
二十歩を踏めば二十の足のと
翼切られても鳥の瞳は空を見る
虹を見た日から変えない散歩道

佐賀県 新 岡 回 天 子

どう言つてだますか帰宅午前五時
宇宙船米ソの智恵を吸つてゆき
敷八の身代り息子のかえらない
父からの怒り母へはかよわない
頼りない膝へ大事な障害者
噂には昼ほど明い蜚した
人生に疲れも無い意気年七十
色々と不足キャンプ村たのし
生々し名刺かしこき処に住み
名を売つた父もここまで道おわる

岡山県 直 原 七 面 山

乳房預けて女恍惚
夜を彩る愛の睦言
猫抱く女の乱れ髪
女の方も酔うて春
きつく抱けば女は火
燃える女の息が切迫
乳房に掬む眼の熱気
指伝つて流れ来る愛
決断を迫る女の眸燃え
恋持つ女の肌は火の色

大阪府 村 田 瓢 太

初盆へ寡夫は呑むより芸がなし
九輪の彼方は浄土なり夕焼す
焼香の列遅々たり夏のモーニング
かくも科学進みたる世に百度石
一寸先は闇それでも明日を信じたい
硝子拭く脚下に御堂筋動く
鶴に似たる自嘲勤めのタイ結ぶ
孫の片言聞く楽しみもある電話
這えば立てたてば立つたで手がかり
来てうれし帰ればホッとするも孫

兵庫県 梅 谿 庵 不 醉

追われるな仕事を追えと初訓示
税務署で泣いたが鬼は笑つてた
真実を言えば税吏はにが笑ひ
税務署が来た夢さめて油汗
下取りの査定もきかぬ歳をとり
誰に似たうちの胡瓜が皆曲がり
猫でさえ三日も恩を覚えてる
算盤で検算された計算器
釘でさえ素人玄人をよく見分け
出し雑魚になる覚悟して受ける役

山口県 平田実男

養老院また家柄を自慢にし
家裁へ勤めて離婚に踏み切れず
消防署訓練だけがちと不満
見る人はちゃんと見ていた陰の汗
成金となった香車の不甲斐なき
小さく切り過ぎて西瓜の味がせず
松茸は嗅ぐ食品という我が家
子の勉強部屋へ明りのある安堵
人生の坂道妻との歩を揃え
釣マニア魚拓をミリの目で競い

高知県 川竹松風

打ち寄せる波のリズムを見てあきず
過去は言うまい一児の母である。
この人も風呂敷だなあと仲居聞く
失恋を忘れる読書とは悲し
移転して四五日眠い昼下り
思ひ出もそれぞれ八月十五日
失業へそろそろ妻の風当り
口笛を吹いて笑われる齢になり
耐えて来た女に花道がない
再会へ人妻という距離を置き

兵庫県 小西無鬼

年金をうれし淋しい気で受ける
決断をする助太刀に酒が要り
血圧は薬で下げて飲み続け
お返しはチビチビにしてやと物価高
半生の重荷降ろして秋空を見る
歯一本抜けた気持の日もありて
俺は歌う僕の記録の軍歌だから
引退の潮時と言う感謝状
風林火山呼喚我若ければ若ければ
まん丸い月がやっぱり笑ってる

大阪市 小林トメ子

大島の対が目を引く敬老会
昨夜来た産婦今朝には二児の母
孫の愚痴言える身を羨やましがり
アパートへ叙興の知らせ大さわき
ぼろくそに言つてた娘が世話をする
医者医者で薬多過ぎ消化せず
死んでから父の遺言増えて来た
口だけが通っている未亡人
書き初めは孫の年玉から筆はこび
仲の良い息子に位牌抱かれて

石川県 馬場魚山

入婿が鎖のままで古株になり
陽溜りに子供の声の暮るるまで
買いに来て呉れとマイクで春を呼び
観光の季節仏の指のつや
つまきまとう女に弱点見逃かされ
ままごとが物価が高い等と言ひ
どきつく喋って次の手段を考える
受験期になると入試の意見出る
後をつぐ心になった不合格
金メダリストの無事が被害の先に知れ

大阪府 和田維久子

すばらしい夢は瞳のうちに住む
その愛に答えてバラの素直なり
鈴の音心の糧と明け暮れる
流れ星あなたであれば背負いたし
名刀に似しやさしさが心斬る
価千金一行の墨うすくとも
悲しみの軌が決まる心あり
ノーと言う勇氣が厚い壁やぶる
人生航路籠に乗る日もかつぐ日も
本当の答は神にまかしく

兵庫県 小 畠 無 聖

昼風呂へ切腹するよに坐り込み
たしなみを知ってる足の斜めなり
花抱けば尼僧の胸に春がいる
悶えてる女のように緋鯉潑ね
名作のままに終着駅が暮れ
風呂あふれ魚はこけて妻は亡く
水仙の露ひっそりと掌にこぼれ
氷河にも負けぬ先祖の血が流れ
石碑に女の性を秘めて嵯峨
雨の裸灯僕の心を洗うよう

和歌山市 沢 山 福 水

柳友はよし互いに多く語らねど
発車ベルコケシのように佇つ夫婦
故里の高い敷居へ妻を連れ
社の人事二者残望で暮が下り
旅衣一期一会の膳の色
再起した男の汗に虹が立ち
雲去来人は挽歌を繰り返し
年寄りの愚痴聞いてやる石地蔵
激動の世へ十年の浮き沈み
筋書きが私の過去に似た喜劇

大阪府 岩 田 美 代

交番に巡査は居らず月上る
トラックのラジオはワルツ水菜積む
雀おどしに男と女の傘がある
目は二つ温と冷とに分けてある
呆けるのが上手になって淋しけれ
妬心抱き蛙の声に聞かれる
ハンドバッグ今日の手ぬかり詰めて去ぬ
梅らつきよ漬けて絆で何だろう
鰯雲今日の続きは明日になし
老朽船の追悼赤い靴で乗る

兵庫県 藤 村 べ 女

逆境を生き抜いて来た母静か
前向きに生きて明日の夢光る
子に生きたそれだけで母心満つ
つぶやけば心の届く星である
一息に飲む故郷の水甘し
過去慕う女ひとりの糸車
ついて来る影を抱きたい日の孤独
倅うすき女の好きな古都の秋
真夜中に眼覚めひとりの部屋と知る
ひとり寝の部屋の広さの夜が憎い

大阪府 川 口 弘 生

十二月某日額ストーンと落ちぬ
飛んでみて空退屈なものと知り
大阪の鬼門に住んで医者で食い
あの人もあの人も居て今日がある
誕生日やっぱり降った雨男
麗筆を羽織る句集は春生れ
鯛島のお目目が可愛い古座の浜
六月二十止庵 雲の峯へ抜け
徳は孤ならず 金婚の川柳会
石有情 善意伝える文字を抱く

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

無一文というスリルも涼しかり
帽子に線あ人類の差別好き
要領で米は作れぬおもしろし
生きのいい蟹だとむごいことを言う
糶播けば水にたのしい乗のあり
五指絡ぎ合わせた生きたる楯とする
紙屑をつくただけの五十年
みの虫ののぞけは外は春だった
こん日ただ今愉しかったらいいと言う
舌銚の鋭さに似ず細い指

兵庫県 傍島静馬

へんくつが素直になつて呆けはじめ
ぜんまいを巻いても芯が弱つて
寝付かれぬ夜はそこらが痒うなり
集金へ留守と言おうかと、こども
先取りの釣場に釣師の今日がある
受付から奥を日参まだ知らず
目分量ただそれだけで母の味
機械化の田圃に詩が消えてゆく
北山杉気のままなボーズ許されず
廃抗の村に祠が捨ててある

大阪府 竹中肖二

大阪に住み慣れました味噌雑煮
「かまくら」に童話ひろがる灯が揺れる
日溜りに寄つて焼香順を待つ
手枕は雨の飯場の国なまり
伝説を抱いて沈んでゆく秘藻
女待つ向いも女待つらしい
真打が持てば扇子が喋り出す
祝電はネームバリューの順に読む
真相を語れば他人を傷つける
喋るからお里が知れた令夫人

大阪府 竹中綾女

山茶花の花芯に蜂を見た小春
石山の石の白さを増す小雨
予定又くずされストに沸く怒り
廃駅と桜は知らず咲き誇り
チグハグにボタンを掛ける火事騒ぎ
娘の心奪つた彼が憎めない
博多帯の絹のきしみに亡母想う
民宿の夜は民話で更けて行き
ガラクタのさて多過ぎる台所
足許で男女の区別やつとつき

岡山県 能登原白水

花咲いて太古に続く春霞
風鎖となり切る妻の癖愛す
献血のまだ見ぬ人の血が流れ
慄然として文盲に負けている
天の余技ダイヤの星を水に描く
人生かす奥ゆかしが胸を射る
達観の母、方円の水となる
秀明な硝子で影に彩がない
握り飯味は神代に続くなり
自からをいじめて覇者にのし上る

島根県 錦織文子

また春が この頃四季の近い距離
降るような星へ未来を問うて見る
女炎える白エブロンが憎らしく
十指みな生きてる稚児の匂い抱く
舵のない枯葉気ままな型で舞い
人間国宝となつてからすきとおり
夕茜今日の歩みを染め上げる
乾かない言葉探がして二人住む
世の流れ濁の深さにうろたえる
巣立つ子へ父の母の巣がゆれる

岡山県 野田素身郎

エレベーターおんなじ柄と乗り合せ
子の編んだマフラーごつごつして温し
左還の地ここには蜻蛉も蛸もいる
吊革を両手で握り夏に耐え
妻と同じ名のホステスで弾まない
共棲きコロケの好きな子に育て
飲む話もうネクタイをゆるめると
糊べつとりつけて拒絶の封をする
母病気父のまああるい握り飯
半生記に書けぬ女が一人いる

大阪府 川村好郎

春闘のからくり福祉の旗も振り
子を捨てて女を馬鹿でかたづけ
好きだから過去も齢も聞かずおく
道遙か耐えねばならぬ時は耐え
うらむまい都会の雪は消えやすく
久々に逢いもう使えない言葉
不倖ですと勝手にきめている
狙っているうちが倖せかも知れず
驚いたわりに少い御仏前
石投げて女 波紋の外にいる

大阪市 正本水客

雪まんじ借景の山見せじとす
のぼるほど雪に変わって海が暗れ
梅しろく冬の陽脚をためている
梅林の三三五五と後や先
水蓮の色とりどりに動かずに
天下泰平ワニの子の鼻ならぶ
水仙群生 海から春の風になる
灯台と水仙と 岬は冬を抱えている
女ずもう伊豆の下田は昔から
百花りようらん洋蘭のパレード聞いている

岡山県 藤井春日

妻と言う杖あり険しい坂も越え
金貯めて心貧しく生きている
それなりの生き方もあり名無草
紆余曲折タクトの欲しい人生譜
真実一路心の蓮開かれん
一隅に住み太陽をはばからず
生涯を種木遊びのように生き
和服着て主婦の重みを見せている
売る方が気の毒がつてる物価高
Dライン横綱歩む姿なり

兵庫県 榎谷漫柳

半分は売り子の趣味を買うネクタイ
天使になってもいいわよと妻喚し
幸せが見えずともよい坂登る
金脈を手ぶらで登るこわい奴
裸から先きの自由は神が知り
おごつてる方も楽しい大ジョッキ
子の鬼も居るだろ甘い豆を混ぜ
反省のたびに亡父が顔を出し
あふられてするめは急に世をすねる
太棹となつて古木の冬のうた

奈良県 岩本雀踊子

女を泣かす駅の時計は正確で
明日する仔猫がめしを食べ残し
氏神の死角で巫女が餅をやく
内縁で逝つた女の名をかばう
磯の香を落して女に戻る海女
ふる里へ他人を泣かせて来た錦
一本のマッチが照らす闇の幅
きつかけがはしくて小さな嘘をつく
肩をもむ指にさわつた父の歳
憎めない女が残すバラのとげ

大阪府 香川酔々

一灯に貧者の本音秘めてある
鬼が来て天使は来ない水の泡
唇が消える環状一番線
飾り独楽不意に刃渡りさせられる
阿吽の呼吸で同じ釜の飯
おだてられそこで地獄に堕とされる
シャネル五番でイエスは欺せない
親である絆は断てぬ逃亡者
単線に乗って時雨れの音を聞く
考えてごらん影なら離れない

大阪府 横地雅風

手作りを知らぬ子供のおもちや箱
人の波海の波さえ押しかえし
止めようか農夫の欲に陽が落ちる
奇型大作って動物愛護です
すやすやとわが極楽の理容いす
たくあんのを若さの音に聞き
頑強な意思 砂まみれから育ち
折らても花 天性を床に咲き
台風が来たと釘打つだけの智慧
稼ぎ抜く習性余暇を知らず老い

和歌山県 津田与史

春の字を日記に一ぱい詰めておく
幾曲りしても曲る角がない
ああ軍歌 まだ軍人の血のかけら
七転び起きない達磨も中にある
のんびりとせよと心臓病がいう
理路整然と生きた貧乏つきまとい
第二の人生野菊あたりで手を打とう
ある日フト落葉と話してて僕
光陰の矢よ時は折れてくれ
あかんでは済まぬ私は生きている

東大阪府 落合思月

商才のある妻年上はね返し
自信過剰三十のハイミスたじろがず
白紙にインクこぼしたような今
虚勢さえ張れない哀れな養子なり
立ち枯れのような性にフト気付き
足腰を鍛えて七十うとまれる
果しない夢を積んだりくずしたり
あざやかな幕切れ転動したつきり
パラエティにとんだ家族で和を保つ
いがみあい底い合っている二人

大阪府 本多柳志

老骨を庇えばきつい向い風
平和とはいいいない男性化粧品
軍艦マーチいくさに負ける曲でなし
名刺交換して開戦のラッパ鳴る
国会中継わが一票は眠りこけ
冬の蠅お前も死期を逃したか
妥結してまだ戦いは終わらない
マスコミに媚びて主張を見失い
地球儀に平和の国の見当らず
写経してわが仏心を悟らされ

奈良県 草深醉升

気象庁あすのプランを迷わせる
ふるさとの潮騒聞こゆ蟹の味
色も香も秘めて尼僧の悟り顔
不況風よそに春日の鹿の艶
細々と生きても心に持つゆとり
費うためのお金ですと妻も老い
食べるだけですと倅せそうな顔
明日がある店ですべてがゆきとき
ほんとうらしい嘘を真顔で聞いてやり
貫禄は広い机がつけてくれ

兵庫県 仲 どんたく

茅渚の海 金波を割って新年生まる
ほおずきを鳴らして汚濁の世を知らず
岩壁の靴三足へ風が泣く
遺作展 舞妓は年をとらぬまま
眉青き尼僧に業の燦る夜
声あらば泣きわめくらん びくの魚
冬の陽を拾うがごとく女脱ぎ
フルコースのナイフに似たり手術室
よよと胸に泣きくずれたことも無く

和歌山市 小川 佐知子

さわやかな別れ珈琲が温かい
盃をふせて本論切り出され
過去のこと忘れて姑の背を流す
花便り聞くばかりにて出勤す
かたくなに意地を通した日の憂い
傷深く残し他人の顔でいる
地に消ゆるまでを一会と雪は舞い
寝転べば宇宙は広し何の悔い
瞬きが胸に広がり愛つもの
断ち切れぬ愛へ煩惱渦をまき

岡山市 小幡 里風

灰皿があるから男考える
恐ろしい女だ微笑で耐えている
釘一本抜けた同士のおつき合い
子が父を背負うて渡る丸木橋
着ぶくれの夫婦が唄う枯すすき
石女のふと雑草の種妬む
実力者の死角で水が漏れている
一石二鳥そのメリットに丸い石
迷彩を纏い墓穴を掘っている
まんだら炎で尽きる見栄の女

岡山市 稲田 豊作

妻子背負うて獅子奮迅が花の頃
針ふくむ女に紅い色が褪め
口喧嘩勝った余韻を泣く女
波頭驕れば奈落が待っている
枕して反芻して苦勞性
にっぱんが禿げて来たよと渡り鳥
脇役の心花道掃いている
庭石の苔を老醜とは言わぬ
忘却の流れに亡妻が溺れそう
帰来の雲と話している平和

大阪市 島田 雄峯

紅葉の意義を知っていたもみじ
それからは言葉がいらいぬ握手する
真実を話す瞳は雲を追う
大器晩成そんな迷いの中にいる
一万米上空地球は丸いと思うロス
愛された証拠が動いてこの不安
悲しからずやOL貴族と言う言葉
人を憎まずとおさまっていたおくれ
万一を言うて弱さが甘えている
消えて行く今を踏んでる靴の音

岡山市 嘉数 千代香

埋れ火を母は種火として護り
編棒の交差に母の愛を編み
小石落つ海の深さも知らずして
版面錆びついて個性となる怖さ
昂ぶりを消す洗濯を白く干す
靴音が親をはなれる音で鳴る
戻らない日記へ廻る風車
亡母点となりてこころの海に付つ
今日を積む積木はきょうのうちに積む
呼び合うてふたりに長い坂でした

愛媛県 長野 文庫

人工美自然に比べけちな景
竜宮の屋根が錆つくほど濁り
寸の虫脱皮をしても矢張り寸
死んでから蛇の身の丈計られる
父母をやきもきさせる子の呑気
雪が消え緑が見えてはつとする
小商い線も区切りもなく生きる
ちっぱけな夢に明け暮れ小商い
おちついて食べるゆとりも無い雀
かくし度い過去を他人が掘り返えし

大阪府 高橋 千万子

新しい暦のここに待つ吉事
生涯をしるダイヤを軽く受け
カレンダー破るに惜しい今日の目を
マフラーを忘れてそれから春になる
美しい蝶にも過去のある身なり
そっと噛む小猫よ愛のしるしかな
人肌を恋う秋の夜に猫を抱き
美しく染めても落ちた葉は掃かれ
やりばない心の迷い香をたて
餌だけを取られたような日がつく

大阪府 野呂 右近

働いた此の手を絹は何故嫌う
占いの火に道探る蛾にもなり
大物の器で無いと酌いで知り
一面に嘘がうつった三面鏡
尻に火をつけて螢は楽しそう
ゴキブリを叩いて犯罪感は無し
向き合つた紙の白さに書けぬ嘘
正座して明治女は縫いつづけ
からむ糸解かねば切れるばかりなり
切れかかるきずな繕い老の日

大阪府 那須 鎮彦

柱みな屋根の重みを知っている
台風に勝ったかがしは斜め向く
うつぶんを明日に延ばす日記帳
真相を解く時一人左還され
飾っても飾らなくても俺の妻
くいぶちを残してダフ屋賭をする
永平寺素足で悟りひらくとこ
クレヨンに男の糧が置いてある
ティーブルに男の糧が置いてある
漱石に会いたくなくて本開く

広島県 鈴木 かつ子

北風が吹けば私の過去が舞う
心にも欲しい小さな換気扇
噂だと思ふ浮気が氣にかかり
働けばこんなにはばらしい夕陽
嬉しくてメガネが邪魔になる涙
枯れたふりしめて雑草は春を待ち
反省のあとから愚痴が追ってくる
生きている倅せ子が来る孫が来る
南天が雪にそむいた色で映え
ふくらんだ夢に現実追いつけず

大阪府 山川 阿茶

赤いベベ着せたい家に男の子
フリーセックス外出は堅固なパンタロン
三人が人形一つに汗をかき
新幹線物理数学雪に敗け
足腰をきたえきたえて癌で死に
春なれや孔雀も恋の意志表示
駅前で母はもう一度言いきかせ
手料理のもやしに長いひげがあり
石垣のくずれたような脳となり
コレクション鈴いろに振ってみる

鳥取県 森田 布堂

事故の児の記憶に泣かず鯉のぼり
伝説の山ふるさとの灯を抱き
遺骨待つ老母に墓標朽ち果てて
献血も出来ず貧血症でいる
暴力は反対という暴れよう
明日しれぬ命にいまを生きる幸
使い捨て叱る師匠の過去きびし
病床で卒業を知る母の笑み
足重く夕陽に急ぐ児の柩
合併に母校も土地も売られたり

鳥取県 石垣花子

日本語で外人土産の値引きさせ
漬物の秘伝旧家の嫁として
桃一枝抱いて流れる紙の雛
腕すもう父たじろがす子の育ち
子育ての路一筋に母の老い
巢立たせて女に還る服を選び
休養もせず風邪治す子だくさん
足も手も伸ばす産湯へ期待の目
勘当を許す氣にさす孫の顔
香典帳亡父の顔の広さ知り

鳥根県 小砂白汀

蓮根の穴の配列他意はなし
青写真なんと荒涼たる色か
金脈をたぐればドブにたどりつき
風花やふと古里へ帰りたし
ベニヤ板幾星霜の展開図
五月かなわが出生の風の色
ビー玉が天を妊もる雨あがり
春の譜をならべてひかる猫柳
つわ藪が黄金の花つけ微罪だな
上役に握られているのどぼとけ

鳥根県 岡崎祥月

川柳は無限大空青い海
丸い和に灯りを入れる雛一羽
コマの芯狂わず曲らずよくまわる
五線紙にドレミファソラシド人生譜
眼界を越えないねじを今日も巻く
終着のない汽車妻と俺の汽車
神を頼れば花が咲いて来た
売らんかな財布はそっぽ向いている
給水をのがれる雨のドレミファソ
神の斧うけて素直な斧となる

岡山県 浜田久米雄

いつまでも生きてとみなが言うてくれ
四海波立つて余生をあわてさせ
人生はこんなものと花が散り
お流れをいただきますは飲れる口
曲つて釘直してもまた曲り
冬はいや夏もいやじゃと生きている
敬老の日は日の丸を立てただけ
食欲がないのに箸を割ってくれ
年寄りに休め休めと雨が降り
しょうもない句ばかり一年中作り

石川県 伊藤茶仏

合掌の日々を重ねて七十二
肋骨を張って出歩くお人好し
おつき合いだから出掛けるお人好し
真実を語る記事にも嘘があり
逆襲のチャンスを狙う影法師
戦争を知らぬ軍歌が歩調とる
お豆腐の角が崩れて売れ残り
高官名伏せ賽の目が喋り出す
出直しの構図瓦礫があるばかり
角采の署名勲記が夜啼きする

大阪府 岸南柳

釣り竿を持てば天狗に寒い朝
張り合いの出来た心が顔に見え
見通しへ一歩も引かぬ明治の眼
忘れたい齢をきつちり祝われる
腕前はよくても食べぬフグの肝
親ゆずり毛皮も少しかどが立ち
満足以読めぬ辞引を買い込んで
はずれてるボタン気付かずいる紳士
先生を追い抜いて居た秃具合
ひらめきも二番煎じの味気なさ

大阪市 津守柳信

不況風知つて情に竿もさし
考えをなくした葦も立っており
レース縫み優雅に見える自己逃避
無関心よそおう愛は気付かれず
剛情を通してくれる職に生き
わざわざいの口を他人の眼で見つめ
うたた寝をのぞく真つ赤な寒椿
争いは避けて付添い小さく居り
まさ夢にしたいせめての黙秘権
使いわけ出来た笑顔へ立ちすくむ

和歌山市 野村太茂津

人を刺すそんな短詩を研いでいる
軽い眩いで胸のふくらみ盗みたり
天の声探せば足下にころげてた
花道の蜜 苦味かろう筈はない
悔悟る涅槃の軸に對峙して
死花がともきれいな灰の白
砂握る人間裁く音が洩れ
巢に帰る性を軍歌が背を押す
正眼へ呼吸整える隙は待ち
身を責めて責めて老兵生きつづけ

和歌山県 内芝としよ

巢立ちゆく子へ絵日記の頃想う
驚かぬ母にきびしい過去があり
想い出の宿で時雨を一人きく
粹人は粹人の姿気に入らず
嬉しい事つづいて貴男を尚悼む
色々とあつたが笑顔で締めくくり
伝統の心が難の瞳に生きる
追いこまれ意外な妻の肝つ玉
三界に家なない女が強くなり
口養生せずに薬を飲みつづけ

島根県 藤田軒太楼

根っからの世話好き忙わしき口にせず
一生の不作同士が古稀迎え
恐妻も酔がまわれれば愚妻なり
母方の資産がなにかと物を言い
ふた言めに隣の亭主と比較され
もめ事が済む頃合いに顔を見せ
感情のむき出て争点ばけてくる
緩慢の動き万象春に酔う
愛憎のきずな霧笛にさまよえり
聖者にも似て老梅にある気品

大阪府 福田丁路

割切って仕舞えばあつけない人生
正眼の構え竹刀に殺気満つ
み仏の法の厳しさに土下座する
かりそめに息する人の渦が巻き
人を皆敵と見立てて奮起する
やがて皆滅びる事を知るや君
ゲバ棒で日本の明日を支える気
伝統はゆかし振袖太鼓帯
衣食住足って録でもない遊び
鍬を振る汗が滴り土が肥え

大阪府 桑原喜風

露地裏に声かけ合うて小市民
素通りの巴里おしゃれも身につかず
天無言気儘にビルは伸びたがり
阿波踊り見てる阿呆にして呉れず
台所女の業が積んであり
睨み合う向うの村へ橋が出来
火種持つ二十静かに夢を抱く
急病に医師の注射も焦れたい
道を説く女一代黒を着る
空き缶のメーカーなじりたくもなり

鳥取県 河村 日満

ナンバーを見とく教訓だけ残り
病人に春が春がの季節もすぎ
石蔵れば憂さが晴れるとでもいうや
日々徒食まだ飽くところまでゆかず
新しい役に弾んで辞書も買い
柏手を打つ瞬間の信者です
文明に溶けこみ父もガウン着る
雑兵に間違ひはない人生譜
満洲国ははじめからない世界地図
雄雌の区別はいらぬ蠅叩き

広島県 榎田 英詩

夫婦円満セリフをとちることがなし
子の咳を氣にする母の咳止まず
時間がないから鏡に納得させる顔
電話ベル近くにいたから立たされる
作業衣が白く要領よい男
人の字のつかい棒に妻がいる
恍惚の時に驚く記憶力
孤独な男を孤独にさせる発車ベル
子の夢の砂場に父と母がいる
アリバイを探す不倫の恋だから

岡山県 出原 敬一

三月三日の傾く首に亡母が棲む
悪友が血止め薬を塗りに来る
酸性の体で重い苦を背負う
極楽へ招くに妻子よなげ縋る
証しなき妬心にしみる蕎麦の花
天井から女の志が降ってくる
のつばらばうの女がわらう白昼夢
情熱にほだされ化石喋りだす
これきりの女に押印しいられる
石女へ神の火種を与えやる

島根県 榑原 秀子

人恋いのつい独り言する雪つづく
金鎖で打ちたい釘がみつからず
陽の踊り春立つ庭の樹々に咲く
おひなさま昔話がつきませぬ
過去一つひとつ引き出す春の雨
処刑かな母へ銀の匙光る
投げられた石の痛さに耐えておく
田舎みち羽織でどこへゆくのか
山茶花のハラハラうす陽嘆くかに
述懐の昔へ足袋を繕いぬ

和歌山県 大矢 十郎

会釈して置く此の人は高利貸し
神主でさえも神様には逢えず
クーラーの部屋で工事の指図受け
金で済まぬ金で済まぬが金で済み
宝くじへ並ぶ汚職に遠い顔
セン抜きも帯から出ると高くつき
目撃者になれぬ私にひまがない
ダムの水抱かされて山腑に落ちず
七人の五人を知った妻の勘
人生は斯の如しと川流る

鳥取県 林 露杖

お茶のんでお手を握っただけのこと
プラトニックラブではとても間がもたず
足のケガ診せるに化粧念を入れ
続編が欲しい昨日の巡りあい
音立てて燃えて崩れてしまいたし
木石にみられ煩惱うろたえる
残された半生染める色を撰る
まだ燃える火がある焰見せぬだけ
損得がないので派手に手を叩き
倅せは自分の顔で生きる日々

東京都 山根白星

くちづけは断固許さず娼婦たり
はたと風止んで心得違ひする
イガ栗でとるお手玉をしかと見よ
ホステスの在所ききしにまさる雪
車窓から臉重たく水車の死
この人も身寄りを持たぬ屋の酒
惨敗に吊る首ならばうなだれる
思慮深くラムネは眺め眺め飲み
再婚を子も賛成をする育ち
歎異抄救われたと思います

広島県 山内静水

ご指名を頂き水を得た如く
幸福な小石土鈴の中に住み
ロボットの如 初孫の二歩三歩
一笑にふしてはならぬ妻の夢
言論の自由毒消しいらんかね
爪を切る女ちかごろ絵にならず
ああ古果はだか踊りを所望され
七人へ斬り込むラッパ妻が吹く
いま出来ることは子供に書く手紙
水嚙んで飲む鶏に胃が痛む

広島県 林野甍光

座禅組む臉に春の湧く気配
芽の出ない男が蒔いた土乾く
夜ずれのそんな襦の中に住み
円満な顔が焼いても吹いている
大仏の手のひら年金欲しくなる
ニュアンスを泳がす女の賭である
女性史を語るに女眉をひき
楽譜にはない官能を身でこなし
ピリオドは打たせぬピラが訴える
雲よなぜあの思い出が振り切れぬ

兵庫県 河原みのる

捨てに行く手間を省いて置いて出る
ミレーには済まない落ち穂ふみにじり
成田山頼るほかなきハンドルよ
ミサイルを撃つミサイルをうつミサイル
通勤はそこ退けそのけ特急が通る
人をうたがえと訓えることの悲しさ
ここまでの道を蛇口の water に訊く
あと追ひ心中君がホントの勇者だよ
朝フット覚めなんだよな死がほしや
あめつちへ四〇キロを還すのみ

兵庫県 若本多久志

梳る髪の薄さに詩もなし
世渡りの流れに丸うなつて生き
老醜をかくす哀れや身だしなみ
老い静か 秋の深みに心澄む
施しの喜びジーンと心満つ
無に還るそんな言葉もわかりかけ
天の声 もうお迎えが近いぞや
風葬にして欲しいなと思う日も
人生を夕陽の如く沈まんか
悟れないとこに仏の救い知る

岡山県 田垣方大

麦踏んで雲の心にとけこめり
草の根は補装の弱いところを知り
雑草が一番早く青をみせ
春の音雲にも色気見つけたり
ふるさとは姉が継いでた蓬餅
貝殻を拾えば波がついてくる
ふと秋を感じる入道雲の奥
からだごと秋にひたつて山菜し
帰郷して薬に老母のにおいする
ふるさとの夢には草ぶき屋根の家

島根県 堀江 正朗

台所コツコツ春を刻む音
掌に花を乗せて心をふくらます
泣くかわり笑えば笑うこと多し
指先の欲が残っている動き
うたた寝へ布団ふんわりまでは知り
陽のぬくみ両手に受けて秋惜しむ
長生きしろと胃袋つぶやいた
茶碗置く音のまるさや有難し
耳だけで生きて嬉しい事も聞き
妻そつと蜘蛛を逃してから掃除

島根県 堀江 芳子

夫と掌を重ねて生命確かめる
退院したら話したいことみんな消え
梅干せば母の匂いがつとくる
誕生日五十路も嬉しい鯛の色
かたつむり病むなよ殻を負いきれぬ
心経をあけて気のすむまで座る
ハイ一つ多い返事で聞いてくれ
座布団の座り心地に秋がくる
孫抱きに行った疲れが胸満たす
ひょっこりと逢うた握手がまだ温い

大阪府 西森 花村

一番に日の丸を出す無職なり
職場での親がビエロに見える歳
おもざしは母恋うる子の地藏尊
彼岸すぎライバルが死に弟子が死に
神様の返事のようにみくじ読み
日本のおなごはならし鬼女の面
嬉しさにうっかり本音出してしまい
冷汗も高等動物だからかき
本当の土をみみずはもう知らず
川止めに大阪で待つ新幹線

大阪府 羽原 静歩

新聞の小さき善意へ眼をつむる
鯉のぼり母のいない子も揚げている
ふり返る誤植の過去のあれやこれ
菖蒲園にひたひたの心経が匂う
土に還る春のいのちを沈丁花
睡蓮のなよなよ絆は断ち切れぬ
お茶漬けという名の倅せをかみしめる
降ってやみ降ってやみ能登の百面相
水子不動童話を読んで聞かそうか
雑巾をしぼり家風へとけてゆく

広島県 三宅 不朽

順々に真顔にさせる注射針
京ことば男を遠慮なく使い
三百六十五日搾取され精動賞
父と子のアメ玉はのぼのの対話
ひとりになると噴水が私を視つめ
月さんさん瘦軀切り絵のごとく病む
ふるりの雪あざやかな紺紬
人なら不落蟻ためらわず駆け登る
春愁の昼の鼓を聞くごとし
殺すぞと書いてもまるい砂文字

岡山市 光好 陽子

捨てられて案山子は悟りきつた顔
遍路宿孫の縁談できかかり
皇道楽土そこから裸で還つてき
走馬灯そんな私の過去でした
権利だけ言う世をながいていて白髪
へんこつの笑顔は初孫だけが知り
うつくしい筆蹟美人かなと思ひ
三十年子を持つ海を雁帰る
仏壇を清める妻に老いの見え
春の駅団体毎のくに詠り

岡山市 林 葵 丘

老婆の直感神に近くなり
床柱骨がささったとも言えず
へんくつと言われ孤独の世を渡り
世渡りは下手でも借金ない暮し
初恋は淡し好意のまま終り
初恋を抱いて尼僧に悔がなし
やせ蛙負けるものかと胸を張り
雨降れば雨を楽しむ隠居部屋
野外能風に向ってしかとたち
善人へ政治地だんだを踏ませ

奈良県 宮 口 笛 生

一合に酔う日五合に酔わない日
大字も小字も雪に埋ってる
見本品手垢残して回される
年寄りの出る幕ではないがという意見
禿げて来た白くもなった五十です
惜しくない才とも言われ他人の逝く
くれそうな家からまわる寄付集め
雨もまた良しとは旅の負け惜しみ
冷え切って女一人の城まもる
真直ぐに歩けて育てて来たつもり

広島県 森 井 菁 居

春夏秋冬哀しさだけがつきまとう
冬陽わけ合うて石仏春を待つ
いのち素晴らしカルテを信ずとき
この家の平和おむつが白く舞う
光陰をほのぼのランドセルを買
セールスに向く童顔に生まれつき
風をかき分けてトップの座が愉し
貝にはなれず男の階段がつづく
負けて来て天井の低さに気付く
男ひとり動物園は味気なく

広島県 小 島 蘭 幸

ウエディングドレス見つめていた二人
かつて愛した女が嫁ぐ秋の天
恋終るつくつくぼうし鳴っていた
人生に疲れたなどとまだ十九
僕は郵便屋さん陽焼けの跡もくつきりと
コンピュータ汗の過程は見てくれず
人間のもろさを知った日の暑し
危なっかしそうに頂上にいる男
屈辱の日から男の眼差しや
太陽は昇る負けてはならぬなり

大阪市 本 間 満 津 子

白杖の届かぬところで世が変り
壁避けて通った悔も少しあり
喜ばせすぎて嘘とはもう言えず
過ぎた日に花を飾って錠をかけ
忘れたいいことは枕に吸い取らせ
無理するなど言うて援けてあげもせず
叶わねば叶う日待つて暖めて
出迎えは小さな荷物も取りあげる
遠い子へ今日の思いは繋がらず
健康を得て遺言書書き直し

大阪市 神 夏 磯 道 子

雑言を消化して聞く耳を持ち
過去許し心の縄がとけている
出稼ぎの夫が叩くか雨の音
反省へ別の私がつぼむく
絆も切れず大波越えている
商談の隣は甘いレモンティ
落伍した自分を責めている拍手
受験前灯りが消えている不安
居心地がいいのか姑居つづける
倅せと思えば倅せの暮しなり

滋賀県 溝 口 はやを

芽出度いと言つて愚かな歳がふえ
ストをして権利のめしを三度食う
婦警さん はつしと止める十二トン
顔の皺消し肖像画出来上り
引金の手で握手してゲリラ去り
アベックの髭のないのが女です
アイシャドーおもしろい顔が出来上り
靴べらを使い二人を過去にする
塵箱のように四方の愚痴を受け
白髪染己も女も偽る気

島根県 柳 楽 鶴 丸

読み切れぬ小説のような 妻
ジャジャ馬になつてほしい夜もある
多産系の妻に不満な子が二人
良妻を一寸不満に思う日も
湯上りの妻 女に戻り
爪短く切つて職業に生きる妻
魔女になりたいと妻の日記
パイプカットを愛と思うおろか者
僕の血が入つて悪妻になつた
一目惚れわたしの一歩弱いとこ

大阪府 西 出 一 栄

春 気配素足が白い少年よ
チューリップ悴せ包む掌にも似て
胸の炎が少し落ちつく春の雨
梅雨雲の低く斗病氣詰まる日
斗病のそれでもつくる秋の服
古稀すぎて余生きらめくものが欲し
積乱雲でつかい希望を持てと言う
かこち顔照らして急ぐ秋の月
暖房の部屋にこもりて視野四角
オクターブ下げて老らく恋の唄

大阪府 阿 萬 萬 的

自然にとけるくらし自然に逆らわず
土に生き雪を耐えぬく人の智慧
辛口が自慢で雪の里の酒
寄りそうように山里的屋根つつむ霧
人を恋う宿で椿の苗もらう
大川の杭へばつばつ残る雪
冬の陽の底入りこんだ島の屋根
星大きく動いて島を船出する
何の花の蕾か海の見える墓地
静寂の奥を見つめる梟の目

和歌山市 若 宮 武 雄

ええお方でんなアチャコはんに似てはつて
笑うたら相手がわらう また笑い
ほほは笑みはやはり鏡も好きらしい
因果応報とは言わぬ聴診器
容れものに欲がないから満ち足りる
汚れてる掌だが影絵は咎めない
背信の肩巾のない影を踏む
陽の目みぬ五重の塔の芯柱
国宝は工の汗を語らない
おおらかに雲は国境越えてゐる

山口県 国 弘 半休門

果てしなく続く大地にある起伏
岩壁の母再会をあきらめず
ヒロインの子無し他人の子をあやし
元総代鐘突堂の鐘で鳴る
雑草のつくし芽を出せ岡は春
括られた熊の帰心がいらしい
老妻は錆びた鎗の如く座す
下り坂一寸待てブレイキ確めん
経文は解らないけど有難い
百害を除くに愛の手が欲しい

鳥取市 加藤 貞山

春の砂丘曾孫風に夢をのせ
どか雪の解けて砂丘は蘇えり
商人になる志し卒業す
空晴れて砂丘は招く浜雲雀
出かけたぞ五月に幟立ててやる
しみつた匂い魚屋持ち歩き
孫連れて砂丘の暮れた灯に気づき
うたた寝の顔のぞかれた盆の月
一徹な人柄抜けぬ国訛り
太っ腹抱えて不況を切る構え

大阪市 神 谷 凡九郎

ヒコークで名刺をまいてみませんか
大いなる荷物で生命と申します
何故生きているのか不思議だとも思わずに
せめて美化して人間と思いたし
清き一票と言う紙はもらったが
自縄自縛そんな縄なら持つて見る
真相を玉葱のように剥いて見る
けれどもけれども地球ストしない
害虫にさえ生命与えた神の意志
いつか来る死 無縁でいられない

大阪市 菊 沢 小松園

凝脂玲瓏として湯をはじく
夜さくらに女ざかりを匂わせる
ある時の男 火中の栗を拾わされ
埋み火のまだ燃え上る風を待ち
五色豆足で覚えた京の地図
牡丹雪人工芝と知らず降り
親の手ではたちの裾が直される
とどめさす一本の矢は手離さず
豆切れた頃に賢しい鬼は出る
一条纏わぬ彼女にしてた夢の中

大阪市 中 川 滋 雀

十枚目のお札は別れの音で読み
朱を入れてみたい誤植を積み上げる
またもとの二人になって子を案じ
和と書けば角がとれてく墨にじむ
喜びを生活の死角に置き忘れ
人形になる ため息をしまい込み
淋しさをこえろと風は詩になる
迷いからさめた両手に欲がない
心音のリズム確かな今日がある
平凡な坂にも起伏の息づかい

青森県 工 藤 甲 吉

温めても温もらぬ手のむなしきよ
妻逝けば地球も落ちてゆく思い
人間のおしまい箸で拾われる
もう一度新たな涙骨埋める
亡妻を恋う郭公が啼くように
男やもめは敗軍の將に似て
亡き人が思い出されるねぶた笛
甘えたき人黒柿の中にいる
灰を掌のせて人間など思い
過去はむくろよ喜びも悲しみも

山口県 安平次 弘 道

二百カイリ魚の知ったことでなし
賃金カット即小遣いをカットされ
自衛論バラのトゲまで否定せず
花言葉彼に届かぬ片思い
頼もしく背丈も酒も手に越され
なつメロに父の青春かいま見る
罌掛けで女は徐々に脱いでゆき
女は画布男の彩を待っている
進歩する科学一億モルモット
恐竜も亡んだ人類おこるまい

島根県 大森 孝華

鯛やき君せめてブライド捨てないで
ネックレス胸の晴着へ通り雨
漫談へ心あずけて息を抜き
あけすけに言えば言ったで座が白け
新縁へバトン託して散るさくら
霜枯れて萌えた日もあり葉鶏頭
寒を編み指にまつわる愛の糸
すつきりと素顔の見たい日を約し
人生の余白へ詩がノックする
退院の今日へ縁起の詩ひろい

奈良県 森 田 カズエ

七草の五つ目まではさらり言い
柏手は娘夫婦と孫のこと
鉢植で熟れるトマトの朱があわれ
お隣りもローンの芝生萌えている
接統詞豊富に女よく喋べり
時々のはごろびも縫うホッチキス
血圧のくすり仲よく老夫婦
掃木目に音符のように行つ尼僧
宝くじ誰れかに当るから並び
空席を手話の子供に教えられ

長崎県 原田 明春

妻という意地も仕込んで嫁がせる
親父の座棄ててもみたい春陽気
給料日妻の笑顔へ誤魔化せず
入試発へソクリの出番が来
旅の空内緒がばれた花名刺
ここだけの内緒がつぎつぎばれてゆき
原船の刺激へ赤い旗がゆれ
花輪の名太く出馬への野心
栄転も左還も発令同じ紙
どの花を挙げよか候補者の胸のバラ

大阪府 西岡 洛醉

濁りなき少年の目に明日を問う
腹立たし天を迎げば流れ雲
とまり木の椅子に女の過去と逢い
親切の笑顔に見つけた価値ひとつ
妻の平の幸せだから逃がすまい
表の留守ばかり蛇口のひとつ言
平凡な竜です登りなぞ知らず
走ってもちゃんと歩幅に妻が居る
天職と決めた実直平のまま
無遺無産空蟬の如母の逝く

大阪府 河井 庸佑

機械ならとつくにつぶれる程使い
うちの子を探す間もなく遊戯すむ
一石を投じて反応見るとする
大学の講義にはしい処生術
昇進へ何かが動いたという噂
夢を子に託したママのしごきよう
遊び方知らぬこどものふしあわせ
正月は三月にすると入試の子
二兎を追うその教訓が身にしてみる
宿題に親の威厳が崩れかけ

岡山県 水粉 千翁

裏返すまじてのひらをじつと見る
はげしきを哭く湖の深さかな
蟻が引くとき大きな謎がない
散るもよし一期一会の秋の彩
雲白く湧く恩讐の坂を越え
友情に色あり白をぬりつぶす
片隅の広さをさだめとは言わず
泣いている笑うてもいるおもしろさ
さかすきを重ねて素顔取戻し
花道が切れて私の足音だ

大阪府 宮川 珠 笑

乾杯はビールを量比べてる
児が呼べば母はいつでも覚めている
ようお疲れさん自動販売機
種を蒔く素足に春の土ぬくし
レストランちよっと茶漬がない不満
父を焼く点火ボタンを押せという
すうどんの注文通す声荒し
鈴派手に鳴らし賽銭そっと入れ
秋思する蛙蹴散らす草刈機
逆さまに植えられくわいの芽があわて

兵庫県 島 居 百 酒

その果ては崩れる積木に虹をかけ
自我に酔う足が歩道を踏みはずし
騒がれて名がでて素顔消えていき
本格派だから正座がくずせない
考える如くに茶柱傾けり
母の手になって女でなない温くみ
分身となって髪に血が通い
米の値も知らずに暮しの愚痴を言い
目覚しをかけた明日へ眠られず
憧れがとどかぬ虹で美しい

大阪府 西尾 葉

見せてから包丁入れる明石鯛
駅を出る五百羅漢は定期持つ
霧の道車歌は腹がへっている
野火はるか太古の色でもえてよし
笑い茸狂い茸とは粋な茸
青麦に雲雀が生まれ雲生まれ
桜吹雪一人歩るけば主義もなし
銀杏散るこの頃わたし自閉症
補聴器でホトトギス聞く趣味の会
酒場の昼保証人のいる話

大阪府 高 杉 鬼 遊

日の丸の好きな男の浪花節
人形の好きな女の子守唄
十人の中の一人で紅茶にする
竹人形抱けば聴こえる雪の音
とても丈夫な悪人の浮き袋
君の恩義足は寒い町を往く
妻と社長にあやまりながら生きている
西成の銭はいのちの音がする
水死体時計は防水自動捲き
欺されぬ夢は板の中に見る

岡山県 小野 克 枝

角砂糖一つと二つ夫婦です
薄倖の妻が人形可愛がる
ああ平和泥舟漕いだ思い出よ
愛は男を水色の振子にする
コーヒを上手に飲んでただの人
仕合せな夫婦に見せる指定席
感動が欲しく一気に切るレモン
妻子は味方だと思っている
海の冬孕む魚が寒かろう
右き良き時代を知り過ぎている

香川県 三 井 醉 夢

童心にかえるお酒がありますか
包丁を研ぐと怒りは馬鹿馬鹿し
失せものは出ず春愁に続くかな
神さまにふりがな付きの誓詞読む
教科書のオシメシベの美しさ
臨終に鼻のシラノを呼ぶだろう
怨念は十七年で打ち切ろう
ポックリと死ねるものかと仏さま
なつかしい声保証人たのまれる
青春は水のモラルをあざ笑う

京都市 山本 規不風

絵に添えて浄土ヶ浜の詩を妻へ
むさばりし朝の寝刻の悔消えず
敵意の目笑顔で返えし握手する
発信の夫へ憎悪と思慕の日々
過去消して夢の灯燃やし一人居る
よう当る馬券と妻は信じてる
安楽死活字に赤線引いて見る
焼け落ちし家に残りし犬を抱く
さまざま私語焼跡に佇つ耳に
生きていてよかったと妻バリーで言う

京都市 松川 杜的

絵ハガキに雨の日がない青い空
新春はよし街を歩けば琴の音
欲しいもの何でも買える不仕合せ
磨崖仏の歴史へ蟹が匍うている
句集半読のままでよし書架楽し
医療費ヘカルテの裏は喋べらない
8ミリヘ成程父の猫背なる
妻の眼の半径に生きてつつがなし
蕉翁の碑に来て蟬の誇らしげ
OKと真顔で答える祖母がいて

広島県 時広 一路

足の向き変れば向い風となる
お互いに檻の中から手を伸ばし
気に入らぬなり善人だと言われ
三面鏡いつまで騙し通せるか
煮つめたら煩惱泡をふきはじめ
泥の舟いとスマートに作られる
明日の日がわからないのが救いかも
風船のもう満足をしてすばみ
神様の同情心をくすぐらす
台本を外れて言葉見失ない

兵庫県 保西 岳詩

うつぶんへお国訛のひとり言
悪酔の記憶自己嫌悪に落ちる
理性殺して世渡りを口にする
成る程と思うことあり右派と左派
建前と本音が違う決議案
潔白を口にするから信じない
鈴を振る両手は神を信じてる
生き抜いて行く道だからマイペース
偽りの心が赤い灯にうかれ
良心の重みへ嘘が口に出ず

大阪市 黒田 真砂

逃げるから追わねばならぬ愛である
明日へかける女引金離さない
ブレーキをかけて直られて出る朝の靴
角砂糖溶けて素直な刻を持ち
しきたりと義理で重たい下駄をはく
裸受ける女に欲しい別の顔
七曲りして人生の虹見つけ
今日の嘘日記に恥じてもう書かず
別の目で夫を見つめて居る私
鎖引きずつて女に旅の果しなく

島根県 原 独仙

都山流父の六段聞き飽きた
叱る子のわが幼少に似て佗びし
老妻がはにかむ旅の夫婦風呂
梯子酒の癖へ佗しつて從えり
老醜のされど心の美は失せず
杖ついてまだ妾宅へ用がある
茶のみ友貴えに含み笑いる
ネオン点滅恋と涙の吹き溜り
二階借り大家の婿へ移植され
人並の輪郭にいて平で老け

岡山県 川端 柳子

結ばれた枝のみくじも春を待つ
掌ですくう水にもあったみどり色
沈黙の余情人形の髪を撫で
持つべきは子供とおもうそうおもい
子にのこす足跡だから心こめ
アトリエで魔性になった花の貌
悲しみは抱かずお月さまにあげ
魚さえ生きる意欲の目が購われ
鈍行で来た幸せだ逃がすまい
小さな善意尾ヒレも美しく戻る

大阪府 吉岡 美房

受付けをびつくりさせた自首が来る
殺人が小さくなっているニュース
鬼刑事思いもよらぬ趣味を持ち
転勤へ噂の方が先に着き
片すみの記事で善意が光ってる
外出の団地噂に見送られ
検札はいんぎん無札に疑われ
幸福の為とは別れる日の科白
御近所へ一緒に配る釣自慢
未知数という大物に期待する

岡山県 時末 一灯

大声をあげて負け犬らしくなり
他人黙しいよいよ遠吠えじみてる
日がながくなり人間の恥部曝す
一呼吸おいた言葉をいとおしみ
妨害の笛の音律狂つてる
日溜りへ寄れば肝斑浮いてくる
傷口をばつかり開けてマダム酔い
浮雲がライバルに似て眩しすぎ
策なくてその夜月まで瘦せ細り
殿を歩き利口な道を知り

島根県 尼 緑之助

テレビの年賀で元日暮れる
古きよききずなは小さく地に這えり
繰り返す歴史列島吹きぬける
友情は即人間右でも左でも
突つ走るニュースも公害と思う夜
新緑の雨情に宵の酒ひとり
ハネムーン雲の流れは見ぬカメラ
山菜を賞めて古刹の般若湯
秋だ 女子高生の寄る食堂
落葉焚くけむり出雲は曇り空

鳥取県 小西 雄々

雪は降る童話にはない被害あり
歌唱力はあるが楽譜まで読めず
景気よくマッチくれたに倒産し
残り酒あつめ輪になる反主流
全快へ垢もなかなか落ちぬ風呂
和解する男同士に酒がいり
大雪はやまず地酒の酔つづく
趣味欄の音楽じつは歌謡曲
あり余る遺産へ死闘まだつづき
窮屈な話を聞いた高い塀

石川県 細呂木 魯木

泣き笑い男の味方に酒があり
猛吹雪顔をゆがめず地蔵尊
すんなりと合格出来た解脱感
ふるさがあるから出世したい見栄
勤めぶり玉虫色で栄転し
大空へ放されとまどう籠の鳥
彼を又古巣へ戻したうしろ指
瞑想のひとつとき喜怒哀楽が交錯し
停年のむなしさ写経する心
赤ん坊と見れば可愛気な老いの母

鳥取県 大塚 豊生

名月を挟んで男対男
踏めば鳴る砂丘わたしも踏んでみる
老夫婦ミレーのように土に生き
墓参りいつか私も来るところ
うす味へ妻の氣遣う老いを知り
ハネムーンころ新たに酌み直す
枝先でぶらり養虫何思ふ
孝行の尽くせぬままに忌中札
裸一貫男の道があるばかり
ものすべて初日の中に生まれ来る

宮城県 川村 映輝

二〇〇カイリ北の港は波さわぐ
善人の怒り血圧すぐ上る
痛むのに医者は何でもないという
こつなどはないが長生きしてしま
酔った時酔わぬ時の話喰いちがい
生活保護当然のこととして悪びれず
田植唄テンポの合わぬ機械植え
大穴をねらいつつけて貧に居る
日照権さえお金に押しきられ
ムードなど関係のないコップ酒

大阪府 大坂 形永

朝の戸を開けると犬が待っている
広告が当てる取材と知らず会い
新聞の休み腹立つ活字見す
意外ではないユーモア作家の胃潰瘍
土方した韓国詩人の文学碑
キヤデイから見えた大臣の腕のほど
正月に飾る優勝杯磨く
共産党ファンの社長と酒を酌み
潰れる先ばかり巡ってきた履歴
老眼鏡忘れ車を引返す

大阪府 城 一舟

土性骨をつくつてくれたよそのめし
気休めを言わずに母は共に泣き
残された誇りをけなしかみつかれ
当選の抱負奥さん泣いただけ
底辺に住めども妻と言う味方
死線越え夫婦体裁も言わず
技術屋の腰にぶらぶら守り札
戦死の字ばつばつ苔に消されゆき
寝転べば総理も同じ邪魔な人
黒猫がまだパトロンと認めてず

島根県 藤井 明朗

一日の時計を追うて満み足りる
四季の色詩にもならず花の店
波に角とられ余生を丸く生き
愛はゲームよ青春の海のこす
愛情の過保護つまずく子に育ち
枯枝の生けるが如く花ばさみ
雑踏を抜ける財布に聞いて見る
新築へ六十からの人生譜
久しぶり会うてふところのぞかれる
床柱背に金婚は小さく座し

大阪府 高橋 操子

春の帯後姿のままでよし
草木染小紋のよさも四十越し
結城着て男さかりの肚が出来
商売と別に仕入れた好きな柄
見て楽し舞妓のような京の菓子
札幌の雪心地よく降る画面
倅せは顔まで育てた親に似る
苦勞した手だなどと思う猫目石
歩くところないので旅をすすめられ
ちっぱけな善意でもよし心満つ

大阪府 植山武助

鉛一つ他人の垣を解く夜汽車
幸せの基準を達者に置いて生き
無口な自分に自分も退屈し
流行がない民謡にある強味
なぐさめの大阪弁に味があり
試験済む子へ伊豆の百恵が待つてくれ
同窓会今年も級長さんは来ず
善良な市民になれと納税書
着る人が美人に思えて来る縫い子
花嫁の父の泪は許される

大阪市 金井文秋

幸終はまだ来ず手相じつと見る
耐える事に馴れて人間小さくなる
毒舌が友を失なう程も効き
ずるいと言う眼であんたかしこいよ
一筋の道を凡人外れたがる
マンネリの証拠に過去を掘り返し
造花ではないんですなと触れて見る
高血圧に効くと言うのが多すぎる
金はさびしがり集まるとこへ寄る
こつちの水は甘いから孫が来る

大阪府 宮尾 あいき

満月がひと休みする松の枝
室生寺の石段こわや落椿
落椿よけて古城の登り坂
老いて尚桜悲しや花盛り
咲いて良し散って又よし寺の門
忘れられた玩具芝生で花になる
墓地抜ける風に亡夫の声を聞く
一人寝の枕を濡らす春の雨
物干の落日私だけのもの
残り火のたかぶりも無し雪の宿

大阪市 河野君子

円心において太陽に背く日も
揺れ動く女心は火と水と
蹴上げねば弾まぬ毬を抱いている
単細胞なりの悪女になる時も
人に逢う緊張感でうなじ刺る
昂ぶりを沈める帯を低くして
夏の終りのカンナに情けなどかけぬ
マイペースやっぱり南へ向きたがる
当てにならぬ胸の炎を抱いている
温室で豊かにしばみたいのだが

大阪市 小出智子

ところ天 大きなよろこびなどいらぬ
噂話の中で裸にされている
風呂に水 満たすようにはいかないぞ
本棚の本 死ぬ日のこととは考えぬ
脱皮して蝶になるとは限らない
道を聞くだけに人も人を選び好み
さくらんぼ女は齡を忘れたし
常識をはなれられずにかばちゃ煮る
夫唱婦随で日曜のにぎりめし
女の園で自画像を塗りつぶす

島根県 小林 孤呂二

黄金色の秋を信じて離農せず
部長より一分は小さい判にする
心の座標XにもYにも傾けず
小さくともポーンナスという金脈を持ち
出勤簿きれいに捺して恵まれず
この道が好き家並は開府からまま
公務員ですと仲人は張りをつけ
塾っ子の瞳に青空が写らない
旗色鮮明にすれば守りの盾がいる
楽焼の色で秋の陽落ちてゆく

大阪府 市場 没食子

供出の鐘が還った昔の音
苦笑して夕の夢を反芻し
架け橋の役をすまして酒にする
妻もまた老人手帳が来る寂し
腹にもないお世辞酔うたら上手に出
速達がつかず誤配の泣き寝入り
生命とりとなる酒ならん今日も酌む
雑魚は雑魚なりの言い分申上げ
未だ十年生きる企画を妻と編む
去るものは疎し名前もど忘れし

兵庫縣 大江 秋月

無人化の駅も桜は春支度
妻無聊たんのすの位置を一寸変え
親切にしてやりたいが未亡人
悪友という知り合いもあつてよし
叱られるコツも覚えて老社員
三次会に行つたところから記憶切れ
犬にまで声をかけたい選挙戦
通訳も連れて外孫やつて来た
外人の目に振り袖の美しい
飲む金と喫う金とつかからはじく

愛媛縣 谷 のぶお

人の後歩いて来たら辿りつき
じゃんけんという決め方もあり楽し
つましく咲くつゆ夏の朝の幸
雷のおさまるまでを待つばかり
そうむきになるなと腹の虫も老い
かまきりを掌にのせて見る俺に似る
切れ風の自由の夢はあつてなし
起重機も眠たくなつた春霞
負け馬にも勝ち馬にも緑の風が吹く
古時計時間守るに事足りる

大阪府 村上 春巳

親子鹿花の出入を掻き分けて
破れ鐘の響も春の西之京
雨宿り鹿も付き合いてくれる
天平の薨 晩夏の陽のかげり
秋風を尼僧の胸で受けとめる
まだ角がついてるように鹿想い
大仏殿朝霜を踏む僧と鹿
山焼のまだ燃え残る火がひとつ
歩行者の顔で信号を鹿渡り
十二神将に椅子を貸してやろうかな

岡山縣 竹内 翁童

いつわりの愛か紫煙ゆれている
思案にくれるブランコにゆれてみる
言語障害か平和の歌うたえない
赤字だらうな親切なバスに乗り
残照の命あつめる彼岸花
個性的でんたと軽くあしらわれ
手付金これが苦労のはじめです
あじさいの模索無色がほしいのか
北風に負けまいちよびり赤を着る
職人の誇り小さな銘に生き

大阪府 塩満 敏

妻の指せめて真珠がかざりたい
北山杉ラインダンスをしてござる
こつちの餌は甘いぞ鮎を釣り
揚雲雀制空権を主張する
昭和の関を雌鳥が告げる
終点へ一人の旅が降りてくる
民族移動大阪駅は夏の陣
台風よ父母の住む地をさけて吹け
氣にくわぬ客もあらうに自動ドア
七人の敵を求めて朝の駅

島根県 中川晃男

入道雲山の男と握手する
ヨットの青春三角に海を切り取つて
スタンドに飛び込むファウルとホームラン
ふり向いた心にグサと冬の月
終列車通して小駅目を閉じる
山紫水明にしてふるさとに人住まず
儲けにはならない趣味に支えられ
亡父母の齢より生きて墓洗う
軽い小さい初孫を抱くそつとソツト
余生ではない本当に生きるとき

大阪府 藤井一二三

意地捨てた涙は肚の中へ落ち
預金おろす窓にわたしだけが佇ち
廻り止む自由を独楽でさえも持ち
下戸の目に泡が勿体なくも溶け
ほとぼりが口笛となる星月夜
世間さまに済まぬと遺書が子をかばい
石ころの肌に見つけた陽の温み
手を振った指に本音が書いてある
本命の穴のと負けてばかりいる
またひとつ見舞うて胸がいたむ嘘

大阪府 西 いわお

行列を崩さず羊架は列ぶもの
恥部かくす無花果の葉となりてより
足元を見よとは下り坂のこと
一ミリに足りぬ虫さえ歩を刻む
遠くより塔は祈りの如く見え
芋虫の頃もあったと蝶おもう
切られても蚯蚓は土を離れない
老醜をさわめつくして美にかえる
アカシヤの甘い香りは詩を呼ぶ
除夜の鐘今年の嘘を封じ込む

岡山県 白岩文衛

夢捨てた窓せきれいが来て覗く
白梅の気品が闇を引きしめる
みの虫の安らぎ老梅広い胸
谷へ散るさくらと僕と夕焼けと
雨あじさいお前が今日の句読点
忘れてクコは平和な陽に倦きる
風蝶草一と夏のドガの踊り子
菜に住めば菜の色となり虫生きる
きつつきよお前はお山の鍵っ子か
誇るもの持たず夫婦で花つくる

京都府 都倉求芽

楷行草 仮名も混じえて世を渡り
音もなく流れる川に似て夫婦
酔い醒めた時には出口のない酒場
新緑をあつめて塔が空へ抜け
黒焦げの屍か ひまわりの成れの果て
ライト浴びて噴水が背のびする
さば雲のひとつひとつに秋の白
街灯の処だけ雨のひとつ言
満員の中でくしゃみが止まらない
駅前のおどん屋乗る汽車聞いてくれ

和歌山市 垂井千寿子

夢抱いて世間を広く住んでいる
道問えば嵯峨野やさしい京なまり
夕焼けの色に明日を賭けてみる
後遺症の足を庇うて手の愛し
初孫を抱けば伝わる血の温み
笑っても泣いても女ポーズする
五体満足そんな自由を忘れてる
亡夫の分まで親馬鹿になっていた
娘妻 寡婦 静かに止まる走馬灯
女三人ふっと話題の無いこわさ

島根県 恒松町 紅

戦争の苦勞を知らぬ軍歌きく
田植機を押して農夫に唄がない
電話口小さな嘘を妻がする
子守唄音痴それでも孫寝つき
過ぎ去れば竹槍火叩き皆狂氣
倅せを包む合鍵見当らず
反論へ課長の齡が軽く受け
その下は裸 女の大胆さ
天寿だと弔問客も氣がゆるみ
今どきの若さへ課長誤魔かせず

大阪府 玉置重人

メガホンを持つ父はいつも悲しい
善人の顔一つより無い強み
午後十時まだ帰らないクルマの子
さざ波に黙殺された石の悔い
喪服新調して心軽くなる
ひとり住む女ひとりの香が哀し
一城の主に戻る炬ばた焼
何をする人ぞラッシュの波の中
大あくび一つラッシュの中に消え
もまれ抜くラッシュに主義も主張もない

鳥取県 小林由多香

試験にも耐えん師の遺志継ぐ決意
適材適所と左還いたわられ
忠告をいま悔いている行詰まり
結論はだまって聞いている父が出し
停電へ隣もなにやら慌ててる
赤とんぼ見つけた話題が膳にのり
生きている砂丘四季の色を持ち
球根を取るだけの花で育てられ
十五夜の月の丸みにはげまれ
銀婚の旅行プラン春めきぬ

大阪府 高鷲亜鈍

入口のトイレに近く席をとる
お絞りで頭から外す黒眼鏡
抵抗へ秘かに冠るベレー帽
食堂で手を合わせるの歳か
声だけが白い姿で眼に入る
裸の声に季節を着せている女
痰唾の防衛効かぬ歯がまばら
勃起したまま寒の水浴びる
友人や知己に折りの輪をひろげ
感謝して詫びと願いを織り交せる

大阪府 宮西弥生

もつれ糸女が解けば美しい
色のない風で女をだませない
母のシワ千の乱れに耐えたあと
幸福の駅から順番くずれ出す
札束で買えない自由の地図描く
糸切れてから風 自由です
恋人という間の世界を信じよう
失意したときから海の虜です
モナリザの過去が知れた日の微笑
横道にそれたら心のはずむ彩

岡山県 横山一声

そつと手を握れば愛の脈があり
星空が親のない子に夢をくれ
金借りに来たのにサービス行届き
冗談がひと口過ぎて根に持たれ
金儲け下手でも使わぬのが取柄
急いでも休んでも妻はついて来る
親に似た子の成績が物足らず
愛嬌のよい娘に集金ことわられ
今だから話せる自分の踏んだ道
海外に旅して日本のよさを知り

愛媛県 月原宵明

シグナルの赤に方針ふと変り
青春の捨場ブレーキ軋ませて
水飲んだだけで野良犬石が飛ぶ
七人の敵へ光らぬ靴磨く
なんとなく冴えた日遂に失言す
電柱で落選いつまでも微笑
枯草へまだ保護色という演技
花街のさびれ撥蝸自嘲する
録音テープみたいに行つていらつしやい
凡人の足跡波がすぐに消す

大阪府 久米奈良子

手を合わすそのすき間なるもの思い
ブライドも理性もある日邪魔になり
ためらえば愛の真偽を疑われ
火を恋えば水の清さを教えられ
見ぬかれる心かばうか春の雪
帯うまく結べぬ日上恋のあせり
ヒロインになつたつもり恋が逃げ
雲走る恋の逃げゆくさまに似て
抜きえもん孤独のかげを匂わせる
ひとり旅細道なれど夢があり

大阪府 太田良子

雑踏で患者につかまる不運な日
休診に二日酔とは書いてなし
聴診器悩やみの程は計られず
ベレー帽で医者と見えぬをうれしがり
拗ねてみて脈のあるのを確かめる
咲きそうで咲かぬ活字の窓にもめ
かけがえの無い娘に生れ嫁さおくれ
酔うてゐるのにまだついて行く腰をあけ
へそくりを持って心齋橋に出た
すねて見たけどはったらかしにされ

大阪府 高橋夕花

一粒の葡萄に染まるころです
自画像にすこしきれいな嘘を塗る
紫陽花のその日その日の出来ころ
バラ程の棘ではないが私に
水廻に憂いをためる日もありぬ
炎より水のもだえにころろ揺れ
ころがった毬のゆくえに亡母がいた
わたしを打つ小さな石を撰っている
片っぱの目を閉じておく善もある
満月の地蔵の胸に眠りたし

兵庫県 中村ゆきを

神様にふれ合う鈴を子に引かせ
智恵寺と聞いて子供とひき返し
働いた手には手相などいらす
耳よりな話へ抱もちなおし
法学部出て総会屋に教えられ
人の眼に指をつつ込む記事で売り
七人の敵あり君子になりきれず
なにもかも話してみたい人に逢い
金に縁なかった父の骨白し
父の死後父の無口が判りかけ

兵庫県 遠山可住

蜘蛛の糸恋にたわむるのもかかり
集団の虚勢わたくしが居ない
包帯を尋ねてくれぬのも淋し
飲んでゐる時のファイトが欲しい部下
女の子が泣いて卒業式らしく
管理職手当で忠誠誓わされ
人間のほかは素直な太陽の子
おや生きているやないかと水をやり
沛然と雨 人間を一人にす
札束を固い握手と錯覚し

島根県 久家 代仕男

釣り上げた方へじわじわ竿がより
着飾らぬ成人式もあつてよし
礎の松 秋は墨絵のように暮れ
聴衆の拍手が票につながらず
十二月ころの襖はり直す
貧富の差やっぱり下駄の片ちぎり
エリートの触角らちむこと忘れ
宿命かおんは無駄なものを着る
身の保全夢のあがきの中にさえ
筋論で押せば人間味が薄れ

鳥取県 奥 谷 弘 朗

青春を国防色で染めた過去
仕事しに生れたただけは淋しいぞ
特大のヒップ自信に満ちている
還暦を女房と祝う茶碗蒸
自信句が今日もチラシの裏で出来
退職へ妻と二人で京の旅
明日からは農林技官でないお酒
後を継ぐ子は満洲に埋めたまま
欲のない男気軽によくしゃべる
大望の彼岸私の句碑が建ち

大阪府 福 浦 勝 晴

旅に出て独り風との対話
キャンパスに失意の絵の具塗りたくり
企みをいっぱい溜めて注ぐコップ
陸橋の下を交錯する世代
老けたなあと妻を排れば妻もまた
殺される牛も器量で値が違い
コヒーに妥協の砂糖溶けきれず
過激派集団の真つ赤なコンサート
ため息の出るほど空が澄みわたり
妻よ許せ紅いネオンが炎えるから

兵庫県 小 浜 牧 人

美しく産みだし壁に聖母像
春は花屋で悴せを売っている
串カツで酔う人生に嘘はなし
五月の風だ銭のなはし止めとこう
一幕ほどの恋だったのが忘れず
臆病な父で悪人にはなれぬ
生きてゆく蟻に日向も陰もなし
スポーツは万能 抱持ちとなり
札束へ人の心の脆きかな
揚つても揚つても雲雀に空がある

鳥取県 増 田 竹 馬

すんなりと踊って笛に気付かせず
虎の威を無欲の桶で受けとめる
手料理の決め手心と言うわさび
重った蠅へためらうハエ叩き
万雷のアンコール綴帳ちゆうちよする
カルキにも慣れて我が家の金魚老ゆ
風紋は恋のはげしき喋べらない
産声は家門を確かと背負う声
其の功を語らず乳房うなだれる
五十年あきず添うたを子が褒める

大阪市 藤 田 頂 留 子

仲たがえひまわり一本そつぱむく
人間の浅智恵風雨に土下座する
大師との対話で今日をしめくくる
串かつも女上位の飲みっぷり
しあわせの物差し黄金色とはかきらない
食欲を悪役にして又太る
自動ドア後を閉めぬ娘に育て
アドバルーン風のいうなり西東
立ち話つるべ落しにちとあわて
インフレへ討入りたい浪人衆ふえる

和歌山県 吉野 富子

栄転の机は知ってる黒い銭
手形切る悪循環のように切る
些細事へくよくよ暇がありすぎて
肩書に弱い男の妥協癖
初釜へ伝統誇っている懐紙
金に縁無い人生と知る悟り
値上りをばやいてゆとりのある暮し
まな板へ若さあふれる娘のリズム
意地捨てて女に還る老の坂
劣等感ライバル意識のような語気

大阪府 板尾 岳人

峰歩く男はピアノ弾き乍ら
登りたくなれば破れた傘さして
寝ころべば山の峰から見える死者
山男カウスボタンを捜さない
五日制喧嘩の仕方教えます
火葬場の鍵を下さいにわか雨
どしゃ降りへ傘を忘れて恋をする
中二階トンボ眼鏡が置いてある
重なつて枯葉は峰を温める
ふり向いた首 振り向いたまま落ちる

大阪市 吉田 圭井堂

応援の弁士 候補の名を忘れ
少々は飲めと云う医者うまが合い
師の影を踏まぬどころか叩き出し
読めぬ軸掛けて新築客を待ち
千金の銘竿今日も空の魚籠
千袋で葉同士がもめている
仲人が大物過ぎてはかどらず
ほどほどに妬いてさえ居りゃ小火で済み
四海波静かに今日も冷凍魚
震度七も越えて金婚今日迎え

大阪市 西川 誓二

不孝を詫び詫び下品下生の身を送る
み仏が手をひき給う老いの坂
春宵の一刻老いねばならぬ我思う
人生の長旅へ夫婦の歩が揃い
足るを知ってから暮らしも肩凝らず
持つて死ぬと人並の口叩く
孫から回らぬ舌で糸電話
おとなの世界に青い鳥愛想つき
販売機の酒はお酌をしてくれず
水は低きに流れ昂ぶらず

大阪府 谷垣 史好

天地悠久 月と駱駝と旅人と
標的を狙うあいつを狙う気で
炎天や糟子少なき男たち
人恋しラムネの玉を鳴らすなり
祝電の来る日金木犀匂う
青春が欲しくて麦藁帽を買う
向い風 捨てた女の仕返し
町工場の硝子こわれたまま二月
生年月日だけは素直に信じよう
曳き船がゆっくり帰る午後の愛

岡山県 浜野 奇童

ガイドよりくわしい奴がひとりおり
あの辺に見えるはずです雨の旅
風邪で寝て昼のドラマに見る世相
横道へそれそう故郷へ便り書く
サヨナラのテープ車窓へしがみつき
先生に内緒がしたい通せんぼ
愛犬へ鍵っ子ママの口をきく
標語べたべた皆聖人にするつもり
勿体なし月をひとりのものとして
鉄筋を支える砂利として沈み

大阪市 浜畑胡蝶

音痴とうとう庭の犬さえ吠えよった
朝市を抜けたら冬の海が見え
忽然と帰らぬ旅の聴診器 (春果先生)
右もなく左騒がず無事に暮 (英女王来日)
貧すれば鈍するあごをなせたがり
入歯もぐもぐ酢蛸がひっかかり
世の流れ知らず本家の鬼瓦
気まぐれな景氣に馴れてあわてない
縄といて蛇口の水もぬるむ春
夏草と云う運命にある青さ

大阪府 藤岡花梢

星と語る星の言葉が亡母となる
ひとり居てひとりの音に驚きぬ
枝ぶりへ迷う心の花鉄
真実一路私にかげのない暮らし
顔むけの出来ぬ嘘をおいてくる
施設見学やがては母となる重み
爪がたを入れられカボチャ売れ残り
手応えはとどかぬ距離で反旗振る
石ころを蹴ると童話の声がする
標準語身につき故郷に遠くいる

鳥取県 渡辺独歩

宿の下駄鳴らして旅に若返る
農政が土への根性しほませる
世渡りを倒産したのが教えてる
朝の靴役目の顔をとり戻し
ゆく年の瀬音が聞こゆ大晦日
獅子鼻の横でホクロがかしこまる
人柄に難点金が先き走り
ビヤガーデン ジョッキの中に落ちた星
議論だけ前進ポイント凍りつき
人生に螺旋階段 踊り場はない

大阪市 西田柳宏子

銘柄がどうのこうのと端株持ち
新しい辞書知った字を引いてみる
腹案も言わずへまだけ叱りつけ
十字架を心に負うた不遇の日
親譲りしたくないとこ許り似る
学生の味を末っ子だけが知り
立志伝裸一貫からにする
手も出ない高級住宅ばかり建ち
縁の無さそうなの許り当選し
口癖と知らず合槌打って居り

川柳塔社同人句集

一冊 1,500円— 送料 200円

清水白柳遺句集

一冊 800円 (送料共)

垂井葵水遺句集

一冊 1,000円 (送料共)

川柳塔社同人バッジ

一個 1,100円— (送料共)

大阪府 戸田古方

点滴デキテ点滴デキテとおちるもの
いのちの点滴退屈しはじめる
願いごとそのまま漫画にかいてみる
螢光灯ヒリヒリヒリヒリ私かも
我を折つて蜜あるとこへ来てしまひ
むしばまれても誰かが生かされている
胡麻化した僕が僕だけ胡麻化せず
ああ正体また遠のいて近づいて
真実を忘れたときのいい気持
鼻つんが無邪気に笑うておりました

大阪府 小谷葉子

捨てられた手毬 女を匂わせる
秋に咲く桜をふいと憎くなる
秘めごとがあり美しき姉妹
静かな別離でいつも炎を抱いている
小出しする愛 円周をかけている
ああ平和草の匂いのする夫婦
償いの果ての細いシルエット
冬木立聖者の真似をしてみたく
疑惑の底で 女 仮説を組立てる
あなたの椅子をいつも右に空けておく

大阪市 不二田 一三夫

女ごころへ土足で上がって来た 男
チャメラはやくざを捨てた男とか
その咳阿飲まずにきればいい男
講談本包んで土工旅に出る
親指の貫録 こぶしの中にいる
射たれるにしても改造ピストルとは
眉目秀麗の悪党もありはあり
金銭に尾を振らぬのが手を焼かせ
ほめようがないのでニヒル顔だとき
男の美学 最後の弾はつめてある

川柳塔社常任理事会

(4月4日)

3月24日にも5月8日の大会準備のため
緊急会議を開いた。

栗・多久志・生々庵・形水・薫風・岳人
・一三夫諸氏が出席。

4月4日の理事会は栗、多久志両氏が欠
席された。

診察をすまされてから出席の生々庵主幹
がいつものように中心となり、大会、句集
などの話し合いはいよいよ熱が入ってくる
旅人普及版は予定より高くつくが、その

川柳塔社常任理事会

(3月4日)

赤字は本社負担ときまっているので、とに
かく一日も早く完成へスタッフは活動開始
出席―百酒・柳志・静馬・形水・生々庵
・肖二・鬼遊(栗氏代理) 岳人・小松園・
一三夫諸氏。

三寒四温といわれるうちの寒い日だった
朝は大阪市内を白一色にした四日、今夕の
集合は出足がわるいだろう、そんな予想を
うれしくくつがえし、和歌山、西宮、神戸
からのご出席で急に活気づいた三月の常任

理事会だった。

奥谷弘朗氏が句碑建立記念に本社へ金一
封寄贈されたのを太茂津氏が預かっておら
れ、それをわざわざ和歌山から届けるため
に出席された。

普及版「旅人」は主幹や栗氏の撰定され
た表紙の色もきまり、いよいよ5月8日へ
飛びこんでいく。

栗大会委員長腹案の諸氏役割割りもあり、
大会への準備は万事OK。

出席―静馬・水客・太茂津・栗・形水・
生々庵・牧人・肖二・薫風・岳人(写真)
一三夫諸氏。

「る」止めの句

直原七面山

昭和三年発行句集「私達」の集句は四四三三句で、その中に「る止めの句」は三二五句あって七・三%を占め、四九年の同人句集「川柳塔」では四六二六句の中に五一七句あって一・一%。また川柳塔の五一年一〇月号を見ますと、本社句会の欄で驚くなかれ二四・六%、川柳塔欄では一四・七%、水煙抄一四・三%、愛染帖一五%、各地柳壇で一七・二%というように「る止めの句」が月日の経過と共に大氾濫を来たして来ております。さて、柳人の中には「作品が昔に比べて非常に向上し文学作品らしくなってきた」と言っている人もあるようでありますが、本当にそうなのでしょうか。句を読み、句を鑑賞して下さる方々の口から、私達はしばしば「この頃の川柳には判らない、理解出来ない句が段々多くなって来て、昔に比べて句に面白味というものが無くなってしまった。また昔は川柳を誠に身近なものに感じていたのが、この頃ではもう遠い手の届かないもののように

思われてなりません。このままではもう従いては行けませんよ。また読んで見る気にもありません」と聞かされています。

そこでよく考えてみますと、これは作家達が句を作る時、句の下五を連用形にしないで終止形（特にる止め）の言葉で飾り、句に余韻も持たせないで（句主の思考を断定的に表示して）句を読む人々に（句に共感を覚えて自分も句主と同じようにその句に没入し、句を味い、句を楽しむ、句と共に遊ぶ）その句に対してその人なりの思考の機会も、そしてその余地さえも全然与えていないところに、その大きな原因があるのではないでしょうか。

相手から句を楽しむ手段を完全に奪ってしまつておいて（句をる止めにすることによつて）、いくら句主達が「この句は立派だろう、この句は面白いだろう」とうそぶき、喚めき、強要してみても、これではもう及ばぬ鯉の滝のぼりで、増々相手を川柳から遠い所へ押しやってしまふことになってしまいます。極論すれば、川柳作品の中に「る止めの句」が増えれば増えるだけ、それに正比例して川柳は墮落の一途をたどって行くに違ひありません。従つて私はこの際、あえて「る止めの句の廃止論」を声高らかに唱え、作家各位のご一考を煩じたいと思うのです。

ある笑い

黒川紫香

先日ある川柳会に出席すると、予定の選者が来なかったので代選を頼まれた。選句が出来て披露台に上ると、一角から「ああ選者が小さいうなった」と声がかかった。予定の選者は電柱のような人だったから……。すかさず「ちょうど半分になりまして……」

とやると、どつと笑いが戻つて来た。題が「半分」だったので。

これは大分に前の話、京路北八瀬で友人とバスに乗ろうとして「このバスどこ行や」と聞く

と聞く

「途中です」と言う。「いいや途中でなしに終点を聞いてるんや」

「だから途中ですと言つてゐるんです」ふと行先表示を見ると「途中行」と書いてある。途中という部落があるらしい。

ちっけな笑い片隅にあつてよし

「人間陶冶の詩」の意義

戸田古方



「たとえば路郎のことばの（人間陶冶の詩）にしたって誤解されてるよね。あれは川柳というものを締め木にして悪汁をしぼり出したら、あとに爽やかなものが残るのやということなんです、それが道徳川柳、修養川柳みたいに浅く受けとられている傾向やね。」

川柳展望8に掲載の、《人間をもとめて》
「清雅の人橘高薫風」で、薫風君がきき手の天根夢草氏に自らのことばで答えている一節である。

薫風君自身も「路郎を知らぬ同人が八割ですから」といっている如く、《人間陶冶の詩》を知らぬ同人もそれに準ずると見なければならぬ。

路郎先生の親しく教えをうけたものとして何としても、先生の遺訓《人間陶冶の詩》を誤解なく後世に伝えたいと思う。去るものは日にうとしというが、十三回忌が終ったからといって忘れ去っていいものではない。勿

論、時流というものがあるから、その解釈もいつまでも固定していなければならないことはない。だが、大すじはそう変わるものではないはずである。

先生の遺訓は《人間陶冶の詩》というだけで、それ以上の意義や内容を克明に発表されているわけではない。

聞く弟子によって受取り方はさまざまであって、その各々は必ずしも一致しないのは当然であろう。

私は私なりにこの人間陶冶を解釈、展開を試み、誌上に数回発表した。わたしはさらに実践を分析したい所存であるが、発表は不日のことになろう。

それにしても「川柳というものを締め木にして、人間の悪汁をしぼり出したら爽やかなものが残るのや」とは何というすばらしい表現なんだろう。薫風君に「これ君の発想」といいたらい、
「先生のだ」という。

自分の健忘症を棚上げして、薫風君は物覚えがいいなあと感心する。

はじめ、この言葉を薫風君のものかと思っていた。論争してみるのもおもしろいと思っただが、先生のだときいては何をかいわんやである。批判を超えて光ってみえる。名文とも名文句とも流石先生かなと、その薫りに酔いそうになる。非常に美しく、また突くべきを突いているとしかいえない。つまり、これは《人間陶冶の詩》のサブタイトルなのであると落ち着く。従って、この言葉自身、その具体性のある訳けでもない。これから先きは自らの鉄鉢に入れて考えてみるとおっしゃっているようだ。

次の「道徳川柳、修養川柳みたいに浅くうけとられている」これは聞き漏らしたので、薫風君の考えをいうたものか、路郎先生のお考えかわからないが、もし、先生のお考えだとすると、いよいよ、ますます「人間陶冶の展開」は必要になってくる。

なぜなら、このサブタイトルの通り、私は私の展開は試みられているからである。私の展開を一言でもって要約すると「川柳は真の幸福の追及」である。只の幸福でなく、真の幸福であるし、そうでなければならぬ。只の幸福と、真の幸福とはどうちがうか。与楽と拔苦与楽のちがいである。与楽とは欲望を追及し、それが得られたときの幸福である。欲

望が満されなければ与苦もあり得る。まして既存の楽を味う楽も出てこない。真の幸福はむしろ苦を常態と考えて、既存の楽あらば、これをピクアップしてその楽を味い感謝し苦と裸で対決してもたじろかず。余裕を以てつき合い方を考えるのである。時には苦さえ楽しむ心境をもつのである。

はたしてしからば、それはどこからくるのか。人間の悪汁を川柳という締め木にかけて絞り出したからこそなのである。

兼ねて、社会批判、人生批判を人間陶冶の只一つのサブタイトルとしていたが、つまり批判精神である。ものを客観化する、川柳独特の習慣から行われる批判なのである。

だが、そうあっさり悪汁が絞り出せるものかということだ。九歳から二十九歳までの悪汁の絞り出しに専念しながら、命終の九十歳まで悪汁と斗いつづけたのが、親鸞であった。

第一、悪汁の本質との正直な出会いの出来た人は何人いるだろう。正に難中の難かもしれぬ。

だがそのあとにつづくのが、「悪汁を絞り出したら爽やかなものが残る」という。悪汁の正体がつかめないと同じようにこの爽やかさの正体もつかみにくい。やつさもつさしてやつと落ち着くことが出来るのがさききのべた真の幸福を身にもつところだろうか。

真の幸福を身につけ得た人は完全な自由の下で人のみちを歩くことができ誰にも邪魔されることはない。

そういうと私の展開は、いよいよ「道徳川柳」「修養川柳」へ、問わず語りに落ちこんだみたいに浅いととられそうである。

最終的には、人の道をよろこんで歩くのだから、道徳川柳も修養川柳も肯定しよう。だが、発想から完成までの段階で、全く本質的に異なるものをもっている。これは私の「宗教の裏付けなくして真の道徳なし」の真念から来ている。人間陶冶の展開で川柳道と川柳の宗教化しようとしているのもそこにある。

一分間の柳論

私が川柳にかかわりを持ちつづけている川柳の魅力は、人と人との「邂逅」により自分が成長し生かされていることを、川柳との出合によって、より強く知ることが出来たからで、このことは、長い闘病生活の中で育まれた私の信条でもある。

川柳は自由に人それぞれの顔形を持つ、十七音字を基調とした人間愛の詩だと思ふ私は、喜び、憎み、かなしみ、傷つき、あたため合いながら、語り継ぎ言い継ぎ書

せよ、すべからずの道徳しか知らぬ人はその結果が望ましいものであるにせよ、悪汁に満ちたお互いという真実と如何にかけはなれていることに気がつかない。気がつかないままに極めて不完全な結果に満足している。これが世間の道徳である。だから甘いんだし、浅いのである。

しかし悪汁の本質や爽やかさの本質を徹底的に探求した上で、のぞむ場合、人の道へ及ばずながら、せめては、せめてはせすにいらね願いで取組むとき、それを甘いか、浅いかいっていいであらうか。本質的ながいを了解してほしいものである。

三宅 不朽

き継がれて来たことの中から生れた一語一語に、どれだけの人の「思念」が言葉にこめられているかを思い、謙虚に言葉への畏怖と愛情を忘れてはならないと思う。

私は生活の中から生れる、「真情美」を川柳のバックボーンに、醜いものからも眼をはなさず、もの言わぬ路傍の石にさえ素直に、「驚き」を感じることの出来る心を深める為の努力をつづけてゆきたいと思う

デモ

森井菁居選

おまつりのようにデモ隊通りすぎ
盛り場をすぎてデモ隊人が減り
デモの列うしろで俺は旗を振る
デモの列蟻のようだといふ窓
中ほどはすこしダレてるデモの列
デモ空しどこ吹く風物価高
社長ふとデモって見たくなってくる
結局はお金ほしいデモの列
デモ隊へ遠く野良の鍬光る
デモ無口に還る時花開く
同情の湧かぬデモの列に居り
デモすんでからグループの梯子酒
デモの列政治不信はきままり
諦めが底に渦まきデモの旗
デモ隊の列をちよん切る信号機
鉢巻きをした仮面がデモに居る
デモ隊にまかせて甘い汁を吸い
デモしても効果の程が案じられ
デモ出来る身を警官にうらやまれ
主義もなくデモに加わるだけの顔
学生のデモ賑々し賑々し

デモ出来る労働貴族羨まれ
デモ行進出来る日本の恵まれて
他人ごとのようにデモ見る町工場
原禁のデモ黙黙と炎天下
片腕のない父さんがデモの列
デモに舞う落葉は非難するように
シグザグのデモを横目に臨時工
民主々義デモを此処迄育てあげ
なんのデモかいなべっぴんばかりなり
小遣いの値上げへ子等がデモをまね
デモに行く息子と知らず送り出す
せまき門くぐってデモの旗をふり
革新の議員デモ隊票に見え
花びらが踏みにじられたデモの列
デモ隊の氣勢を夕立ち持つて逃げ
平和守るデモだ私も参加する
整然たるデモには政府あわてない
先生の顔を見つけたデモの列
静かなデモできあとパッチつけるだけ
ダムの水デモ攻防を秘めて澄み
デモさわぎもつたいないぞ五月晴れ

デモ隊の散った広場へ鳩が群れ
喰う為のデモなら僕もついて行く
デモ解いて屋台で丸い月を見る
管理者の目には愚かなデモの列

新 茶

野村岬月選

茶処に嫁して新茶を提げぐる
試飲した義理で新茶を買わされる
お土産は新茶ときめて旅にいる
お茶好きの母へ新茶が寄ってくる
宝物のように新茶を囁る母

新茶先ずご先祖さまへお供えし
二人だけの余生へ新茶届けられ
新茶でっせと急須持ち直し
とにかくも新茶は茶祖に献じられ
出来不出来言うてはおれぬ新茶摘む
借金に來たのに新茶の自慢され
元氣かと新茶にそえた父の文字
心貧しき日なりせめても新茶飲む

結論はまだまだ新茶とうに冷め
胸やけを新茶のせいにするも年
お土産の新茶に妻の湯がたぎり
茶柱も新茶というので囁んでみる
折角の新茶も味のない返事
新茶でも入れますユックリしておくれ
新茶など出されて無心切り出せず
新茶買った一つ一つの贅として
新茶一服貧しきことへ微笑する
疲れ帰る夫にだまって新茶汲む
仏さん新茶ですよと掌を合わせ
ふるさとの新茶が居く新任地
左利きある日新茶を抱いて来る
鐘ふたつ新茶が匂う日の仏間
新茶摘む今年は末の子も離村
新茶摘む餅観光課もまじり
荷造りをあふれ新茶のかおり着き
もったいをつけて新茶をふるまわれ
パン食に飽いて新茶のなつかしい
佳

同 代仕男 岩光 木魚 木魚 思月 綾女 文子 照沖 春日 豊生 里風 同 素身郎 同 みのる 方大 俊風 軒太楼 白水 回天子 踏草 みのる 方大

新茶の香父母は元気でいるだらうか
天 旧姓のままで今年も又新茶
追いかけて新茶を持たす里の母
軸

越智一水選

鵜

鵜ある日鵜匠の無理をあざ笑い
鵜飼船しばし待つ間を鮎料理
呑みこんでやろうとある日鵜が思い
かがり火へ古代の人となる鵜匠
本能を芸にされてる鵜の哀史
宮仕え鵜に同情の目をそそぎ
鵜と共に鵜匠も挽歌繰り返し
空腹の鵜は一匹を胃にとかせ
鵜匠ふとサラリーマンの子を思い
獲物無い川でも鵜飼ショーをやり
鵜の鳥は川一杯に輪を描く
鵜は糸の有るを知りつつ魚を追
長良川吞まれ上手な鮎も飼
鵜匠の目鵜ののどばとけ見逃がさず
養殖の鮎で酒盛り鵜飼船
磯に慣れて海鵜は海のこと忘れ
経営者鵜飼でコツを一つ知り

素身郎 神技に近い鵜匠のつなさばき
長良川鵜匠見知りの鮎もおり
あるじ見て又もぐる鵜の智恵哀れ
僕は鵜で妻は鵜匠の共白髪
鮎を追う鵜の目にまざる鵜匠の目
半円を描く鵜匠の芸悲し
放流の鮎も一役鵜飼船
夜のマダム鵜飼のようなヒモがつき
鵜の鳥に主役まかせて観光課
鵜は可愛のどにふくれた量を見せ
故郷の夏は鵜飼で幕が開き
後つぎのいない鵜匠のつなさばき
サラリーマン身につまされて見る鵜飼
鵜飼い見てふと脱サラを考える
佳

天明 秋人 登美也 宵明 善彦 春雄 福水 白水 重人 通風 祥月 虹汀 みのる ひろ坊 古方 漫柳 宵明 悠泉 回天子 岩光 勝一 伊津志 無人 木魚 右近 思月

方大 正則 カズエ どんたく 重人 洋々 ひろ坊 宵明

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

香川 醉々

お百度を途中で止めた御回復

安藤寿美子

ユーモアたっぷりの句です。でも人間の本性をついています。わたしたちもこれに類したことを始終やっているようです。それ諺にもあるではありませんか。「喉元過ぎてあつさを忘れ」とね。

帽子を被って自画像ほかしとく

小谷 葉子

赤軍派は、覆面をして顔をかくします。その理由は、筆者にはよくわかりません。正しいことをしているのなら、堂々顔を出しておけばよいと思うのですがね。でも顔をさらすと将来の就職に差支えるという甘えの構造があるのかも知れません。しかし女性性は違います。網目の帽子で自画像をばかします。やはり優雅なのです。

旧姓に戻った姉のアイシャドウ

松垣 岩光

破婚の浮き目にあった姉は旧姓に戻りました。妻から女に戻ったのです。さあ、大っぴらにアイシャドウもつけるし、爪も赤く染めましょう。女性の真理をうまく表現した句といえましょう。

これ以上裏切りはせぬデスマスク

納 史葉

史葉さんのご主人がおなくなりになったのですね。句を通して史葉さんのおもいが伝わって来ます。くどくどというのは止めにしましょう。

灰で咲く花は真心知っている

江口 度

枯木に花を咲かせましょうと花咲爺さんは灰をまいて花を咲かせました。枯木も、おじいさんの真心に感動したからですね。やはり何事も真心は大切なものだと、この句は改めて教えてくれています。

そのむかし皆食べていた春の草

堀口 欣一

せり・なすな・ごぎょう・はこべ・ほとけのぎ・すずな・すずしろ・なつかしい春の七草です。正月七日は、むかしは、あつものにしたり、おかゆに入れて食べました。すばらしい春の匂いでした。でも、いまは、そんな悠長な時代ではなくなったようです。

風に聞く噂は風の中に棄て

文川 野生

あのひとの噂を風の便りに聞きました。し

かし、去る者は日々に疎しです。そつと噂は風の中に捨てたのです。風はさらりと噂をつんで去って行きました。

玄関が音なく父が疲れてる

渡辺 南奉

毎日ほんとに御苦労様です。疲れた父は、元氣なく玄関をあけます。サラリーマン生活の悲哀がにじみ出ている句です。でも、一風呂浴びて、元氣をとり戻し、家族の笑顔につつまれている父の様子が伺われます。

輪廻かなおなじドラマを描く母娘

西山 幸

母と娘と、同じような運命をたどることがあります。不思議な人生ドラマです。仏教のことばでいえば、まさしく輪廻なのでしょう。

本物を手にしてからの迷いです

麻野 幽玄

なんぼうまくても本物には勝てません。いわば、プロとアマの違いなのです。でも努力次第では、本物に近づくことができるかも知れません。迷いが生じるのも、もっともです。

猛犬注意なるほど主は女なり

大島 花炎

よく猛犬注意のはり紙を見ますが、なかに神経質なスピッツが鳴いていることが多いのです。でも主が女性なら致し方ありません。猛犬ご注意は、兄玉邸あたりなら、効果観面でしょう。

作句姿勢に思う

鈴木村 諷子

川柳は魂の叫びであり人格の表現である。私達は川柳を作ることによって人格陶冶の資としたい。すべての邪念を捨て清純の心境を以て川柳を作ろう。

「いのちある句を創れ」そうだこのモットーに向ってただの一句でもよい、その句の中に作者の魂が脈々として生きていような句を作りたいもの。

私は課題吟より自由吟即ち実感句を尚ぶ。人それぞれの主張があつて、課題吟の良さを言う人もあるが、与えられた一定の題に、机上（頭の中）で殊更に捏ね上げた句には魂が入らない、うわっ面な通り一遍の句に終る場合が多い。

私の好む川柳は体験句、生活句、心の叫びから産れ出た句で、いつもそういう句を作りたいものと思つてゐる。

今から作句しますと改たまってペン持つてもちつとも句が出来ない、たとえ出来ても嫌なうんざりする句ばかり。

絶えず一冊の手帖をポケットにし、見たこ

と聞いたこと思つたことすべてを川柳の型にはめてみて、先ずそのヒント——未完成川柳——をメモしておく。後の推敲は時を爰え日を変えして、何回でも気のすむまで繰返す。私にとつて手帖を持たないことは、財布を忘れたよりも重大であり、物足りない感で、これも推敲の部に属するが一応句が出来上つたら、最後の仕上げを試みる。調子はよいだろうか、五七五の配列はどうか、こは漢字がよいか仮名がよいかなど、そして初めて私の句として産みだすことになる。

雑詠にしろ題はあるというが、先に題が与えられるか、後から題が産れるかである。私は後者をとりた。むしろ題などどうだってよい。

又あちこちで投句されているのを見るに、

岐阜市 市川 鱗魚

シャツも着てねる仲となり五分と五分

ピヤホール日銭の顔は隅による

どん底の男に天と地が残る

真珠貝母は石抱く痛さ知る

妻の笛ならば踊れるなと思ひ

大洲市 米沢 暁明

敬遠をする気 黙って聞いておく

船室は一家だらん島通ひ

ペテランなどとおだてに乗るものか

反論はすまい正論われにあり

家中がかかつてゴキブリを逃し

消したり直したり、まるで原稿のままを送っているようなのを見受けるが、作句の放漫性を暴露し、実に選者を冒瀆するものと言えよう。なまなかな三文川柳を人前に発表しては、川柳人としての沽券に関わるという、それ位の気概を持ちたい。

句の上手下手は兎に角充分に推敲を加えて自分なりにベストを尽した句をキチンと清書して投句するようにしたいもの。

天地人に抜ける、いい点をとりたい、そんなことは作句の最要事ではない。勿論いい句を見習うことは大切ではあるが。

駄句を多く作るより少なくともよい「いのちある句」の作句へ近づけたいものと念願しています。

大 萬 川 柳

「ゆとり」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 六百四十句
 入選 七十六句

諦めが心のゆとりを取り戻し

倉敷 春日

一眼の煙のゆとりは負けている

大阪 頂留子

女房が稼いでくれているゆとり

川西 洋敏

善人のゆとりは顔に刻まれる

鳥取 静泉

貧乏に慣れそれなりにあるゆとり

藤井寺 吸江

見栄はってゆとりないのを見透され

和歌山 武雄

風向きの変り待っているゆとり

大田 軒太楼

子等果立ち交々趣味を語る夜

鳥取 露杖

花活けて心のゆとり取り戻す

大阪 あいき

逆境にどん底経験したゆとり

大阪 弘生

多情仏心妻の座にあるゆとり

富田林 花梢

老春のゆとりベレーがよく似合い

堺 憲祐

商談のゆとりは洒落で締めくく

枚方 珠笑

間口だけひろびろ奥のないゆとり

義夫

いささかのゆとりか妻も春の色

堺 千万子

太陽へ影まっすぐに立つゆとり

大阪 鎮彦

ゆとりある笑顔で囲む夜の膳

和歌山 幸

ひと様が見ればゆとりのある暮し

大阪 一舟

懐に切札持っているゆとり

松原 史好

ささやかなゆとり温泉へ妻と旅

鳥取 紫宏

ゆとり出来糖尿に病にとりつかれ

和泉 洛醉

新世帯たったひと間にあるゆとり

西宮 多久志

ゆとりあるくらしになっても苦勞

奈良 保夫

年金のゆとりの中で小さく生き

倉敷 筒子

あきまへん儲かりまへんとゆとり

富田林 優

みせ ささやかなゆとりが出来て花を買

大阪 文秋

忘れてたゆとり見つけた青い空

松原 サヨ

ひとときのゆとり写経の墨をする

堺 一二三

弁解のゆとり与えてくれぬ妻

今治 正則

家計簿のゆとりを妻は伏せておき

笠岡 忠三

明日の陽を信じるゆとりを持って

八尾 幸生

ぎりぎりのゆとりネクタイ締め直

和歌山 太茂津

す ゆとりではない動揺かくす煙草で

倉敷 素身郎

ゆとりなどないが出さねばならぬ

義理 東予 悠泉

負けて勝つ心のゆとり和を上げ

和歌山 福水

自信あるゆとり中傷は気にしない

大阪 満津子

沈丁花世相をよそに腹郁と

大阪 妍斎

銀行にゆとりを見せる下心

橋本 木魚

マイホーム故郷の母も呼ぶゆとり

東大阪 三十四

躓いた石も蹴らない日のゆとり

橋本 善彦

捨て石で相手の出方みるゆとり

東大阪 肖二

駒組みのゆとりが憎い段違い

八尾 鬼遊

玄関の一輪挿しにあるゆとり

錦鯉泳がすゆとり聞かされる

鈍足とみんなが知っているゆとり

折れてやるゆとりを持っていた和

解 ゆとりある女の地図にも涙跡

明日の虹信じて寡婦にもあるゆと

り 凡人のゆとり不善へ踏み迷い

ゆとりある暮しにじむお人柄

大阪 真砂

大阪 好一

ゆとりできたら払うとそれっきり
ゆとりないことを自慢によく稼ぎ

西宮 百酒

ささやかなゆとり家計簿黒で越し
まだかじるすねのゆとりを見抜か
れる

羽曳野 幽玄

ゆとり持つ頃は余生の短かすぎ
持つ国のゆとり威嚇に動じない

平田 代仕男

寶石を心の奥にもつゆとり
妻がいて子がいて日々にあるゆと

和歌山 としよ

今日の汗明日のゆとりを拓く道
救われるゆとりが出来た珠数の艶

松原 重人

ゆとりある今日に苦悶の昨日あり
後輩のミスをかばってやるゆとり

箕面 一本杉

いささかのゆとり二人目生むと決
め
マイペース崩さぬゆとりの歩が軽

精一杯生きたゆとりの丸い背な

明日を見るゆとりが笑顔になつて
くる

佳句

ゆとりある暮しダイヤが指に無い

尼崎 幸彦

身の程を気付いたとこにいたゆと

り
銀行の言質取つてあるゆとり

和歌山 武雄

生活のゆとり空虚が胸に住む

大田 軒太楼

いささかのゆとり善意の灯がとも

り
雑巾を真白く干した日のゆとり

大阪 好一

自信あり射程距離を泳がせる

人ノ句

そうゆとりもないのに夫太り出し

地ノ句

倉敷 素身郎

根を張ったゆとりは春を急がない

天ノ句
兵庫 可住

雲を見るゆとりを明日も忘れまい

選者 吟
松原 史好

予備校はやつとパスした日のゆと

り
昭和五十二年年度

ベストテン (三月現在)

一 憲 祐
二 花 梢
三 幽 玄
四 幸 生
五 美 幸
六 夕 花
七 真 砂
八 一本杉
九 天 笑
一〇 素身郎
一一 史 好
一二 幸

一、〇 堺
一〇、五 富田林
九、〇 羽曳野
七、五 八尾
七、〇 八尾
七、〇 八尾
七、〇 大阪
七、〇 箕面
七、〇 堺
六、〇 倉敷
六、〇 松原
六、〇 和歌山

昭和五十二年年度第六回

「豊」五句以内
締切 五月二十五日

第六回
「拾」五句以内
締切 六月二十五日

投句先
〒533 堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三万

大萬川柳係

山田 季賛 一周忌法要 大会
遺句集「鉄道草」発刊記念

日時 6月19日 (日) 10時開門

場所 竹原市照蓮寺 (駅より徒歩30分) 国
重文・日本百庭園の小祇園在り。

兼題 勲章・男盛り・メモ・新幹線・ひと
り旅。

出句 13時締切。各題二句。

献句 一句。席題なし (投句拝辞)

閉会 16時

会費 千円 (遺句集B6版一九二ページ。
御齊 (おとき) 発表誌等ふくむ)

当日の予定―安芸の小京都観光・希望者無料
―法要13時―披露14時―16時。

連絡先 〒725 竹原市竹原町田中 山内静水

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

句料五百円、賞は本誌。風刺吟—自由吟—十四字詩・課題・「友」「呼ぶ」「葉」「母」出句先〒250小田原市鴨宮町三七二—二関水華方川柳路吟社全国誌上大会係。

中央公民館で開催。会費千円(昼食、発表誌を含む)兼題—美談・裏目・使者・急所・ほくろ・女神・回る・証人・軸・呼吸・特別課題「満点」高橋鬼焼選(本社同人) 投句料五百円(締切4月27日) 〒724東広島市西条町寺家五八〇八—かも川柳会内、高橋鬼焼まで。主催—かも川柳会

研究者(東大理学部出身)として著名。「川雜」時代にはよくご執筆いただき不朽詞友だった。合掌。

▽同人の動向▽

▼中島生々庵・小石ご夫妻は3月21日に開催された全日本川柳大会(野口英世記念館)へ出席された。三百名からの出席で盛会。川柳大賞は大石鶴子氏(井上剣花坊氏長女)の「転がったとこに住みつく石一つ」準大賞四氏のうち本社同人森井蕃居氏(竹原市)の作品は「無視された一人が正論かも知れぬ」

▼ふあうすと川柳社では四月一日からの新機構を発表。名誉会長に増井不二也氏、主幹には去来川巨城氏ほか。旧役員全員解任を発表されている。

▼現代川柳第17号が出た。代表者は池口吞歩氏(雄山閣の「川柳年鑑」編集委員) 気骨のある柳誌である。誌友費年額一、二〇〇円 共となつてゐる。〒100東京都台東区上野公園12—45—4 池口吞歩方。

▼浜野奇童氏(岡山県)から3月29日に毎日系TV「スタジオ二時」で川柳角力、川柳寸劇を披露しました。三十周年記念の「川柳小径」と「川柳公園」も同人二十六人の句碑を建立。それらのことでマスコミに攻められ、ちよつとうるさくうれしい悲鳴をあげてゐます。(電波と川柳といえは弓削というほど有名である。「川柳小径」がまた話題を呼ぶであろう)

▼川柳「路」昭和51年度賞決定。最高賞は「生臭い女を喉の奥に飼う—小野富代」入賞句入りの楯と賞金一万円。準賞は「ひとりから一匹になり尾は振らず—野谷竹路」入賞句入りの楯と賞金五千円。—誌上全国川柳大会は五月末日締切。出

▼第15回かも川柳大会が5月1日9時から東広島市中

▼西尾葉氏(八尾市)は3月21日の日川協主催の全日本川柳大会に出席。主幹ご夫妻と奥谷弘朗氏らにも会われた。

—こんな句が出来たのにまた雪が降ったり長い冬でした。

▼山内静水氏(竹原市)から—今年は何集を三つ出すので急に忙しく、頑張っています。

▼奥谷弘朗氏(倉吉市)から句碑建立記念に本社へ金一封贈られた。

▼橋高薫風氏(豊中市)から—息子が中学に上がるの

カッケ 肉体疲労時の
(脚氣) ビタミンB₁補給に
アリナミン[®]A

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠



で一緒に旅に出ました。後日印象に残るだろうと思ひますので。(3月31日)4月4日)宮島から四国へ渡り、三井酢夢さんに案内して戴いてます。

▼小島蘭幸氏は5月14日午後一時半、竹原市民館で結婚式を挙げられるが、結婚記念に川柳句集「再会」を

発刊。おめでとうござい

す。一六〇ページ、序文は菊沢小松園、山内静水両氏。

▼梅谿庵不醉氏(姫路市)から「他人様の儲けを計算する仕事もシンドイこと

です。商売、商売です。」と読者獲得でお世話になって

います。

▼福浦勝晴氏(岸和田市)から「出身地は三重県伊勢市神社町ですが、四月八日

に近鉄橿原温泉「白雲荘」で小学校の同窓会があり、五十年ぶりで旧友と再会しました。

▼岡崎祥月氏(松江市)から「三月いっぱい退職し年金だけで二人は食えるので川柳の旅を考えています。

▼国弘半休門氏(下関市)から「3月15日付防長新聞に生々庵主幹の川柳考として川柳塔のことや路郎師のことが出ていました。やっぱり肩身が広い思いでしたと

「普天句集」に情熱をもやされている。六月に発刊されるが小松園氏が選句に、一三夫氏が編集や校正に協力されている。

新同人紹介

時 末 一 灯

千翁・薫風・一三天・推薦

▼有信新之助氏(大阪市)から「麵類組合の総会で片山津温泉へ行って来ました。永平寺の修行僧の姿が印象的でした。一ひとの話でもてたような気で帰り

新之助

▼5月の句会△

▼菜の花句会は10日午後6時から西郷会館(八尾神社境内)で開催。近鉄大阪線八尾下車南歩約一分。会費三百円。兼題「ホステス・

追う・肌・出発」席題二題(各五句以内)投句は郵券百円同封。〒581八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸あて。

▼南海川柳会は19日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「遠回り・掛け値・忍び足」。

▼川柳東大阪句会は28日午後6時から東大阪市中央公民館二階第二集會室で開催。題「牡丹・爪・動く・ポイント。席頭二題当日発行。

追う・肌・出発」席題二題(各五句以内)投句は郵券百円同封。〒581八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸あて。

▼南海川柳会は19日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「遠回り・掛け値・忍び足」。

▼川柳東大阪句会は28日午後6時から東大阪市中央公民館二階第二集會室で開催。題「牡丹・爪・動く・ポイント。席頭二題当日発行。

追う・肌・出発」席題二題(各五句以内)投句は郵券百円同封。〒581八尾市高安町北一丁目二五、大路美幸あて。

▼南海川柳会は19日午後6時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「遠回り・掛け値・忍び足」。

▼川柳東大阪句会は28日午後6時から東大阪市中央公民館二階第二集會室で開催。題「牡丹・爪・動く・ポイント。席頭二題当日発行。

第七回 紋太忌川柳大会

日時 5月29日(日) 11時開場
会場 神戸木材会館5階大ホール(神戸市兵庫区大開通2丁目22(兵庫郵便局隣))

「開会のことば」中川一。「挨拶」増井不二也。「おはなし」助川助六。

51年度ふあうすと賞発表・泉淳夫「51年度紋太賞発表。橋本衛門七「両賞表彰」ふあうすと川柳社雪特別賞表彰・去来川巨城」。

兼題
「動」 山本芳伸 選
「朝」 中津泰人 選
「鮮やか」 大森風来子 選
「芝生」 三条東洋樹 選
「試く」 中島生々庵 選
「白」 近江砂子 選
「待」 和田遠矢太 選
「つ」 和選

開会のことば・森田日の出・呈賞各題秀吟一句。席題なし。(投句辞退)
会費 五百円(記念品・呈)懇親宴なし。
主催 主催 ふううすと川柳社

本社四月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

厳冬の幕がしまるとスゲ花のシーンの幕あきで、花信しきりという四月句会である。出足はややさびしいが、それでも70名近いご出席だった。

まず51年度の「各地柳壇賞」を川村好郎副理事長から、高橋夕花さんに。―句入りの楯。

柳話は黒川紫香氏である。氏は川柳雑誌時代は永い間、句会部長として活躍された。水客・潮花氏らと仲よし三人組は有名で、小学校時代から川柳する今日まで今なお友情がつづいている。さて―お話は、氏の阪急電鉄本社四十年勤続中の佳話である。氏も潮花氏も小柄だが、その小柄の大人物、小林一三社長から「小僧、大きくなったな」と云われたエピソードが楽しい。氏の入社当時の給仕時代から係長に昇進した紫香氏を知っていた小林社

長の親しみのある「激励」の言葉を、一言一句噛みしめながら語る氏である。

ご承知のように、小林一三氏は宝塚少女歌劇や、戦時中の商工大臣（近衛内閣）として活躍され、または公職追放などでも話題の多い人だった。―余談だが、上方演芸復興（戦後）に秋田實先生を招かれ相談されるなどこの方面でも恩人であった。

紫香氏の柳話は、体験談だけに最後までグイグイ聴衆を引っばっていく。（このような実話は読み物としても楽しいと思う）

今月から新しく女性選者が登場した。その花の選者のトップを切ったのが宮西弥生さんである。席題「赤飯」がお祝いとなる。

今月の月間賞杯はベテラン正本水客氏にかがやいた。

（進行・西田柳宏子―記録・高杉鬼遊）

出席―雅風・与呂志・漫柳・道夫・水客・紫香・古方・右近・史好・滋雀・太茂津・与史・武雄・美幸・一舟・静馬・瓢太・千万子・維久子・柳志・夕花・勝美・一三夫・喜風・肖二・綾女・牧人・文秋・醉升・花梢・君子・あいき・誓二・好郎・静歩・千梢・蘭・凡九郎・幸生・柳宏子・一二三・川狂子・度・薫風・いわを・吸江・古啓・一念・野生・

重人・恒明・寿美子・小松園・酔々・弥生・雀踊子・形水・岳人・鬼遊・頂留子・喜美子・庸佑・葉子。

席題「赤飯」 宮西 弥生選

赤飯で待っているぞと力づけ 一二三

赤飯が大好き何でもない日です 好郎

赤飯を焚くとカマドに灰がある 岳人

赤飯へ酒がほしいという育ち 太茂津

左遷にも赤飯が出る送別会 吸江

四月馬鹿赤飯炊いてみたくなり 鬼遊

赤飯の色に映えてる合格証 漫柳

赤飯へ痛い正座をしられる 花梢

赤飯へ本当のこと言いそびれ 恒明

赤飯の色に指先染りそう 雀踊子

赤飯はどないしまひよとみくびられ 寿美子

予備校行きます赤飯とはなりぬ 静馬

バスデーキーに赤飯負けていず 静歩

赤飯を貰って食事四度になり 右近

赤飯をたく程でない内祝 瓢太

六百号祝う赤飯妻に謝し 一三夫

たまに赤飯買えば今日は何の日や 吸江

赤飯が来たのでお祝い持っていき 静馬

合格の赤飯はコネの湯気もたち 維久子

赤飯の一口ずつに母がいる 滋雀

お地蔵の赤飯野良犬平らげる 度

俺が死ぬ誰が赤飯炊くやろう 重人
浪人よさらば赤飯の箸を取り 牧人
噂から早や赤飯を炊いている 野生
誕生日赤飯少し買つて来る 一念
赤飯の湯気に今宵水入らず 花梢
赤飯に招かれ私の負けを知る 花梢
赤飯を炊きたき学資のことと思う 静馬
赤飯に返すことばは一言で 美幸
長男誕生今日も赤飯追うて来る 弥生

席題「水筒」

神谷凡九郎選

水筒をふれば疲れた音がなり 雀踊子
水筒を持参で生き甲斐語り合い 醉升
單身赴任水筒に酒があり 水客
花模様ついた水筒借りて行き 勝美
リーダーの水筒だけがつまつてた 与呂志
水筒が先生せんとせと寄ってくる 静馬
水筒の穴から戦きが漏れてくる 太茂津
水筒の一つに匂う水があり 右近
さいはてに近し水筒の地酒くむ 静歩
水筒の口から働く喉が鳴る 滋雀
只一人水筒かたがて山男 与呂志
誰かさんの水筒ばかり何故か減り 道夫
活き返える水筒という竹の筒 古方
コマーシャル真似たら水筒破れちゃった あいき

水筒へ山の清水をくぐらせる 蘭
水筒の磁石が春を指している 滋雀
水筒もあけてしもうた雨やどり 好郎
水筒を親に預けて子が駆ける 紫香
春日遅々親子の唄がある水筒 重人
水筒にまだ水があり山登る 鬼遊
砂漠の中でこの水筒に試される 古啓
山百合が咲くので水筒も用意する 千梢
砂漠の風にコロコロ空の水筒 幸生
水筒を木にぶら下げて寝てしま 小松園
水筒の水で洗ったかるい傷 夕花
口すぐ水筒とする山に慣れ いわを
水筒も腹も空っぽああしんど 右近
遺品として赤い水筒だけがある 君子
溪流に水筒とられたらしい声 一三夫
水筒に紅茶が入れてある女 与呂志
水筒が軽く揺れてる夫婦です 醉々
僕の持つ水筒だからやはり空 凡九郎

兼題「摘む」

大路 美幸選

かかる世へ産科で生命を摘む悲情 寿子
摘む摘まぬ聞いて新芽は驚いた 軒太楼
一にぎりよもぎを摘んだ試歩の杖 登美也
出稼ぎも去年と同じ新茶摘む 福水
胃が痛む男は葉草摘みにゆく 岳人

一日の平和娘と春を摘む 与史
かんざしぐくら只ゆきずりの風が摘む 古啓
蒔いた種摘む中年に來た愁い 弥生
教育ママの見栄が摘みとる自由の芽 武雄
きりよう良すぎて茶摘み涉どらず 小松園
蓬摘む蓬だんごがなつかしく 綾女
よもぎ摘む保母はお嫁にまだゆかね 醉々
摘まれれば尚抵抗の芽はのびる 古啓
わらび摘んでむなしさふつとよぎる 千梢
母の味に程遠くともよもぎ摘む 恒明
野花摘む可愛い命にすこし詫び 夕花
新茶摘む指にダイヤを手離さず いわを
善意の芽摘み取るエゴが街に満ち 文秋
土筆摘むそれが別れのセレモニー 醉々
婦省子へ母いそいそと蓬摘む 蘭
故郷も人手不足の葉摘唄 雀踊子
新茶摘むセッセーになつてくる 度

「北壁の男らしさを観て飽かず」
句碑建立記念として

金 一封

奥谷弘朗氏から本社発展費として
いただきました。

チャンスの芽摘み取る切れのいいボール

度

大輪を咲かせる無駄な芽は摘まれ

摘む指の白に挑戦しててるバラ

オーロラの下摘み草は夢である

語らいも無く老夫婦花を摘む

摘み取って置かぬと敵に回りそう

どちらかを摘まねばならぬ鉄です

蓬摘む母娘の歌を土手に聞く

つくし摘み草の匂いをもちかえり

蓬摘んで亡母の心に触れている

摘み草の涙か染めた指の色

悪の芽を摘む一言をよっている

枝摘んで花器に添わせる花ばさみ

花芯摘む軽い疼きが消えぬまま

花を摘み摘み殺し文句を考える

花盗む指にほのかな温みあり

思い出を摘む酒なれば暖めず

誕生日の私に贈る花を摘む

摘みあきた掌を大空へむけて寝る

いとやすく少女に摘まれた一年草

兼題「気合い」

野村太茂津選

静中動あり気合い点火期を狙う

仙人の気合い熱湯浴びて見せ

牧人

柳志

漫柳

恒明

右近

恒明

古啓

喜風

花梢

君子

あいき

維久子

頂留子

太茂津

一三夫

鬼遊

水客

君子

紫香

美幸

幸

幸

幸

幸

老骨の起居に気合のタイミング

心底を見抜く気合いへ偽らず

素振りする気合いへ日本の血が走る

気合い負けしたか冗談引込める

朝めしを抜いた気合いで馬鹿にされ

もう気合い忘れた父の日なたぼこ

或る日の気合い妻子にわからない

連休明け気合い入らぬ朝の靴

春休み気合いのぬけた顔でいる

蜘蛛の糸武蔵の気合なら切れる

勝負師は気合いのチャンス知っている

兄のウンチ気合をかけて出してやり

支店から気合を入れたきたピンチ

たかが鳩出すのに天地を裂く気合い

どぶ川をまだ飛び越えてゆく気合い

気合い入れて零の思考を呼び醒す

魔術師の気合いに騙されまいとする

自分を変える日々の気合いを忘れない

気合いある日女の涙を見てしまい

土踏まず男の気合知っている

気合いだけいれても吐がすいていた

気合い負けしてふて寝してしまい

裂帛の気合いに入れ歯素つ飛びぬ

必中の気合いへの的が固定する

一栄

寿子

雀踊子

柳志

一舟

維久子

与呂志

蘭

寿美子

武雄

花梢

一三

古啓

君子

君子

君子

君子

君子

弥生

岳人

凡九郎

与呂志

一三夫

柳志

川柳塔柳箋

一冊 百五十円
送料 二百円

花束を抱いて気合いはかけられぬ

ぶつかった瞳に気合い火となって

セールの気合い袍に入れて出る

友情の気合い手加減などしない

かく鑠の素振りに朝を斬る気合い

敗残へ仁王の気合いが突き刺さる

負け犬の気合いは猫にもなめられる

烈帛の気合い獅子身中の虫を斬る

気合いだけ掛けて社長も悩んでる

裂帛の気合勝負は終ってる

ネジを巻く妻の気合いに朝を出す

駄馬なりの気合いで走る遠い道

煩惱を断ち切る竹刀とみた気合

限界に挑む気合が血に響く

達人の気合いは抜く事も知っている

居合い抜き気合で愛を拒まれる

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

滋雀

好郎

野生

凡九郎

酔々

花束を抱いて気合いはかけられぬ

酔々

凡九郎

野生

好郎

滋雀

美幸

鬼遊

一念

武雄

親の眼に金の卵のランドセル 優
 横幕の祝入学も春の色 軒太楼
 新入学ママとつときの面に替え 一栄
 ゲバ棒を振るとは見えぬ新入学 牧人
 新入学親のしつけを見て貰い 度
 名門の新入生に罷がある 幸生
 赤門へ点字入学胸を張り 勝美
 母の夢子の夢ランドセル映える 滋雀
 新入学次の苦勞へぬしい 太茂津
 入学でよろこび寄付でおどかさ 好郎
 新入学過保護とわかる子もまじり 文秋
 狭い門今日は笑顔で胸を張る 喜風
 新入学門からは母の手を離れ 野生
 新入学咲いた咲いた桜が咲いた 岳人
 宮様も新入学で固うなり 一舟
 新入学ママと二人の写真館 一念
 年金で新入学の孫へ買う あいき
 入学式教師の値踏みする父兄 一二三
 出稼の眼に入学の児がつづく 水客
 新入学母のない子もよく笑う 夕花
 新入学親の焦りを連れてゆく 太茂津
 新入学今年のさくら素晴らしい 鬼遊
 新入学みんな小鳥になっている 君子
 新入学夢でふくらむランドセル 肖二
 神童と思ひ手を引くランドセル 維久子

新入学ページへ初心の血を燃やし 千万子
 新入学母の視線に見守られ 蘭
 新入学ママは晴着を買うチャンス あいき
 新入学と言うスタートへ髪を切り 維久子
 パパママの期待が重いランドセル 柳志

兼題「果」 橋高 薫風選

木の上の果箱に子の目教師の目 祥月
 親と云う姿で鳥も果に戻り 紫香
 ローンにもたらずハチの果出来上る 頂留子
 愛の果は小さい程が味があり 勝美
 鳥が来ぬ果箱汚れるばかりなり 道夫
 住みにくい日本で果を変えぬ鳥 紫香
 獲物食べ終った蜘蛛の果繕い 綾女
 果のまわり二三度親鳥飛んでみせ 醉升
 果に近く母鳥がいる唄になり 紫香
 果立つのがまん中にいる写真帳 柳志
 果立つ日を着物姿でよき日本 よしお
 果に帰るつばめ見つけている家出 好郎
 果立つ子が遠ざかり石抱く親 秀峰
 裏街の果にブライドが置いてある 太茂津
 出稼きの夢はつばめの帰れる果 古啓
 果籠りに似て春を待つ老いしかな 喜美子
 色がわらつばめ果づくり遠慮する 登美也
 帰果性あったがぼろぼろ無一物 右近

樹の上の果には雛あり星光り いわを
 果をゆさぶるクモのうたぐり深くなる 雀踊子
 四課の刑事でパチルスの果をのぞく 牧人
 愛の果へ母が立入る隙がない あいき
 果に帰る尾灯点滅してつづく 右近
 背信も背徳もない蜂の果よ 古啓
 果づくりに互の汗を拭き合うて 一栄
 春を待つ果箱へ女からハガキ 弥生
 兄と逢うおじさんと逢う果を借りる 鬼遊
 果立つ日の進軍ラッパは母が吹く 野生
 果に帰る本能だけで歩いてる 千万子
 くもの果は蜘蛛の自信がうかがえる 水客
 クモの果のまん中にある落し穴 雀踊子
 果籠りの鶴は静かな石になる 醉々
 挫折感蜂の果に蜂を見ず 水客
 思いやりとは丸い果のまるい穴 薫風
 (河井庸佑・整理)

秋田 實 主宰 不二田一三夫 編集
 『漫 才』 復刊 第6号
 好評発売中

(定価・三百円・送料・二百円)
 発行所—〒544 大阪市生野区勝山南一丁目
 14 17

漫才作家くらぶ



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

どんぐり川柳会

谷垣史好報

シャネル五番でキリスト欺せない
文科系出たかけひきで女捨て

病む部屋のススマへ福呼ぶ豆の音
女ひとり誰にすがろう豆の蔓

逝く春へ白だけ残る五色豆
老いてなお香水つける身たしなみ

結論は出す南京豆の皮残り
こっそりとふところに飼う青い鬼

香水を変えても男ふり向かぬ
セールの靴かけひき詰めて出る

こっそりと現れこっそり消える人
かけひきを見抜いて帰る素振をし

かけひきへまっすぐ立っているかがし
こっそりと乞食が喰べるAランチ

恋人が出来香水を弄ぶ
豌豆の花へ紋白見失い

炮烙のひびを氣にして豆を焙り
前菜の青豆春が膳にのり

かけひきの出来ぬ小さな目をしてる
史好

京都・塔の会
松川 杜の報

酔々
恵美子

サヨ
好郎

薫風
江太

飄々
美幸

吸江
喜風

鬼遊
弘美

勝美
鎮彦

岳人
幽玄

小松園
萬里

史好

大根下ろし母と暮らした日を憶う

金運に遠い夫婦の清い汗

放り込む雪とけにくい露天風呂

よもぎ摘む指へ彼岸の陽がぬくい

帰り道別れてからの寒いこと

水仙の茎や曲り花終る

出撃へ男冥利の酒を酌む

女系家族養子がいたのを忘れられ

女系家族祖母の意見をまだ通り

親娘三代生命をかけた舞扇

踏絵に乗るときの素足へ風が止む

宿浴衣素足で早春をたしかめる

白鳥の羽根に汚染の色見えず

いずも川柳会
板垣

盛會を占うような徹夜組

はよ去んで欲しいお客を孫が止め

寒氣団にお客のように来て座わり

長尻の客に掃除機役立たず

老いの辞書愉快という字が見当らず

盛會に万才しても又座わり

盛會へ後片づけの手もはじみ

盛會を如実に語る句主の徳

思い出は道草食った廻り道

山茶花の白思ひ出の人が棲み

思い出は又軍歌なり走馬灯

肩書のない人生も愉快なり

吹雪く日の盛會まるく火を囲み

客の前だけ標準語と見たり

酔客を手玉に取ったママの機智

拍手又続く披露を盛り上げる

盛會の後遺症に寝た二日

紫香

明代

和友

潮花

求芽

笛珠

客遊子

白溪子

飛鳥

よし子

水客

杜的

誠史

草丘報

鐘堂

芳雲

立雲

郁生

多賀子

春梢

舞吉

休二郎

きみえ

正朗

河煙

水煙

芙佐子

通児

軒太楼

虎秋

独仙

思い出に灯が点きえくばぼつと出来

菜の花句会
高杉 鬼遊報

春闘のせい香袋が集まらぬ

左ききのくせに器用でない育ち

腹時計サムライの子でありませぬ

桃の花咲いて春闘幕あがる

いつの日か私の死も指す時計かな

ありがたし左半身だけ生きる

コヒーで会いコヒーのまま別れ

傷心に触れない酌は斜めから

加速度がすこし気になる古時計

春闘の出来る会社へ引き抜かれ

手酌に限るなどとニヒルな酒を飲む

春闘を今年は故郷の煙で聞く

酌み交す君の瞳みに僕が居る

コヒーの香りで朝の幕を切る

水死体時計は防水自動捲き

左きき罪は親にも七分あり

アランドロンとの情死ならすぐ決る

左り棲榮華に生きたる芸を持ち

許されるかも知れぬ聖夜の情死体

時計など知らぬ河内の放蕩児

川柳わかやま
津田 与史報

ドン底を泳いで三度のめしを喰う

笑うたら相手は笑うまた笑い

前へ進めノ平和な号令だつてある

進んでる証拠は強い風当り

進みたい道も四十路に居る孤独

まっすぐに進む目標だけは持ち

立退きの進まぬ裏に金と意地

茶が酒に変わって話し進んでる

緑之助

醉々

頂留子

恒明

江留美

雀踊子

亜鈍

亜也子

弥生

幸生

紀美代

牧人

洋子

美幸

秋美

鬼遊

豊子

史葉

鶴声

夕花

桑

牧人

武雄

大輪

正博

三栄

富子

元一

裕美

素人にはずみが付いて儲けだし
七光り背負う男が追い越され
追うてる氣回転木馬に乗っていた
日めくりが私を追っている師走
福娘新春の笑顔もつけて売る
福引の福は無欲のてのひらに
苦勞した母がつかんだ残り福

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻

駅前こんなところに歩道橋
盗んだ自転車駅前へ乗り捨て
駅前の手持ち無沙汰は電車スト
吹降し駅前美人が裾おさえ
駅前で一円こんなに踏まれて居
駅前を避け中年の恋があり
駅前のパチンコちょっとも入らない
駅前に住んで子供もまててくる
駅前を足取り軽くハネムーン
駅前は客引ばかりの温泉場
会えた声嬉しく響く駅の前
駅前で旅館のバスが待っている
駅前で思案の顔を見抜かれる
駅前で女は愛の花を買う
駅前まで来てから財布思い出し
駅前で母に泣かれている家出
駅前の噴水枯れる十二月
駅前で幹事がじれてる遅刻
オースケール川柳会 大坂

文秋 醉々 弘生 君子 憲祐 夕花 鎮彦 圭水報 摩太郎 天笑 邦晴 勝美 圭水 武助 つき子 小松園 儀一 柳信 雅風 正和 清女 鎮彦 維久子 綾女 肖二 千万子 形水報 亜成 美都 ひとり 一扇

送り狼にワクワクしてる娘心
マーク見て物の値打ちを決める人
見送りのテープでつなぐ国と国
送る身が送られる破目になる深夜
先輩を送れば又も飲み直し
受刑者のバス送るのが屋根の鳩
ぬけぬけとゆうべのマークの跡を見せ
お稲荷に居れば狐は神で有り
見納めに成るかも知れぬ人送る
謹慎へ送られマークの罷落す
夕焼けに透れミレークの絵に帰る
霊柩を送る車の順決める
そろそろと見えれど亀の精一杯
川柳たけはら 森井

六十のお行儀二才の瞳に射られ
寒風へ羊買う列のたじろがず
父からの便りは吹雪く北の海
おのりけもちよびり書いて嫁の文
お年玉予算オーバーして楽し
北風の鳴るガラス戸をみがかねば
年賀状へびのお目めがまん丸い
冬木立きりりと邪心寄せつけぬ
ブーツはいても独身にみてくれず
小雪ちらちら二人の肩に来てとまり
一歩から蘇えるごと春もえる
幸福行きの汽車なら乗ってみたい恋
しぬことのほかはピエロのそれもよし
ちっけな火種わたしの夢を燃す
虚勢張る唄は軍歌になっていた
世の中がきまらないあ牛が啼く
因習の要に光る家蛇の面

秀川 よしき 亜也子 聖地 一夢 千夢 博泉 野生 形生 弥生 入仙 好郎 善居報 静水 花炎 千代美 房緑 松緑 鬼愛 菁居 そのみ 寛子 鈍舟 蘭幸 文朽 政己 のぼら 紫光

奇術師にかかれば

カードも生きて見え

(軒太楼)

関西奇術教室

口笛のさびしさ亡母を思うとき
ふり出しへ帰る小道が消えていた
友が来て心ならずも愚妻とす
まだ焼けぬお餅へ孫の目がきれい
川柳ささやま 河原みのる報
人生の落伍に掴むものがなし
日銭掴む夕日に明日が待っている
蔓草の虚空に伸びて何掴む
掴みどり欲が指からこぼれ落ち
此の紙が明日から夫婦他人にし
さわやかな愛折り紙に揺れている
ちり紙のぬくさへそくり母がくれ
塵紙も御幣も燃えれば同じ灰
遠からず医者は皆まで云わず婦に
冬物の半額春は遠からじ
くい違い寄せて二で割るのが夫婦
くい違い掛えねばならぬ米をとぐ
弁解をすればするほどくい違い
遠からず議論に煙草ねじて消し
遠からず寄附らし寺のいたみよう

笑子 一路 英詩 かつ子 村雨 百合子 与志 無鬼 桂月 可住 越山 緑村 みのる 宗珠 近江 喜美代 深月 素水 文平

岸和田川柳會

植山

武助報

長生きの祖母は菩薩の顔となり
喜びのある人生の頼もしい

洗濯を靴一杯に帰省の子

旅行靴の底に去年のスケジュール
憎しみを越えればそこに愛が見え

偽りの愛へ虚飾で塗るルージュ
見つめ合えば人形何かいいたそう

人形の個性に合すミニを着せ
お手製の花壇に小さな緑映え

雨上り緑くつき五月晴れ
信号の緑へおしい立話

公害に負けじと街路樹の緑
水車汲む音は冬の詩

エレベーターとは人間を汲むつるべ
点滴を明日があるから耐えている

バラある日トゲのなくなる日を願ひ
寄せ書きは行儀のわるい字で埋め

川柳大阪

人生譜一区切りつけたし五十坂
庭の菊咲いて父の墓参

算盤が一番下手な質屋の子
結果みて一言居士がけちをつけ

有名門の婚約持参の血統書
有名人稲穂の頭が高くなり

茶柱もシャッキリ立った佳い話
ギャンブルは地べたをにらみながら去に

ジパンの娘荒々しく座り
質屋から出てステキが食べとなり

とりどりの菊に埋れて母眠る
ささくれた指が生活語つて

成人式ジパンを穿く娘に見えず
やっかみも手伝い花婿放り上げ

秋空に精魂こめた菊みだれ
名物を売ってる声だけ聞いてくる

名門の名前だけでは飯食えず
玄関に一鉢の菊住宅地

人生の歩は意志どおり進まない
川柳東大阪

よれよれの背広に過去のある男
新調の背広散歩がしたくなる

背広ぬぎ捨てると父の顔になる
新調の背広へ仲居酌きこぼし

背広すて妻と屋台のラーメン屋
ありふれた名前だと知る電話帳

家内には内緒で走る赤電話
失礼を詫びて電話にするお辞儀

定年後再就職は電話番
夫婦喧嘩やめて出たらし電話口

雑巾をしぼって女の朝終る
しぼるだけしぼった末の三流校

第三次まで絞られて不採用
しぼり粕食べても豚はよく太り

しぼられて絞った税吏堅く生き
ボーナス道より凡人になりはてる

結構な遣い道OLのボーナス
ボーナスが長い訓示を聞いている

妻の手に渡りボーナス羽根が生え
叱るもの亡き淋しさ屋根にのる

倉吉打吹川柳會
人生の浮沈思わぬ穴がある

人生の一刻獣のように生き
奥谷

眉水

漁子

凡風

笑秋

高士

閑呂

与志

肖二

文秋

好彦

鎮二

誓美

柳宏

儀一

肖二

三十四

綾女

美幸

雅風

弘生

あいき

柳信

凡九郎

千代子

一度

一栄

幸生

弘朗報

夕路

もう三分眠かせてほしい朝があり
月末は借金のがれに留守とさめ

お人好し何でも善意に取りたがり
自動車に乗って御輿の出る時代

盛衰を笑って時間厳然と
若嫁に里の祭が待ち遠し

大ボラを吹いてお金を借りに来る
妻の座に慣れて口実板につき

善意をえ裏にかえして受けける人
文明はタイムマシンに支配され

煙草の火借りて話の糸ほぐれ
結局は無欲で勝ったとインタビュ

ハワイ川柳ウイロー社
仲間だと思わせ機密さぐり出し

騒音も楽し仲間稼音
飲み仲間互いに嘘でかばい合い

官判押すのも仲間のまとめ役
禁酒しても話せる者は飲み仲間

華道関西末生流家元

籠島 総甫

教室 西宮市北口町七ノ九

教室 尼崎市武庫庄浅堀

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

教室 尼崎市武庫庄三丁目

勇峰

寿雄

美知夫

碧穂

伊之蔵

律子

すえの

照恵

千恵子

和栄

たつえ

弘朗

蒼蛇樓報

カルロ女

風影

北海

峯円

曉舟

— 104 —

善人で家庭の威厳保たれず
西宮北口句会

小浜

三人幸
牧人報
英二

ときに夫婦愛の楽譜を取り替える
いたわりの言葉の背に温める
三井が丘川柳会

日暮れていこばかりふりかえる
ちぎれ雲青春の夢未だ追う
泣きだけ泣けと子供を叱るなり
交通禍お地蔵さんは見てるだけ
賛成の多数に舌が凍りつき
受話器から別れを告げて声凍る
胸の中に男を殺す壺がある
トップ賞あとには下り坂がある
積乱雲女に狂いたい悶え
屋台そば囃る二月の月凍る
一枚のはがきひらひら胸に落つ
一と言の温さが胸に灯を点す
公害の街を隠した朝の雪
胸に手を当てれば神の音がする

摩耶子

正祐

末吉の三人家族に梅蕾む
春うらら雑巾一日日向ぼこ
帰省して朝寝も嬉しい掘炬燵
年寄りの朝寝に暁の夢を追う
八つ当りされた雑巾耐えてくれ
半生は雑巾に似る浮き沈み
桜茶で喜び祝う初節句
新聞少年朝寝のしたい日もあろう
春風が朝寝の窓をノックする
坂かれたハートは一瞬白くなる
うたた寝も朝寝も身重いたわれ
雑巾の絞りたらぬが氣にいらす
日雇いの朝寝に雨が降り続く

笑女
めぐる
あいき
よしのろ
博泉報

床柱拭いて雑巾叱られる
いたずらの小つちな足を拭いてやる
双葉から大樹を根ざすかわいい芽
無花果が熟れすぎている長い青春
連休も給料前で朝寝する
やさしさは雑巾にまで花模様
逆さまに植えられくわえの芽があわて
御先祖の血がそうさせている朝寝
雑巾二つに割れた切り口みるリンゴ
雑巾にふれずパートの手がきれいに
粒攪りという球根に夢托す
定年のまだまだ朝寝しておれず
ゆうもあ川柳会

漫柳報
静歩
柳宏子
垂成
小松園
珠笑
博泉
三郎
薰風
蕙也子
てまり
小路

雅号ぶっちゃけ話

せいろう



堀江正朗

(159)

本名の正夫よりも雅号にした方が良くと思
うが自分の一字を入れて正朗ではどうだろう
かと、明朗氏に言われました。正朗と書いて
「まさお」とも読めるしいい雅号だと妻も賛成してくれ
たので、四十一年一月以来正朗で親しんで戴いています。
正しく朗らかにをモットーに正々堂々と前進したいと努
力を重ねていくつもりです。息子も「正朗さん、正朗さ
ん」と呼び「正朗さんこれは句でない」と酷評も貰いま
す。時たま郵便さんが「正夫さんはこちらですか」と
首をかしげる事もあります。いつまでも元氣な正朗で精
進を続けたいと誓っています。初孫が廻らぬ舌で正朗さ
んと呼んでくれる日を楽しみに待っています。

鍼灸師(六十五歳)

この裏にまだ裏がある週刊誌
菊の季節を花屋も忘れそう
間において静かに笑う貴賓席
粉ミルク先ずメーカーを太らせる
川柳しんぐろ
大矢

十郎報
春梢
みろ
不二
てい
秀峰

退屈な顔が並んだパチンコ屋
句想ねる退屈もない老の幸
退屈が不労所得の策を練り
帰ろうよ子の退屈に助けられ
氣の乗らぬ見合い退屈とも言えず
キョロキョロと恋人を待つ駅の顔
書けぬ目がキョロキョロした受験場
顔色を読む少年の目のおびえ
キョロキョロと結局蒺の道を攪り
的追うてキョロキョロせずに辿りつき

里美
寿子
雀踊子
弘生
与史
深水
十郎
寅蔵
大輪
功

大阪府 八木 摩天郎

レイかけてもろうて花の名を知らず
顧問料も出さずずらりと名をならべ
お寺でも接待します南無阿弥陀
夢で見た母は何にもしやべらない
大学の教授の子もすべて来
情熱を昔話にして笑い
飲みに行く日は制服を着ておらず
三月・五月入れ替え多忙な松屋まち
金婚の二人の朝の物思い
金婚は愉し二人の足そろろう

鳥取県 林 瑞枝

つまずかぬコースで反省の無いもろさ
飛びつかねばチャンスに神に後髪が無い
気の抜けたビール恩師の鞭が鳴り
出迎えの口下手荷物を提げたがり
我を捨てて案山子平和に生きる知恵
季節待つ花は根を張り枝を張り
食欲なひとりを護る願いと
樞の実の落ちて大樹の夢捨てず
シグナルの運にも人生に似るあせり
強いられた寄付なら小銭も出し惜しむ

・募 集・

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「夜店」藤井一二三 選
「太鼓」時広一路 選
「短冊」市場没食子 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 菊沢小松園 選
愛染帖 (3句) 橘高薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「海水浴」小島蘭幸 選
「蟬」稲田豊作 選
「役割り」林葵丘 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま。★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一人の遅稿 大ぜい困る

6月句会は 7日 (火)

お願い!

同人費や購読費は早目にご送金ください。
ご連絡がないと送本を中止いたします。
ご協力のほどお願い申し上げます。

川柳塔社運営部

定価 四百円 (送料29円)
半年分 二千五百円 (送料共)
一年分 四千八百円 (送料共)
昭和五十二年四月二十五日印刷
昭和五十二年五月一日発行

大阪府南区饒谷中之町二〇番地

編集兼 中島蓬太郎

印刷所 藤原童心社

郵便番号 542

大阪府南区饒谷中之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一一三九八番

振替口座大阪・二二三六八番

ペンペン草・

旅人普及版

★最初は頒価千円で送料や封筒代も入れて赤字にならぬように予算を組んでおいたが、たび重なる常任理事会の席上で「これはこの紙を使いたい、ここはこ

▼葉子コーナー

▼今東光の小説のモデルで有名な道明寺が私の家の近くにあります。

▼菅原道真公が手ずから刻まれた国宝十一面観世音菩薩像があり、道真公が筑紫へ左遷される時、このお寺を訪ねて叔母の覚寿尼との別れを惜しまれた話は歌舞伎にもなっているそうです。

画したころとは物価もかなり高騰したし、今さらどうしようもないというのが運営部のあきらめである。そんなわけで、あまり残本として寝かしておけないため、この際、皆さんのご協力を願いたいと思います。

★「川柳雑誌」の四百号記念は昭和四十五年九月号だった。この思

い出を書く前に、なぜ五百号記念をやらなかつたか、という疑問が百号記念は昭和四十四年一月号だった。「川柳塔」と改題して四十号目だった。もちろん常任理事会でも、その話は出た。しかし、今もそうだが、謙虚に謙虚に信条というのが川柳の信条だったので、ついに晴れがましい五百号記念は遠慮したのであった。ちょっと惜しい気がする。

★四百号記念の時は、常任理事会と路郎先生の意見に多少の食い違いがあったようだが、大会の結果は成功だったと思う。しかし雑誌のほうはいま面白い出来栄ではなかった。四百号をお持ちの方が承知のこととおもうが、およそあれほど読みにくい本は珍しいと思う。各支部に、支部の原稿を依頼し、あわせて編集をしてもらったところ、これがヒドイもので、一ページ分のスペースに二ページ分の原稿。これをこちらでノリとハサミでやり直しのため煉獄の日々だった。わりとすっきりいったのは、本号と同じようにミニ句集を特集したことだった。だが締切日があった。追加があるたびに組み直しの連続で、ついにボクの句を没にしようなど、あれだけ苦労して自分の句を四百号に出せなかった。「川柳」では一七二氏が参加した。本誌には一九六氏のご協力を得た。お礼申し上げます。(野坂つき子さんの次号)

(不二田一三夫)

麻生路郎先生の不朽の名著



(普及版)

—A 6 版—

頒価 ¥1,000

(送料共)

「旅人」とその後の作品を百句追加してここに再現しました。

序 中島生々庵
跋 西尾 栗

52年5月8日発売

編集スタッフ 橋高薫風・谷垣史好・高杉鬼遊
・香川酔々・板尾岳人・不二田一三夫

川柳塔社
「旅人」普及版刊行会

定価 四百円（送料・本号に限り三十三円）

